

は皆悦ばれけれども、新中納言知盛卿の異見に申されけるは、假令よすま世季よすまになりて候へばとて、木曾などに語らはれて、いかてか都へ上らせ給ふべき、十善せんの帝王ていおう、三種の神器を帶して渡らせ給へば、甲を脱ぎ弓の弦をはづして、是へ降人に參れと申させ給ふべうもや候ふらん、と申されければ、大臣殿其の様を御返事ありしかども、木曾用の奉らず。入道の松殿まつどの殿下、木曾を召して、清盛公悪行人たりしかども、希代の善根をしおきたればにや、世をばおだしう二十餘年まで保ちたんなり。悪行ばかりにて、世を治むる事はなきものを、させる故なうて、押し込め奉りたる人々の官途ども、皆赦すひたすらあらべき由仰せければ、一向ひたすら荒夷えびすのやうなれども、隨ひ奉りて、押し込め奉りたる人々の官途ども、皆赦し奉る。松殿の御子師家公、其の時は未だ從二位の中納言にてましくけるを、木曾が計ひにて、大臣攝政になし奉る。折節大臣のあかさりければ、徳大寺殿その比は、内大臣の左大將にてましくけるを、借り奉りて大臣攝政になし奉

る。いつしか人の口なれば、新攝政殿をば、假かりの大臣とぞ申しける。同十二月十日の日、法皇をば五條内裏を出し奉りて、大膳太夫成忠が宿所、六條西洞院へ御幸なし奉る。同じき十三日歳末の御修法始めらる。其日除目ぢもく行はれて木曾が計ひにて、人々の官加階思ふ様になしおきてけり。平家は西國に、兵衛佐は東國に、木曾は都に張り行ふ。前漢後漢の間、三むらが世を討ち取りて、十八年治めたりしが如し。四方の關々皆閉ぢたれば、公おはせけの貢物みつぎものをも獻たてまつらず、私わたくしの年貢ねんぐものばられば、京中の上下たゞ少水せうすゐの魚に異ならず。あぶなながらも年暮れて、壽永も三年になりけり。

平家物語卷八終

平家物語卷九

小朝拜の事

壽永三年正月一日の日、院の御所大膳太夫成忠が宿所、六條西の洞院なりければ、御所の體ていしかるべからずとて、院の拜禮も行はれず。院の拜禮なかりければ、内裡の小朝拜こてうはいも行はれず。平家は讃岐の國八島の磯いそに送りむかへて、年の始なれども、元日、元三ぐわんさんの儀式事よろしからず。主上渡らせ給へども、節會せつえいも行はれず。四方拜よなたがひもなし。腹赤はらかも奏せず。吉野の國柄くづも参らず。世亂れたりしかども、都にては流石さすかかくはなかりしものとぞ、各宣ひあはれける。青陽あおぞらの春も來り、浦吹く風も柔かに、日影も長閑になり行けど、平家の人々は、いつも氷に閉ぢ籠められたる心地して、寒苦かんく島に異ならず。東岸西岸の柳遅速ちやく

をまじへ、南枝北枝の梅開落既にことにして、花の朝、月の夜、詩歌管絃、
鞠、小弓、扇合、繪合、草づくし、蟲づくし、様々興ありし事ども、思ひ
出て語り續けて、長き日を暮しかれ給ふぞあはれなる。

宇治川の事

同正月十一日、木曾左馬頭義仲院參して、平家追討のため、西國へ發向すべ
き由奏聞す。同じき十三日、既に門出すと聞えしかば、鎌倉の前右兵衛佐頼朝、
木曾が狼籍静めんとして、範頼義經を先として、數萬騎の軍兵をさし上せられ
けるが、既に美濃の國、伊勢の國にも着くと聞えしかば、木曾大に驚き、宇治
勢田の橋を引きて、軍兵共を分ち遣す。折節勢、そなかりけれ、先づ勢田の橋
へは大手なればとて、今井四郎兼平、八百餘騎にて差し遣す。宇治橋へは仁科、
高梨、山田次郎、五百餘騎にて遣しけり。一口へは、伯父の志田の三郎先生
義教、三百餘騎にて向ひけり。さる程に、東國より攻めのぼる、大手の大將軍

には、蒲の御曹子範頼、搦手の大將軍には、九郎御曹子義經、宗徒の大名三十
餘人、都合其勢六萬餘騎とぞ聞えし。其頃鎌倉殿には、生食、磨墨とて、聞ゆ
る名馬ありけり。生食をば梶原源太景季、頻に所望申しけれども、是は至然の
事あらん時、頼朝が物具して乗るべき馬なり。是も劣らぬ名馬ぞとて、梶原に
は磨墨をこそ賜ひてけれ。其の後近江の國の住人、佐々木四郎の御暇申しに參
られたるに、鎌倉殿如何思し召されけん、所望の者はいくらありけれども、其
の旨存知せよとて、生食をば佐々木に賜ふ。佐々木畏りて申しけるは、今度此
の御馬にて、宇治川の眞先渡し候ふべし。若し死にたりと聞し召され候は、
人に先をせられてけりと、思し召され候ふべし。未だ生きたりと聞し召し候は
い、定めて先陣をば高綱ぞしつらんものと、思し召され候へとて、御前を罷
り立つ。參會したる大名小名あつばれ荒涼の申すやうかなどぞ、人々さゝ
やき合はれける。各鎌倉を立ちて、足柄を経て行くもあり、箱根にかゝる勢も

あり、思ひくく上る程に、駿河の國浮島が原にて梶原源太景季、高き所に打ち上り、暫くひかへて、多くの馬共を見けるに、思ひくくの鞍置かせ、いろくの鞍かけ、或は乗口に引かせ、或は諸口に引かせ、幾千萬といふ數を知らず、引き通しくしける中にも、景季が賜りたる磨墨に、勝る馬こそなかりけれど、嬉しう思ひて見る所に、爰に生食と思しき馬こそ、一騎出で來たれ。金覆輪の鞍置かせ、小總の鞍かけ、白響はげ、白泡かませて、舍人數多附けたりけれども、獨引も撓めず、跳らせてこそ出で來たれ。梶原打ち寄りて、是は誰が御馬ぞ。佐々木殿の御馬候ふと申す。佐々木は、三郎殿か、四郎殿か。四郎殿の御馬候ふとて曳き通す。梶原安からぬことなり、同じやうに召し使はるゝ景季を、佐々木に思し召し替へられけるこそ遺恨の次第なれ。今度都へのぼり、木曾殿の御内に、四天王と聞ゆる、今井、樋口、楯、根井と組みて死ぬるか、然らずば西國へ向ひて、一人當千と聞ゆる平家の侍共と軍して、死なんとこそ

思ひしに、此の御氣色にては、それも詮なし。詮ずる所、こゝにて佐々木を待ち受け、引き組み差しちがへ、能き侍二人死にて、鎌倉殿に損とらせ奉らんと、つぶやきてこそ待ちかけたれ。佐々木何心もなう歩ませて出で來り。梶原押し並べてや組む、向ふ様にあてや落すべきと思ひけるが、先づ詞をぞかけし。いかに佐々木殿は、生食賜らせ給ひて、上らせ給ふなといひければ、佐々木あつばれこの仁も、内々所望申しつると聞きしものをと思ひ、さ候へば、今度此の御大事に罷り上り候ふが、定めて宇治勢田の橋をや引きたるらん、乗りて河を渡すべき馬はなし。生食を申さばやとは存じつれど、御邊の申させ給ふだに御許されなきと承りて、まして高綱などが申すとも、よも賜らじと思ひ、後日にいかならん御勘當もあらばあれと存じつゝ、曉立たんとの夜、舍人に心を合せて、さしも御祕藏の生食を、盗みすまして上り、さらばいかに、梶原殿といひければ、梶原、此の詞に腹がいて、ねつたいさらば、景季も盗むべかり

けるものをとて、咄と笑ひてぞ退きにける。佐々木四郎の賜はれたる御馬は、黒栗毛なる馬の、極めて太う逞しきが、馬をも人をも、あたりを拂ひて喰ひければ、生食とはつけられたり。八寸の馬とぞ聞えし。梶原が賜はりたりける御馬も極めて太う逞しきが、誠に黒かりければ、磨墨とばつけられたり。何れも劣らぬ名馬なり。さる程に、東國より攻め上る大手搦手の軍兵、尾張の國より、二手に分ちて攻め上る。大手の大將軍には、蒲の御曹子範頼、相伴ふ人々、武田の太郎、加賀見の次郎、一條の次郎、板垣の三郎、稻毛の三郎、榛谷の四郎熊谷の次郎、猪股の小平六を先として、都合其勢三萬五千餘騎、近江の國野路篠原にぞ陣をとる。搦手の大將軍には、九郎御曹子義經、同じく伴ふ人々、安田の三郎、大内の太郎、畠山の庄司次郎、梶原源太、佐々木四郎、糟屋の藤太、濫屋の右馬の允、平山の武者所を先として、都合其勢二萬五千餘騎、伊賀の國を経て、宇治橋の詰にぞ押し寄せたる。宇治も勢田も橋を引き、水の底

には亂杭打ちて大綱張り、逆木繋ぎて流しかけたり。比は睦月二十日餘のことなれば、比良の高根、志賀の山、昔ながらの雪も消え、谷々の氷打ち解けて、水は折ふしまさりたり。白浪夥しう漲り落ち、瀬枕大に瀧鳴りて、逆巻く水も早かりけり。夜は既にほのくくと明け行けど、川霧深く立ち籠めて、馬の毛も鎧の毛もさだかならず。大將軍九郎御曹子、河の端に打ち出で、水の面を見渡して、人々の心を見んとや思はれけん、淀一口へや向ふべき、又河内路へや廻るべき、水の落足や待つべき、如何せんと宣ふ所に、こゝに武藏の國の住人、畠山の庄司次郎重忠、生年廿一になりけるが、進み出で、此の河の御沙汰は、鎌倉にても能々候ひしぞかし。かねても知し召されぬ海河の、俄に出で來ても候はじこそ。近江の湖の末なれば、待つともく水干まじ。橋をば又誰かは渡して參らすべき。去ぬる治承の合戦に、足利の又太郎忠綱、生年十七歳にて渡しけるも、鬼神にてはよもあらじ、重忠先づ瀬踏仕らんとて、丹の巖を

宗として、五百餘騎ひし／＼と礮を並ぶる所に、玆に平等院の坤、橋の小島が崎より武者二騎、引懸け／＼出て來り。一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木の四郎高綱なり。人目には何とも見えざりけれども、内々先に心かけたるらん、梶原は佐々木に一反ばかりぞ進みたる。佐々木、いかに梶原殿、此の川は西國一の大河ぞや、腹帯の延びて見え候ふぞ、しめ給へといひければ、梶原さもあらんとや思ひけん、手綱を馬の揺髪に捨て、左右の鐙を踏みすかし、腹帯を解きてぞしめたりける。佐々木そのひまに、其處をつと走せ抜きて、河へ颯とぞ打入りたる。梶原誑られぬとや思ひけん、馳て續きて打ち入りたり。梶原、いかに佐々木殿、高名せうとて不覺し給ふな、水の底には大綱あるらん、心得給へといひければ、佐々木さもあらんとや思ひけん、太刀を抜きて、馬の足にかゝりける大綱共を、ふつ／＼と打切り／＼、宇治川早しといへども、生食といふ世一の馬には乗りたりけり。一文字にさつと渡して、向の岸にぞ打ち

上りたる。梶原の乗りたりける磨墨は、川中より籠繋形に押し流され、遙の下まり打ち上げたり。其の後佐々木、鐙踏張り立ち上り、大音聲をあげて、宇多天皇に九代の後胤、近江の國の住人、佐々木三郎義秀が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや、とぞ名乗りたる。畠山五百餘騎打ち入りて渡す。向の岸より山田の次郎が放つ矢に、畠山馬の額を笠深に射させぬれば、弓杖を突きて下り立ちたり。岩波、兜の先へさつと押し掛け、れども、畠山是を事ともせず、水の底をくゞりて、向の岸にぞ着きにける。打ち上らんとする所に、後より物こそむずと扣へたれ。誰ぞと問へば、重親と答ふ。大串か。さん候。大串の次郎は、畠山がためには烏帽子子にてぞ候ひける。餘に水が早うて、馬をば川中より押し流され候ひぬ。力及ばで是まで着き参りて候ふといひければ、畠山いづも和殿原がやうなる者は、重忠にこそ助けられんずれといふまゝに、大串を掴みて、岸の上へぞ投げ上げた。投げ上げられてたゞなほり、太刀を抜きて

額に宛て、大音聲を上げて、武藏の國の住人、大串次郎重親、宇治川の歩立の先陣ぞやとぞ名乗りたる。敵も味方も是を聞きて、一度にとつとぞ笑ひける。其の後畠山乗替のりかへに乗りて、喚きて駈かく。爰に魚陵の直垂に緋威の鎧よろい着れんせんあし連錢れんせんあし蘆毛あしなる馬に金覆輪の鞍を置きて、乗りたりける武者一騎、まづ先に進みたるを、畠山爰に駈かくるは何者ぞ、名乗れやといひければ、是は木曾殿の家の子に、長瀬判官代重綱と名のる。畠山、今日の軍神ぐんじん視みはんとて、押し並べてむづと組みて引き落し、我が乗りたりける鞍の前輪に押しつけ、些とも働かさず、首ねぢ切りて、本田の次郎が、鞍のとつ附にこそつけさせけれ。是を始めて、宇治橋固かためたりける兵共、暫し支さへて防ぎ戦ふといへども、東國の大勢皆渡りて攻めければ、力及ばず、木幡山こばた、伏見を差してぞ落ち行きける。瀬田をば、稻毛の三郎重成が計ひにて、田上たながみの供御くごの瀬をこそわたしけれ。

河原合戦の事

軍破れにければ、九郎御曹子義經、飛脚ひやくを以て、鎌倉殿へ合戦の次第を、委くしう記きして申されけり。鎌倉殿此の御使に、佐々木はいかにと御尋ありければ、宇治川の眞先まづさき候と申す。さて日記を開きて見給へば、宇治川の先陣佐々木四郎高綱、二陣梶原源太景季とぞ書かれたる。宇治勢田敗れぬと聞えしかば、木曾は最後の暇いとま申さんとして、院の御所六條殿へ馳せまゐる。木曾門前まで参りたりしかども、さして奏すべき旨もなくして、取りてかへし、六條鎌倉なる所に、始めて見そめたりける女房のありければ、そこに打ち寄りて、最後の名残なごり惜まんとて、頼たのみに出でもやらざりけり。こゝに新参にいまゐりしたりける、越後の中太家光といふ者あり。御敵既に河原まで攻め入りて候ふに、何とて左様に打ち解けては渡らせ給ひ候ふやらん、只今犬死せさせ候ひなんぞ、疾とうく御出で候へと申しけれども、猶出てもやらざりければ、左候は、家光は先づ先立ち参らせて、死出しでの山にてこそ待ち参らせ候はめとて、腹掻き切りてぞ死しにける。木

會これ我を勤むる自害にこそとて、やがて打ち立ち給ひけり。爰に上野の國の住人、那波太郎廣純を先として、其の勢百騎ばかりには過ぎざりけり。六條河原に打ち出て見れば、東國の勢とおぼしくて、先づ三十騎ばかりにて出て來る。其中より武者二騎先に進みたる、一騎は鹽谷五郎惟廣、一騎は勅使河原の五三郎有直なり。鹽谷が申しけるは、後陣の勢をや待つべき。又勅使河原が申しけるは、一陣破れぬれば、殘黨全からず、たゞ蒐けよとて、をめいてかく。木曾は今日を最後と戦へば、東國の大勢、木曾を中に取り籠めて、我討ち取らんとぞ進みける。大將軍九郎御曹子義經、軍をば軍兵共にせさせ、我身は院の御所の覺束なきに、守護し奉らんとて、混兜五六騎、院の御所六條殿へ馳せ參る。御所には、大膳太夫成忠、御所の東の築垣の上に昇り上りて、戰慄々々見渡せば、武士五六騎退兜に戦ひなりて、射向の袖春風に吹き靡か、白旗さつと差しあげ、黒煙蹴立て、馳せまゐる。成忠あな淺まし、木曾が

又參り候ふと申しければ、院中の公卿殿上人傍の女房邊にいたるまで、今度ぞ世の失せはてとて、手を握り、立てぬ願もましまさず。成忠重ねて奏聞しけるは、今日始めて都へ入る、東國の武士と覺え候、いかさまにも皆笠印が替りて候ふと申しも果てぬに、大將軍九郎御曹子義經、門前にて馬より下り、門を叩かせ、大音聲を上げて、鎌倉の前右兵衛佐頼朝が弟九郎義經こそ、宇治の手を攻め敗りて、此の御所守護のために馳せ參り候へ、明けて入れさせ給へと申されたりければ、成忠あまりの嬉しさに、急ぎ築垣の上より踊り下るとして、腰に突き損じたりけれども、痛さは嬉しさに紛れて覺えず、這ふく御所へ參りて、此由奏聞したりければ、法皇大に御感ありて、門をあけさせてぞ入れられける。義經その日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧着て、鍬形打ちたる甲の緒をしめ、鍬金作の太刀を佩き、廿四さしたる切符の矢負ひ、滋藤の弓の鳥打の本を、紙を廣さ一寸ばかりに切りて、左巻に卷きたる、是

ぞ今日の大將軍の印しるしとは見えし。法皇中門の連子ねんこより觀覽ありて、ゆゝしげなる者どもかな、皆名乗らせよと仰せければ、先づ大將軍九郎義經、次に安田の三郎義定、畠山の庄司次郎重忠、梶原源太景季、佐々木四郎高綱、澁谷右馬九重資とぞ名乗りたる。義經具して、武士は六人、鎧は色々替りたりけれども、つらたましひ頼魂たのたましひ骨がらほねがらいづれも劣らず、成忠おはせ仰承りて、義經を大床おほせの際へ召して、合戦の次第を委しう御尋あり。義經長りて申されけるは、鎌倉の前右兵衛佐頼朝木曾が狼籍しづめんとて、範頼義經を先として、都合六萬餘騎をさし上せ候ふが、範頼は瀬田より参り候へども、未だ一騎も見え候はず、義經は宇治の手を攻め敗りて、此の御所守護のために馳せ参じて候へ、木曾は河原をのぼりに落ち候ひつるを、軍兵共を以て追はせ候ひつるが、今は定めて討ち取り候ひなんと、事もなげにぞ申されける。法皇大に御感ありて、又木曾が餘黨など参りて、狼籍しぞ仕る。汝は此の御所よくく守護仕れと仰せければ、長り承り

て、四方の門を固めて待つ程に、兵共馳せ集りて、程なく一萬餘騎ばかりになりけり。木曾は至然の事あらば、法皇を取り奉りて、西國へ落ち下り、平家と一にならんとて、力者廿人揃へて待ちたりけれども、御所には又九郎義經参りて嚴しう守護し奉ると聞きて、今は叶はじとや思ひけん、河原をのぼりに落ち行きけるが、六條河原と三條河原との間に、既に討取らんとする事度々に及ぶ。木曾涙を流して、斯くあるべしとも期こしたりせば、今井を瀬田へは遣やらざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所にて死なんとこそ契ゆくへりしか、今は所々にて討たれん事こそ悲しけれ。さりながら今一度今井が行方を聞かんとて、河原をのぼりにかゝる程に、六條河原と三條河原との間に、敵襲かそひかゝれば、取りて返し、木曾僅なる小勢にて、雲霞の如くなる敵の大勢を五六度まで追ひかへし、賀茂川さつと打ちわたり、粟田口松坂にもかゝりけり。去年信濃を出てしには、五萬餘騎と聞えしが、今日四宮しのみやがはら河原を過ぐるには、主従七騎

になりけり。まして中有ちゆうちゆうの旅の空、思ひやられて哀れなり。

木曾の最後の事

木曾は信濃を出てしより、巴ともみ山吹やまぶきとて、二人の美女を具せられたり。山吹はいたはりありて都に止りぬ。中にも巴は色白う髪長く、容顔誠に美麗なり。風くつきやう竟あきらまのりの荒馬乗の悪所をおとし、弓矢打物取りては、如何なる鬼にも神にもあふといふ一人當千の兵なり。されば軍といふ時は、札さねよき鎧着せ、強弓大太刀持たせて、一方の大將に向けられけるに、度々の高名肩を比ぶる者なし。されば今度も多くの者、落ちうせ討たれたる中に、七騎が中までも、巴は討たれざりけり。木曾は長坂を経て、丹波路へとも聞ゆ。龍華りうけ越にかゝりて、又北國へとも聞えけり。かゝりしかども、今井の行末の覺束なさに、取りて返して、勢田の方へぞ落ち行き給ふ。今井の四郎兼平も、八百餘騎にて勢田を固めたりけるが、五十騎ばかりに討ちなされ、旗をば巻かせて持たせつゝ、主の行方ゆくへのお

ぼつかなきに、都の方へのぼる程に、大津の打出の濱にて、木曾殿に行き逢ひ奉る。中一町ばかりより、互にそれと見知りて、主従駒を早めて寄り合ひたり。木曾殿今井が手を取りての給ひけるは、義仲六條河原にて、いかにもなるべかりしかども、汝が行方の覺束なさに、多くの敵に後うしろを見せて、是まで遁れたるはいかにと宣へば、今井の四郎御説ちやう誠に忝ちやうう候、兼平も勢田にて討死仕るべう候ひしかども、御行方の覺束なさに、是まで遁れ参りて候と申しければ、木曾殿、借は契未だ朽ちせざりけり。義仲が勢山林に馳せ散りて、此邊にも扣へたるらんぞ、汝が旗、上げさせよと宣へば、巻きて持せたる今井が旗さし上げたり。是を見つけて、京より落つる勢せいともなく、又勢田より参る者ともなく、馳せ集りて、程なく三百騎ばかりになり給ひぬ。木曾殿斜ならず喜びて、此勢にては、最後の軍一軍いくばなどかせざるべき。あれに時雨しぐらて見ゆるは、誰が手やらん。甲斐の一條の次郎殿の御手とこそ承りて候へ。勢はいか程あらん、六千餘

騎と聞え候。さては互によき敵、同じう死ぬるとも、大勢の中へかけ入り、龍
 き敵に逢ひてこそ討死をもせめとて、眞先にぞ進み給ふ。木曾殿其の日の装束
 には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧きて嚴物づくりの太刀を佩き、鍬形打ち
 たる甲の緒をしめ、二十四差したる石打の矢の、其日の軍に射て、少々残りた
 るを頭高に負ひなし、滋藤の弓の眞中取りて、聞ゆる木曾の鬼草毛といふ馬に、
 金覆輪の鞍を置きて乗りたりけるが、燈踏張り立ち上り、大音聲を上げて、日
 頃は聞きけんものを、木曾の冠者今は見るらん。左馬頭兼伊豫守、朝日の將軍
 源の義仲ぞや、甲斐の一條次郎とこそ聞け、義仲討ちて兵衛佐に見せよとて、
 喚きて蒐く。一條の次郎これ聞きて、只今名のるは大將軍ぞや、餘すな者ど
 も、洩らすな若黨、討てやとて、大勢の中に取りこめ、我打取らんとぞ進みけ
 る。木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ蒐け入り、堅様、横様、蜘蛛手、十文字に
 かけ破りて、後へつと出てたれば、五十騎ばかりになりけり。そこを破りて

行く程に、土肥の二郎實平、二千餘騎にて支へたり。そこをも破りて行く程に、
 あそこにては四五百騎、こゝにては二三百騎、百四五十騎、百騎ばかりが中を、
 蒐けわり蒐けわり行く程に、主従五騎にぞなりにける。五騎が中までも、巴は
 討たれざりけり。曾殿巴を召して、おのれは女なれば、是より疾うく何地
 へも落ち候。討死をせんずるなり。若し人手にかゝらずば、自害をせ
 んず。義軍に、女を具したりなどいはれん事、口惜しかるべしと宣
 へども、なほ落も行かさりけるが、餘に強ういはれ奉りて、哀れよからう敵の出
 て來よかし、木曾殿に最後の軍して見せ奉らんとて、控へて敵をまつ所に、爰
 に武藏の國の住人、御田の八郎師重といふ大力の剛の者、三十騎許りにて出て
 來る。巴その中へ割りて入り、先づ御田の八郎に押し並べ、むずと組んで引き
 落し、我乗りたりける鞍の前輪におしつけて、些とも働らかさず、首れち切り
 て捨てしけり。其の後物具脱ぎ棄てし、東國の方へぞ落ち行きける。手塚の太

那討死す。手塚の別當落ちにけり。木曾殿今井四郎、只差二騎になりての給ひけるは、日頃は何か覺えぬ鎧が、今日は重なりたるぞやまの給へば、今井の四郎申しけるは、御身も未だ疲れさせ給ひ候はず、御馬も弱り候はず、何に依りて一領の御着長を、俄に重うは思し召され候ふべき。

が候はれば、憶病にてこそさは思し召し候ふらめ。兼平一騎をば、餘の武者千騎と思し召し候ふべし。爰に射残したる矢七つ入つ候へば、暫く防矢仕り候はん。あれに見え候は、栗津の松原と申し候、君はあの松の中へ入らせ給ひて、静に御自害候へとて、討ちて行く程に、又荒手の武者五十騎ばかりにて出て來る。兼平は此の御敵暫く防ぎ參らせ候ふべし、君はあの松の中へ入らせ給へと申しければ、義仲六條河原にて、いかにもなるべかりしかども、汝と一所にて、いかにもなりなん爲こそ、多くの敵に後を見せて、是まで遁れたんなり。所々にて討たれんより、一所にてこそ討死をもせめとて、馬の鼻を並べて、既に蒐

けんとし給へば、今井の四郎急ぎ馬より飛びおり、主の馬の承韉に取りつき、涙をばらりと流して、弓矢取は年比日比いかなる高名候へども、最後に不覺しぬれば、長き暇にて候ふなり。御身も疲れさせ給ひ候ひぬ。御馬も弱りて候、いふがひなき人の郎等に組み落されて、討たれさせ給ひ候ひなば、さしも日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、何某が郎等の手にかけて、討ち奉りたりなどいはいれん事、口惜しかるべし、唯理を曲げて、あの松の中へ入らせ給へと申しければ、木曾さらばとて、唯一騎栗津の松原へぞ蒐け給ふ。今井の四郎取りて返し、五十騎ばかりが勢の中へ蒐け入り、鎧踏張り立ち上り、大音聲をあげて、遠からん者は音にもきけ、近からん人は目にも見給へ、木曾殿の乳母子に、今井の四郎兼平とて、生年三十三に罷りなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも知し召されたるらんど、兼平討ちて兵衛佐殿の御見參に入れよやとて、射残したる八筋の矢を、差しつめ引きつめ散々に射る。死生は知らず、矢

庭に入騎射落し、その後太刀を抜きて切り廻るに、面を合するものぞなき。只射取れや〜とて、差しつめ引きつめ散々に射けれども、鎧よければ裏かゝず、明間あきまを射れば手も負はず、木曾殿は唯一騎、栗津の松原へぞ蒐け給ふ。比は正月廿一日、入相いひあひばかりの比なるに、薄氷はりたりけり。深田ふけだありとも知らずして、馬を颯と打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれども〜、打てども〜働かず。かゝりしかども、今井が行方の覺束なさに、振り仰ぎ給ふ所を、相模の國の住人、三浦石田の次郎爲久、追つかゝりよつびきてひようと放つ。木曾殿は内甲うちかぶと射させ、痛手いたでなれば、兜の眞中まつかよを馬の頭に押し當て、うつぶし給ふ所を、石田が郎等二人落ち合ひて、既に御首をば賜りけり。やがて首をば太刀の先に貫き、高く指し上げ、大音聲をあげて、此の日頃日本國に、鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、三浦の石田の次郎爲久が、討ち奉るぞやと名乗りければ、今井の四郎は軍しけるが、是を聞きて、今は誰をか庇かばはんと

て軍をばすべき、是見給へ、東國の殿原、日本一の剛の者の自害する手本よとて、太刀の鋒きつさきを口に含み、馬より逆に飛び落ち、貫かつてぞ亡せにける。

樋口のさられの事

今井の兄の樋口の次郎兼光は、十郎藏人討たんとて、其の勢五百餘騎にて、河内國長野の城へ越えたりけるが、そこにては討ち洩しぬ。紀伊の國名草に在りと聞きて、やがて續きて寄せたりけるが、都に軍ありと聞き、取りて返しほる程に、淀の大渡の橋にて、今井が下人げにんに行き逢ひたり。是はされば何地へとて渡らせ給ひ候ふやらん、都には軍出て来て、君は討たれさせ給ひぬ。今井殿も御自害候ふといひければ、樋口次郎涙をばら〜と流して、是聞き給へ殿原、君に御志思ひ参らせん人々は、是より疾う〜いづちへも落ち行き、如何ならん乞食頭陀こじきづだの行ぎやうをもして、君の御菩提を弔ひ参らせ給へ。兼光は都へ上り討死して、其土にても君の御見参に入れ、今井をも今一度見ばやと思ふた

めなりとて、討ちて行く程に、五百餘騎の兵共、あそここゝに扣へく落ち行く程に、鳥羽の南の門を過ぐるには、其の勢僅に二十餘騎にぞなりにける。樋口の次郎、今日既に都に入ると聞えしかば、黨も高家も、七條、朱雀、作道、四塚へ馳せ向ふ。●●が手に茅野の太郎光廣といふ者あり。四塚に幾らもありける勢の中へ蒐け入り。●踏張り立ち上り、大音聲を揚げ、此勢の中に、甲斐の一條の次郎の御手の人やまします、と問ひければ、一條次郎が手にてなければ、軍はせぬか、誰にもあへかして、どつと笑ふ。笑はれて名乗りけるは、かう申す者は、信濃の國諏訪の上の宮の住人、茅野の太夫光家が子に、茅野の太郎光廣といふものなり。必ず一條次郎殿の御手の人を尋ぬるにはあらず、弟の七郎それにより、子供二人信濃國に置きたるが、あつばれ我父は善うてや死にたるらん、悪しうてや死にたるらんと、歎かんずる處に、弟の七郎が前にて討死して、子供に慥に聞せんと思ふためなり。敵をば嫌ふまじとて、あれに馳

せあひ、是に馳せあひ、武者三騎切りて落し、四人に當る敵に押し並べ、むずと組み、どうと落ち、差し違へてぞ死にける。樋口の次郎は、兒玉黨にむすぼられたりければ、兒玉の人ども寄り合ひて、抑々弓矢取の、我も人も廣き中へ入るといふは、自然の時一先づ息をも繼ぎ、暫しの命を生かうと思ふためなり。されば樋口が我等にむすぼられけんも、さこそありけめ。命ばかりを助けんとて、樋口が許へ使者を立て、木曾殿の御内に、今井、樋口、楯、根井と聞えさせ給ひて候へども、木曾殿討たれさせ給ひ候ひぬ。今井殿も御自害候ふ上は何か苦しう候ふべき。我等が中へ降人になり給へ、今度の勳功の賞に申し替へて、御命ばかりをば助け奉らんと、いひ送たりければ、樋口の次郎は聞ゆる兵なりしかども、運や盡きにけん、おめくくと兒玉黨の中へ、降人にこそなりにけれ。大將軍範頼義經に、此の由を申す。院へ窺ひ申されたりければ、院中の公卿殿上人、局の女房女の童に至るまで、木曾が法住寺殿へ寄せて、御所

に火をかけ焼き亡し、多くの高僧貴僧を失ひたりしには、あそこにもこゝにも、今井樋口といふ聲のみこそありしか、是等を助けられんは、無下に口惜しかるべしと、口々に申されたりければ、叶はずして、又死罪にぞ定められける。同じ廿二日、新攝政殿停められさせ給ひて、元の攝政還着し給ふ。僅六十一日の内に替られさせ給ひぬれば、いまだ見果てぬ夢の如し。昔栗田の關白は、慶申の後、只七日だにありしぞかし。是は六十日とは申せども、其間に節會も除目も行はれれば、思出なきにあらず。同じ廿四日、木曾左馬頭餘黨五人が首、都へ入れて大路を渡さる。樋口の次郎は降人たりしが、頻に首の供せんと申しければ、さらばとて、藍摺の直垂、立烏帽子にてぞ渡されける。明くる廿五日樋口の次郎遂に斬られにけり。範頼義經様々に申されけれども、今井、樋口、楯、根井とて、木曾が四天王のその一なれば、是等を助けられんは、養虎の患あるべしとて、殊に沙汰ありて、斬られけるとぞ聞えし。傳に聞く、

虎狼の國衰へて、諸侯蜂の如くに起りし時、浦公先に咸陽宮へ入るといへども、項羽が後に來らんことを恐れて、妻は美人をも犯さず、金銀珠玉をも掠めず、徒らに函谷の關を守りて、漸々に敵を亡し、天下を治することを得たりき。されば今の木曾の左馬の頭も、先づ都へ入るといふとも、頼朝朝臣の命に従はましかば、彼浦公が謀には劣らざらまし。さる程に、平家は去年の冬の頃より、讃岐の國八島の磯を出て、攝津の國難波潟へ押し渡り、西は一の谷を城廓に構へ、東は生田の森を、大手の木戸口とぞ定めける。その間、福原、兵庫、板宿、須磨に籠る勢、山陽道八箇國、南海道六箇國、都合十四箇國を打ち從へて、召さるゝ所の軍兵、十萬餘騎とぞ聞えし。一の谷は北は山、南は海、口は狭くて奥弘し。岸高くして、屏風を立てたるに異ならず。北の山際より、南の海の遠淺まで、大石を重ねあげ、大木を伐りて逆木に引き、深き所には大船どもをそばだて、楯楯にかき、城の面の高櫓には、四國鎮西の兵ども、甲冑弓

箭を帯して、雲霞の如くに並み居たり。櫓の前には鞍置馬ども十重廿重に引き立てたり。常に太鼓を打ちて亂聲す。一張の弓の勢は、半月の胸の前にかゝり、三尺の劔の光は、秋霜の腰の間に横へたり。高き所には赤旗多く打ち立てたれば、春風に吹かれて天に翻へるは、只火炎の燃えあがるに異ならず。

六度合戦の事

さる程に、平家一の谷へ渡り給ひて後は、四國の者共一向従ひ奉らず、中にも阿波讃岐の在廳等、皆平家を背きて、源氏に心を通はしけるが、さすが昨日今日まで、平家に隨ひ奉りたる身の、今日始めて源氏へ参りたりとも、よも用ぬ給はじ。平家に矢一つ射かけ奉りて、それを面にして参らんとて、門脇の平中納言教盛、越前の三位通盛、能登の守教經、父子三人、備前の國下津井にましますと聞きて、兵船十餘艘にてぞ寄せたりける。能登殿大に怒りて、昨日今日まで、我等が馬の草きつたる奴原が、いつしか契を變ずるにこそあん

なれ。其備ならば、一人も洩さず討てやとて、小船共押し浮べて追はれければ、四國の者ども、人目ばかりに、矢一つ射て退かんとこそ思ひしに、能登殿に餘に手痛う攻められ奉りて、叶はじと思ひけん、遠負にして引退き、淡路の國福良の泊につきにけり。其の國に源氏二人ありと聞えけれ。故六條の判官爲義が末子、加茂の冠者義嗣、淡路の冠者義久と聞えしを、大將に頼みて、城廓を構へて待つ處に、能登殿押し寄せて散々に攻め給へば、加茂の冠者討死す。淡路の冠者は痛手負ひて、生擒にこそせられけれ。残り留りて、防矢射ける者ども二百三十餘人が首斬り懸けさせ、討手の交名しるして、福原へこそ進らせられけれ。それより門脇殿は、一の谷へぞ参られける。子息達は、伊豫の河野の四郎が召せども参らぬを攻めんとて、四國へぞ渡られける。兄越前の三位通盛卿は、阿波の國花園城にぞ着き給ふ。弟能登の守教經は、讃岐の入島に着き給ふ由聞えしかば、伊豫の國の住人、河野の四郎通信は、安藝の國の住人、奴田

の次郎は、母方の伯父おぢなりければ、一つにならんとて、安藝の國へ推し渡る。能登殿此の由を聞き給ひて、八島を立ちて追はれけるが、其日は備後の國みのしまといふ所に着きて、次の日奴田ぬたの城へぞ寄せられける。奴田の次郎、河野の四郎一つになりて、城廓を構へて待つ所に、能登殿やがて推し寄せて、散々に攻め給へば、奴田の次郎叶はじと思ひけん、甲を脱ぎ弓の弦をはづして、降人にまゐる。河野は猶も順はず、其の勢五百餘騎ありけるが、五十騎ばかりに討ちなされ、城を落ちて行く處に、能登殿の侍に、平八兵衛ためかず爲員といふ者、二百騎ばかりが中に取籠とりこめられ、主従七騎にうちなされ、助舟に乘らんとて、細道に懸りて、汀みぎはの方へ落ち行く處を、八兵衛が子息讚岐の七郎義範、屈くつきやう竟の弓の上手なりければ、追懸り能引よつひいて、七騎を五騎射落す、主従二騎にぞなりにける。河野が身に替へて、思ひける郎等に、讚岐七郎押し並べ、むづと組みてどうと落つ。取りて抑へて首を播かんとする所に、河野の四郎取りて返して、

我郎等の上なる讚岐の七郎が首播き切りて、深田へ投げ入れ、大音聲を揚げて、伊豫國の住人、河野の四郎越智をちの通信、生年二十一、軍をば斯うこそすれ、我と思はん人々は、寄りて留めよやと名乗り捨て、郎等を肩に引懸け、其處をばなつく逃げ延び、伊豫の國へ推しわたる。能登殿、河野をば討ち漏されたりけれども、奴田の次郎が降人たるを召し具して、一の谷へぞ參られける。又阿波の國の住人、安摩あまの六郎忠景、是も平家を背きて、源氏に心を通はしけるが、大船二艘に兵糧ひやうらうまい米積み、物具入れ、都を指して上りけるを、能登殿福原にて、此の由を聞き給ひて、小舟共押し浮べて追はれければ、西の宮の沖にて返し合せて防ぎ戦ふ。能登殿、餘すな洩らすなとて、散々に攻め給へば、安摩あまの六郎叶はじと思ひけん、和泉の吹飯ふけひの浦に楯籠たてこもる。又紀伊の國の住人、園部兵衛忠康、是も平家に心よからざりけるが、安摩の六郎が能登殿に手痛う攻められ牽りて、和泉の吹飯の浦にありと聞きて、其の勢百騎ばかりにて、和泉の國へ

打ち越えて、安摩の六郎園邊の兵衛一になりて、城廓を構へて待つ處に、能登殿やが推し寄せて、散々に攻め給へば、安摩の六郎園邊の兵衛、叶はじと思ひけん、身がらは逃げて京へ上る。残り留りて防矢射ける兵共、百三十餘人が首切りて、福原へこそ参られけれ。又豊後の國の住人、臼杵次郎惟隆、緒方三郎惟義、伊豫の國の住人、河野四郎通信一になりて、都合其の勢二千餘人、小船共に取り乗りて、備前の國へ推しわたり、今木の城に楯籠る。能登殿福原にて此の由を聞き給ひて、安からぬ事なりとて、其の勢三千餘騎にて、備前の國へ馳せ下り、今木の城を攻め給ふ。能登殿、きやつ原は、こはい御敵にて候、重ねて勢せいを給はるべき由申されたりければ、福原より數萬騎の軍兵を指し向けらる、由聞えしかば、城の内の兵共、手の際戦きはひ、分捕高名し、極めて敵は多勢なり、味方は小勢なりければ取り籠められて叶ふまじ、こゝをば落ちて、暫時の息をつけやとて、臼杵の次郎惟隆、緒方の三郎惟義は、豊後の國へ押し渡

り、河野は伊豫へぞ渡りける。能登殿、今は攻むべき敵なしとて、福原へこそ参られけれ。大臣殿以下の月卿雲客、寄り合ひ給ひて、能登殿の高名をぞ感じあはれける。

三草勢揃の事

同正月廿九日、範頼義經院参して、平家追討のために西國へ發向すべきよしを奏聞す。本朝には、神代より傳はれる御寶三つあり、神璽、寶劍、内侍所うちしどころこれなり。事故なう都へ返し奉るべき由仰せ下さる。兩人庭上に畏り承りて罷り出づ。二月四日の日、福原には故入道相國の忌日とて、佛事式かたの如く遂げ行はる。朝夕の軍立に、過ぎ行く月日は知られども、去年は今年にめぐり來て、一憂うれかりし春にもなりにけり。世の世にてあらましかば、いかなる起立塔婆きりふたばの金、供佛ぐつせき施僧の營もあるべかりしかども、只男女の君達きんだちたちさし集ひて、歎き悲みあはれけり。福原には此の次ついでに除目行はれて、僧も俗も官つかさなされけり。中

にも門脇の平中納言教盛卿をば、正二位大納言に上り給ふべきよし、大臣殿より宣ひ遣されたりければ、教盛の卿、

今日までもあればあるかの我身かば夢の中にも夢を見るかな

と御返事申させ給ひて、終に大納言にはなりたまはず。大外記中原の師直が子、周防の介師澄だいげき大外記になる。兵部の少輔尹明これあき、五位の藏人になされて、藏人の少輔とぞ召されける。昔將門東八箇國を打ち従へて、下總の國相馬の郡に都を立て、我身を平親王と稱して、百官をなしたりしには、曆の博士ぞなかりける。是はそれには似るべからず。主上舊都をこそ出でさせ給ふといへども、三種の神器を帶して、萬乗の位に備り給へば、叙位除目行はれんも僻事ひがことにはあらず。平氏既に福原まで攻め上りたる由聞えしかば、故郷に残り留り給ふ人々、皆勇み悦びあはれける。中にも二位の僧都全眞は、梶井の宮の年比の御同宿にておはしければ、風の便にも申されけり。宮よりも又御文あり。旅の空のよそひ、

御心苦しけれども、都も未だ鎮らずなど、細々とあそばいて、奥には一首の歌ぞありける。

人知れずそなたを忍ぶ心をば傾く月にたぐへてぞやる

僧都是を顔に押し當て、悲の涙せきあへず。さる程に、小松の三位の中將維盛の卿は、年隔り日重るに従ひて、故郷に留め置き給へる北の方、稚き人々のことをのみ、歎き悲み給ひけり。商人の便に文などの通ふにも、北の方都の御住居心苦しう聞き給ひて、さらば是へ迎へまゐらせて、一所にていかにもならばやと思はれけれども、我身こそあらめ、御爲痛おんためはしくて、など思し召し沈めて明し暮し給ふにぞ、せめての御志の深さの程は顯はれにける。二月四日の日ひ福原を攻むべかりしかども、故入道相國の忌日と聞きて、佛事遂げさせんために、其の日は寄せず、五日は西塞り、六日は道虚日どうこぼち、七日の日の卯の刻に一の谷の東西木戸口にて、源平矢合とぞ定めける。されども四日は吉日なれ

ばとて、大手獨手の軍兵、二手に分けて攻め下る。大手の大將軍には、蒲の御曹子範頼、相伴ふ人々、武田の太郎信義、加賀美の次郎遠光、同じき小次郎長清、山名の次郎範義、同じき三郎義行、侍大將には、梶原平三景時、嫡子の源太景季、次男平次景高、同三郎景家、稻毛の三郎重成、榛谷はんがえの四郎重朝、同じき五郎行重、小山の小四郎朝政、中沼の五郎宗政、結城の七郎朝光、佐貫の四郎太夫廣綱、小野寺の禪師太郎道綱、曾我の太郎祐信、中村の太郎時綱、江戸の四郎重春、玉井の四郎祐景、大川津の太郎廣行、庄の三郎忠家、同じき四郎高家、勝田の八郎行平、久下くげの次郎重光、河原太郎高直、同じき次郎盛直、藤田三郎太夫行泰を先として、都合其の勢五萬餘騎、二月四日の日、辰の一點に都を立ちて、其日の申酉の刻には、攝津の國毘陽野こやのに陣をぞ取りたりける。搦手の大將軍には、九郎御曹子義經、同じく伴ふ人々、安田の三郎義定、大内太郎惟義、村上判官代康國、田代の冠者信綱、侍大將には土肥の次郎實平、子息

の彌太郎遠平、三浦の介義澄、子息の平六義村、畠山の庄司次郎重忠、同じき長野の三郎重清、佐原の十郎義連、和田の小太郎義盛、同じき次郎義茂、三郎宗實、佐々木四郎高綱、同じき五郎義清、熊谷の次郎直實、子息の小次郎直家、平山の武者所季重、天野の次郎直經、小河の次郎助義、原の三郎清益、多々羅たたらの五郎義春、安子の太郎光義、渡柳わたやなぎの彌五郎清忠、別府の小太郎清重、金子の十郎家忠、同じき與一近則、源八廣綱、片岡太郎經春、伊勢の三郎義盛、奥州の佐藤三郎繼信、同じき四郎忠信、江田の源三、熊井太郎、武藏坊辨慶、是等を先として、都合其の勢一萬餘騎、同じ日の同じ時に都を立ちて、丹波路にかかり、二日路を一日にうちて、丹波と播州との界なる、三草の山の東の山口、小野原に陣をぞ取りたりける。

三草合戦の事

平家の方の大將軍には小松の新三位の中將資盛、同じき少將有盛、丹後の侍

從忠房、備中の守師盛、侍大將には、伊賀の平内兵衛清家、海老の次郎盛方を先として、其の勢三千餘騎にて、三草の山の西の山口に推し寄せて、陣を取る。其の夜の戌の刻ばかりに、大將軍九郎御曹子義經、侍大將土肥次郎實平を召して、平家は是より三里隔て、三草の山の西の山口に、大勢にて控へたり。夜討にやすべき、又明日の軍にかとの給へば、田代の冠者進み出で、平家の勢は三千餘騎、御方の御勢は一萬餘騎、遙の利に候、明日の軍と延べられ候ひなば、平家に勢附き候ひなんす。夜討よかんぬと覺え候ふと申しければ、土肥の次郎美しうも申させ給ふ田代殿かな、誰も斯うこそ申したう候ひつれ、夜討よかんぬと覺え候と申しければ、兵共暗さは暗し、いかゞせんと、口々に申しければ、御曹子例の大續松は如何にとの給へば、土肥の次郎、さる事候ふとて、小野原の在家に火をぞ懸けたりける。是を始めて、野にも山にも、草にも木にも火を懸けたれば、晝には些とも劣らずして、三里の山をぞ越え行きける。此の田

代の冠者と申すは、父は伊豆國の前の國司、中納言爲綱の末葉なり。母は狩野の介茂光が女を思ひて設けたりしを、母方の祖父に預けて、弓矢取には仕立てたるなり、俗性を尋ねれば、後三條の院第三の皇子、輔仁の親王に五代の孫なり。俗性もよき上、弓矢を取りてもよかりけり。平家の方には、其の夜、夜討にせんずるをば、夢にも知らず、軍は定めて明日の軍にてぞあらんずらん。軍にも睡たいは大事のものぞ、能く寝て軍せよ、者どもとて、先陣はおのづから用心しけれども、後陣の兵共は、或は甲を枕にし、或は鎧の袖籠などを枕として、前後も知らずぞ臥したりける。其の夜の夜半ばかり、源氏一萬餘騎、三草の山の西の山口に押し寄せて、関を咄とぞ作りける、平家の方には、餘にあわて騒ぎて、弓取る者は矢を知らず、矢を取るものは弓を知らず、あわてふためきけるが、馬に當てられじやと思ひけん、皆中をあけてぞ通しける。源氏は落ち行く平家を、あそこに追ひかけ、こゝに追ひつめ、散々に攻めければ、矢庭に

五百餘人討れぬ。手負ふ者共多かりけり。大將軍新三位の中將資盛、同じき少將有盛、丹後の侍從忠房、三草の手を破られて、面目なうと思はれけん、播磨の高砂より舟に乗りて、讃岐の八島へ渡り給ひぬ。備中の守師盛ばかりこそ、何として漏れさせ給ひけん、平内兵衛海老の次郎を召し具して、一の谷へぞ参られける。

老馬の事

大臣殿、安藝の右馬助義行を使者にて、人々の許へ宣ひ遣されけるは、九郎義經こそ、三草の手を攻め破りて、既に亂れ入るよし聞え候。山の手が大事にて候へば、各向はれ候ひなんやと、宣ひ遣されたりければ、皆辭し申されけり。能登殿の許へ度々の事にては候へ共、今度も又御邊向はれ候ひなんやと、宣ひ遣されなければ、能登殿の返事に、軍は左様にかりすなどり狩漁などのやうに、足立のよからう方へは向はう、悪しからん方へは向はじなど候はんには、軍に勝つ事はよ

も候はじ。幾度にも候へ、強こゑからん方へは、教經承りて罷り向ひ候ふべし。一方打ち破りて進らせ候はん、御心安う思し召され候ふべしと、申されたりければ、大臣殿斜ならず悦び給ひて、越中の前司盛俊を先として、一萬餘騎能登殿にぞ附けられける。兄越前の三位通盛の卿を相具して、山の手へぞ向はれける。此山の手と申すは、一の谷の後、鴨ひよどり越こえの麓なり。通盛の卿能登殿の假屋へ、北の方迎へ寄せ給ひて、最期さいごの名残惜なごりまれけり。能登殿大に怒りて、此の手は大事の方とて、教經向けられ候が、誠に強こゑく候ふなり。只今も上の山より敵落す程ならば、取る物もとりあへ候ふまじ。縦令弓をば持ちたりとも、矢をばはけずば悪しかるべし、縦令矢をばはけたりとも、引かずば猶も悪しかるべし。まして左様打ち解けて渡らせ給ひては、何の用に合せ給ふべきと諫められて、通盛の卿實にもやと思はれけん、急ぎ物具して、人をば返し給ひけり。五日の日の暮方に源氏昆陽野こやのを立ちて、漸う立田の森へ攻め近く。雀の松原、

御影の松、昆陽野の方を見渡せば、源氏手にく陣を取りて、遠火を焼き、更け行くまゝに眺むれば、山の端出づる月の如し。平家も遠火焼けやとて、生田の森にも形かたの如くぞ焼きたりける。明け行くまゝに見渡せば、晴れたる空の星の如し。これや昔、河邊の螢と詠じ給ひけんも、今こそ思ひ知られけれ。かやうに源氏は、あそこに陣取りては馬休め、こゝに陣取りては馬飼ひなどしける程に急がず、平家の方には、今や寄すると相待ちて、安しき心もせざりけり。同じき六日の日の曙に、大將軍九郎御曹子義經、一萬餘騎を二手に分けて、土肥次郎實平に七千餘騎を指し添へて、一の谷の西の木戸口へ指し遣す。我身は三千餘騎にて、一の谷の後うしろ、鶴越を落さんとて、丹波路より搦手へこそ向はれけれ。兵共是は聞ゆる悪所にてあるなり。同じう死ぬるとも、敵に遇ひてこそ死にたけれ。悪所に落ちては死にたからず。あつばれ此の山の案内者やあると、口々に申しければ、爰に武藏の國の住人、平山の武者所進み出て、季重こそ此

の山の案内能く存知仕りて候へ、と申しければ、御曹子、和殿わどのは東國そだちの者の、今日始めて見る西國の山の案内者、大に誠しからずと宣へば、季重かさ重ねて申しけるは、是は御説ごせつとも覺え候はぬものかな。吉野泊瀬の花をば見れども、歌人が知り、敵の籠こもりたる城の後うしろの案内をば、剛の武者が知り候ふとぞ申しける。是亦傍若無人ぼうじやくぶじんにぞ聞えし。又武藏の國の住人、別府の小太郎清重とて、生年十八歳になりけるが、進み出て、申しけるは、父にて候ひし能重法師が教へ候ひしは、譬へば山越の獵をせよ、又は敵にも襲はれよ、深山に迷ひたらんずる時は、老馬らうばを手綱結びて打ちかけ、先に追立て行け、必ず道へ出でんずるぞとこそ教へ候ひしか、と申しければ、御曹子優しうも申したるものかな。雪は野原を埋めども、老いたる馬ぞ道は知るといふ例ためしありとて、白茸毛なる老馬に鏡鞍かじかくらを置き、白鬚はげ、手綱結びて打ち懸け、先に追ひ立て、未だ知らぬ深山へこそ入り給へ。頃は二月始きざらのことなれば、峰の雪村消えて、花かと思

ゆる所もあり、谷の鶯音づれて、霞に迷ふ處もあり。登れば白雪皓々として登え、下れば青山峨々として岸高し、松の雪だに消えやらで、苔の細道幽なり。嵐にたぐふ折々は、梅花ともまた疑はれ、東西に鞭を揚げ、駒を早めて行く程に、山路に日暮れぬれば、皆下り居て陣をとる。爰に武藏坊辨慶、或老翁一人具して参りたり。御曹子、あれは如何と宣へば、是は此の山の獵師にて候ふと申しければ、さては案内能く知つたるらん。いかでか存知仕らでは候ふべき。御曹子、さぞあるらん、是より平家の城廓、一の谷へ落さうと思ふは如何に。ゆめ／＼叶ひ候ふまじ。凡三十丈の谷、十五丈の岩さきなどをば、容易う人の通ふべき様も候はず。其の上、城の内には、落穴をも堀り、菱をも植ゑて待ち進らせ候ふらん。まして御馬など思ひも寄り候はずと申しければ、御曹子、さて左様の所は鹿は通ふか。鹿は通ひ候ふ。世間だに暖になり候へば、草の深きに臥さんとて、播磨の鹿は丹波へ越え、世間だに寒くなり候へば、雪のあさり

に食まんとて、丹波の鹿は、播磨の印南美野へ越し候とぞ申しける。御曹子、さては馬場ござんなれ、鹿の通はんずる所を、馬の通はざるべきやうやある。さらば聽て汝案内者せよと宣へば、此の身は年老いて、如何にも叶ひ候ふまじと申す。さて汝に子はないか。候ふとて、熊王とて、生年十八歳になりける小冠者を奉る。御曹子、やがて髻取り上げさせ給ひて、父をば鷲尾の庄司武久といふ間、是をば鷲尾の三郎義久と名乗らせて、一の谷の先討せさせ、案内者にこそ具せられけれ。平家亡び、源氏の代になりて後、鎌倉殿と中違へて、奥州へ下り討たれ給ひし時、鷲尾の三郎義久と名のりて、一所にて死にける兵なり。

一二のかけの事

六日の夜半ばかりまでは、熊谷、平山、搦手にぞ候ひける。熊谷、子息の小次郎を呼びていひけるは、此手は悪所にてあんなれば、誰先といふ事もあるまじきぞ。いざうれ、土肥が承りて向ひたる、四の手へ寄せて、一の谷の眞先か

けんといひければ、小次郎、此儀最も然るべく候、誰もかくこそ申したう候ひつれ、さらば疾う寄せさせ給へと申す。熊谷、誠や平山も此手にあるぞかし。打込の軍好まぬ者なれば、平山がやう見て参れとて、下人を見せに遣す。案の如く平山は、熊谷より先に出て立ちて、人をば知らすべからず。季重に於ては、一引も引くまじきものをくと、獨言をぞし居たる。下人が馬を飼ふとて、僧い馬の長食かなとうちたれば、平山然うなせそ、其の馬の名残も今夜ばかりとて、打ち立ちけり。下人走りかへりて、主に此の由告げれば、さればこそとて、是もやがて打ち立ちけり。熊谷が其夜の装束には、褐の直垂に赤革威の鎧着て、紅の母衣を掛け、權太栗毛といふ、開ゆる名馬にぞ乗りたりける。子息の小次郎直家は、澤潟を一入摺りたる直垂に、拵細目の鎧着て、西樓といふ白月毛なる馬にぞ乗りたりける。旗差は、黄蘆の直垂に小櫻を黄にかへしたる鎧着て、黄河原毛なる馬にぞ乗りたりける。主従三騎うちつれ落さんずる谷

を弓手になし、馬手へ歩ませ行く程に、年比人も通はぬ、田井の畑といふ古道を経て、一の谷の波打ち際へぞ打ち出でける。一の谷近う鹽屋といふ所あり。未だ夜深かりければ、土肥の次郎實平、七千餘騎にて控へたり。熊谷夜に紛れて波打つ際よりそをつと馳せ通り、一の谷の西の木戸口にぞ押し寄せたる。其時も未だ夜深かりければ、城の内には靜まり返りて音もせず。熊谷、子息の小次郎にいひけるは、此手は悪所にてあんなれば、我もくと、先に心を掛けたるものども多かるらん。已に寄せたれども、夜の明くるを相待ちて、此の邊にも控へたるらんぞ、心狭う直實一人と思ふべからず。いざ名乗らんとて、楯の際に歩ませ寄せ、鎧踏張り立ち上り、大音聲を揚げて、武藏の國の住人熊谷の次郎直實、子息の小次郎直家、一の谷の先陣ぞやと名乗りたる。城の内には是を聞きて、よし／＼音なせそ、敵の馬の足疲かさせよ、矢種を射盡させよとて、あひしらふ者こそなかりけれ。やゝありて、後より武者こそ二騎續き

たれ、誰ぞと問へば、季重と答ふ。問ふは誰ぞ、直實ぞかし。奈何に熊谷殿は、いつよりぞ。宵よりとこそ答へけれ。季重もやがて續きて寄すべかりつるを、成田五郎にたばかられて、今までは遅々したりつるなり。成田が死なば、一所にて死なんと契りし間、打ち連れて寄せつれば、いたう平山殿、先懸はやりなし給ひそ、軍の先をかるといふは、味方の勢を背に負ひて、先ひかけたればこそ、高名不覺をも人に知らるれ、あの大勢の中へ、内一騎駈け入りて討たれたらんは、何の詮にかあふべきといふ間、實にもと思ひ、小坂のありつるを打ち上せ、下りざまに馬の頭を引き立て、味方の勢を待つ所に、成田も續きて出て來り、打ち並べて、軍の様をいひ合せんずるかと思ひたれば、さはなくして、季重が方をば、すげなげに見なしつゝ、傍をつと駈せ通る間、あつばれ此者季重たばかりて、先懸くるよと思ひ、五六段ばかり進みたるを、あれが馬は我馬より弱氣なるものと目をかけ、一鞭打ちて追着き、いかに成田殿は、まさな

うも季重程の者を、たばかり給ふものかなといひかけ、打ち捨て、寄せつれば、今は遙に下りぬらん、よも後影をば見たらじとこそ語りけれ。さる程に東雲やう／＼明け行けば、熊谷、平山、彼此五騎にてぞ扣へたる。熊谷は先に名乗りたりけれども、平山が聞く前にて、又名乗らんとや思ひけん、播楯の際へ歩ませ寄せ、鎧踏張り立ち上り、大音聲を揚げて、抑々以前名乗りたる武蔵の國の住人熊谷の次郎直實、子息小次郎直家、一の谷の先陣ぞやとぞ名乗る。城の内には是を聞きて、いざ終夜名のる熊谷親子を、提げて來んとて進む。平家の侍誰々、越中の次郎兵衛盛嗣、上總の五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、後藤内定經を先として、宗徒の兵廿餘騎、木戸を開きてかけ出てたり。こゝに平山は、滋目結の直垂に緋威の鎧着て、二引兩の母衣を掛け、目糝毛と聞ゆる名馬にぞ乗りたりける。旗差は黒革威の鎧に、甲猪頭に着なしつゝ、宿月毛なる馬にぞ乗りたりける。保元平治二箇度の軍に、先懸けて高名したる、武蔵の

國の住人平山の武者所季重と名乗りて、をめきてかく。熊谷かくれば平山續き、平山かくれば熊谷續き、互に我劣らじと、入替へく、名乗りかへく、採に採みて、火出づる程にぞ攻めたりける。平家の侍共、熊谷平山に、餘に手痛う攻められて、叶はじとや思ひけん、城の内へ颯と引きて、敵を外様になしてぞ禦ぎける。熊谷は馬の太腹射させぬれば、弓杖突きて下り立ちたり。子息の小次郎直家も、生年十六歳と名乗りて、眞先かけて戦ひけるが、弓手の肘を射させ、是も馬より下り、父と双びてぞ立ちたりける。熊谷如何に、小次郎は手負ひたるか。さん候。鎧つきを常にせよ、裏かすな、鎧を傾けよ、内甲射さすなどこそ教へけれ。熊谷は鎧に立ちたる矢共かなぐりて、城の内をにらまへ、大音聲を揚げて、去年の冬鎌倉を立ちしより以來、命をば兵衛の佐殿に奉り、骸を一の谷の汀に曝さんと、思ひ切りたる直實ぞかし。去ぬる室山、水島二箇度の軍に打ち勝ちて、高名したりと名乗るなる、越中の次郎兵衛、上總の

五郎兵衛、悪七兵衛はないか、能登殿はおはせぬか、高名不覺も敵に依りてこそすれ。人毎にはえせじものを、只熊谷父子に落合へや、組めや組めとぞ罵りたる。城の内には是を聞きて、越中の次郎兵衛盛嗣、好む装束なれば、小村濃の直垂に赤威の鎧着て、鉄形打ちたる甲の緒をしめ、金作の太刀を佩き、廿四差したる截生の矢負ひ、滋藤の弓脇に挟み、連錢茸毛なる馬に、金覆輪の鞍置きて乗りたりけるが、熊谷父子を目にかけて歩ませ寄る。熊谷父子も中も割られじと、あひも透さず立ち並び、太刀を抜きて額にあて、後へは一引も引かず、彌前へぞ進みたる。越中の次郎兵衛是を見て、叶はじとや思ひけん、取りて返しつ。熊谷あればいかに、越中の次郎兵衛とこそ見れ。敵には何處を嫌ふぞ、押し並べて組めや組めといひけれども、次郎兵衛さもさうすとて引き返す。上總の悪七兵衛是を見て、穢き殿原の埃舞かな、しや組まんずるものを、落合はぬことはよもあらじとて、既に駈け出で組まんとしければ、次郎兵

衛、惡七兵衛が鐵の袖を扣へて、君の御大事これに限るべからず、あるべうもなしとて、制せられて、力及ばず組まざりけり。其の後熊谷乗替に乗りて、喚きてかく。平山も熊谷父子が戦ふ間に、馬の息やすめ、是も同じう續きたり。平家の方には是を見て、只射取れや射取れとて、指しつめ引きつめ、散々に射けれども、敵は小勢なり、味方は大勢なりければ、勢に紛れて矢にも當らず。只押し並べて、組めや組めと下知しけれども、平家の方の馬は、飼ふは稀なり、乗り繁し、舟に久しうたてたりければ、皆彫りきりたるやうなりけり。熊谷平山が乗りたる馬は、飼に飼うたる大馬どもなり、一當あてば、皆蹴倒されぬべき間、さすが押し並べて組む武者一騎もなかりけり。こゝに平山は、身に替へて思ひける旗指を討たせて、安からずや思ひけん、城の中へ駆け入り、やがて其の敵の首取りて出てたりける。熊谷父子も分捕敷多してけり。熊谷は先に寄せたれども、木戸を開かれれば駆け入らず。平山は後に寄せたれども、木戸を開け

たれば駆け入りぬ。さてこそ熊谷平山が一二のかけをば争ひけれ。

二度のかけの事

さる程に、成田五郎も出て来る、土肥の次郎實平七千餘騎、色々の旗さし上げ、喚き叫びて攻め戦ふ。大手生田の森をば、源氏五萬餘騎にて、固めたりけるが、其の勢の中に武藏の國の住人、河原太郎、河原次郎とて兄弟あり。河原太郎、弟の次郎を呼びていひけるは、大名は我と手を下されども、家人の高名を以て名譽す。我等は自ら手を下さしては叶ひがたし。敵を前に置きながら、矢一つをだに射ずして待ち居たれば、餘に心もとなきに、高直は城の中へ紛れ入りて、一矢射んと思ふなり、されば千萬が一つも生きて歸らん、ことありがたし。汝は残り留りて、後の證人に立てといひければ、弟の次郎涙をばらくと流して、只兄弟二人あるものが、兄を討たせて弟が跡に残り留りたればとて、幾程の榮花をか保つべき。所々にて討たれんより、一所にてこそ討死をもせめとて、

下人共呼び寄せ、妻子の許へ最期の有様いひ遣し、馬には乗らで芥下をばき、弓杖を突きて、生田の森の逆木を上り越えて、城の中へぞ入りたりける。星明に鎧の毛さだかならず。河原太郎大音聲を揚げて、武藏の國の住人、河原太郎きさいち私の高直、同じき次郎盛直、生田の森の先陣ぞやとぞ名乗りたる。城の内には是を聞きて、あつげれ東國の武士程おそろ怖しかりけるものはなし。此の大勢の中へ、只兄弟二人駆け入りたらば、何程の事をかし出すべき、只置きて愛せよやとて、討たんといふ者こそなかりけれ。河原兄弟くつきやう屈竟の弓の上手なりければ、指しつめ引きつめ散々に射る。城の内には是を見て、今は此者愛しにくし、討てやといふ程こそありけれ。西國に聞えたる強弓精兵、備中の國の住人、真名邊なべの四郎、真名邊の五郎とて兄弟あり。兄の四郎をば一の谷に置かれたり。弟の五郎は、生田の森にありけるが、是を見て能く引き、暫し保ちて兵と射る。河原太郎が鎧の胸板を、背へつと射抜かれて、弓杖にすがりすくむ所を、

弟の次郎走りより、兄を肩に引きかけて、生田の森の逆木登り越えんとする所を真名邊が二の矢に弟の次郎が、鎧の草摺のはづれを射させて、同じ枕に伏しにけり。真名邊が下人落合せて、河原兄弟が首を取る。大將軍新中納言知盛の卿の、御見參に入れたりければ、あつげれ剛のものや、是等をこそ一人當千の能き兵共ともいふべけれ。あつたら者共が、命を助けて見てとぞ宣ひける。其の後河原が下人走り散りて、河原殿兄弟こそ、只今城の中へ真先懸けて討たれさせ給ひぬるはと、呼はりたりければ、梶原平三是を聞きて、是は私の黨の殿原の不覺にてこそ、河原兄弟をば討たせられ。時よくなりぬるぞ、寄せよやとて、梶原五百餘騎、生田の森の逆木を取り除けさせて、城の内へ喚きてかく。次男平次、餘に先を懸けんと進む間、父平三使者を立て、後陣の勢のつじかざらんに、先懸けたらん者には勸賞あるまじきよし、大將軍よりの仰ぞといひ送りたりければ、平次暫く控へて、

武夫の取りつたへたる梓弓ひきては人のかへすものかは
と申させ給へやとて、喚きてかく、梶原是を見て、平次討たすな者共、景高討
たすな續けやとて、父の平三、兄の源太、同じき三郎續きたり。梶原五百餘騎
の大勢の中へ駈け入り、縦様、横様、蜘蛛手、十文字に駈け割りて、颯と引き
て出でたれば、嫡子の源太は見えざりけり。梶原、郎等に、源太はいかにと問
ひければ、餘に深入して討たれさせ給ひて候ふやらん。遙に見えさせ給ひ候は
ずと申しければ、梶原涙をばら／＼と流して、軍の先を駈けんと思ふも、子共
がため、源太討たせて、景時命生きても何にかはせんなれば、返せやとて又取
りて返す。其の後梶原鎧踏張り立ち上り、大音聲を擧げて、昔八幡殿の後三年
の御戦に、出羽の國千福金澤の城を攻め給ひし時、生年十六歳と名乗りて眞先
懸け、弓手の眼を甲の鉢附の板に射つけられながら、其の矢を抜かて當の矢を
射返し、敵射落し、勳賞を蒙り、名を後代にあげたりし、鎌倉の權五郎景政に

五代の末葉、梶原平三景時とて、東國に聞えたる一人當千の兵ぞや。我と思は
ん人々は、寄合ひや、見參せんとて、喚きてかく。城の内には是を聞きて、只
今名乗るは、東國に聞えたる兵ぞや、餘すな、漏すな討てやとて、梶原を中に
取りこめて、我討ち取らんとぞ進みける。梶原、先我身の上をば知らずして、
源太は何處にあるやらんと、駈け破り、駈けまはり尋ぬる程に、案の如く、源
太は馬をも射させ徒立になり、甲をも打ち落され、大童に戦ひなりて、二丈
ばかりありける岸を後に當て、郎等二人左右に立て、打物ぬいて、敵五人が
中に取り籠められて、面も振らず命も惜まず、爰を最期と攻め戦ふ。梶原これ
を見て、源太は未だ討たれざりけりと、嬉しく思ひ、急ぎ馬より飛び下り、
いかに源太、景時爰に在り、同じう死ぬるとも、敵に後を見すなとて、父子し
て、五人の敵を三人討ちとり、二人に手負ほせて、弓矢取りは、かくるも引く
も折にこそよれ、いさうれ源太とて、かい具してぞ出でたりける。梶原が二度

のかけとはこれなり。

逆落の事

是を始めて、三浦、鎌倉、秩父、足利黨には、猪股、兒玉、野井與、横山、西黨、綴喜黨、總じて私の黨の兵共、源平互に亂れあひ、喚き叫ぶ聲は山を響かし、馳せ違ふる馬の音は雷の如く、射違ふる矢は雨の降るに異ならず。或は薄手負ひて戦ふものもあり、或は引組み指し違へて死ぬるもあり、或は取りて抑へて首を搔くもあり、搔かるもあり、何れひまありとも見えざりけり。かりしかども、源氏大手ばかりにては、いかにも叶ふべしとも見えざりしに、七日の日の曙に、大將軍九郎御曹子義經、其の勢三千餘騎、鶴越に打ち上りて、人馬の息休めておはしけるが、其の勢にや驚きたりけん。牡鹿二つ牝鹿一つ、平家の城廓一の谷へぞ落ちたりける。平家の方の兵共是を見て、縦令里近からん鹿だにも、我等に恐れて山深うこそ入るべきに、只今の鹿の落ち様、

そあやしけれ。いかさまにも、是は上の山より敵落すにこそとて、大に騒ぐ處に、爰に伊豫の國の住人、高市の武者所清章進み出で、たとひ何者にてもあらばあれ、敵の方より出て來りたらんずるものを、通すべきやうなしとて、牡鹿二つ射とめて、牝鹿をば射いでぞ通しける。越中の前司是を見て、詮なき殿原の鹿の射様かな。只今の矢一筋にては、敵十人をば防がんずるものを、罪つくり矢たふなとぞ制しける。さる程に、大將軍九郎御曹子義經、平家の城廓遙に見下しておはしけるが、馬共落して見んとて、少々落されけり。或は中にて轉びて落ら、或は足打ち折りて死ぬるもあり。されども其の中に、鞍置馬三匹相違なく落ちつきて、越中の前司が館の前に身振してこそ立ちたりけれ。御曹子、馬は主々が心得て落さんには、痛うは損ずまじかりけるぞ、只落せ、義經を手本にせよとて、先づ三十騎ばかり、眞先かけて落されければ、三千餘騎の兵共皆續きて落す。其の處しも小石まじりの砂なりければ、流れ落しに、

二町許ばかりさつと落ちて、壇だんなる所に扣へたり。それより下を見渡せば、大磐石たいばんじやくの苦こむしたるが、釣瓶つりべ下に十四五丈ぞ下りたる。それより先は進むべきとも見え、又後うしろへ取りて返すべきやうもなかりしかば、兵共、爰ぞ最期と申し、あきれて扣へたる所に、三浦の佐原の十郎義連、進み出で申しけるは、我等が方にては、鳥一つ起ちてだにも、朝夕かやうの所をば馳せあるけ。是は三浦の方の馬場ぞとて、真先駆けて落しければ、大勢皆續いて落す。後陣に落すもの、鎧の鼻は、先陣の鎧甲にさばるほどなり。餘りのいぶせさに、目を塞ぎて落しける。あい／＼聲をしのびにして、馬に力をつけて落す。大方のしわざとは見え、只鬼神の所爲とぞ見えし。落しもはてぬに、関を咄どつとぞ作りける。三千餘騎が聲なれども、山彦答へて、十萬餘騎とぞ聞えける。村上判官代康國が手より火を出して、平家の屋形假屋やかたかりやを、片時の烟と焼きはらふ。黒烟既に押し懸りければ、平家の兵共若しや助ると、前なる海へぞ多く走り入りける。落

には助船ども幾らもありけれども、舟一艘には、鑑ひたる者共が、四五百人千人許り籠み乗りたらんに、なじかはよかるべき。渚より三町許り、漕ぎ出で、目の前にて大舟三艘沈みにけり。其後はよき武者をば乗らするとも、雜人原ざふにんばらをば乗すべからずとて、太刀長刀にて打ち拂ひけり。かくする事とは知りながら、敵に遇ひては死なずして、乗せじとする船にとりつき、掴みつき、或は臂ひぢうち斬られ、或は肘かひなうち落され、一の谷の汀に朱あけになりてぞ並みふしたる。さる程に、大手にも濱の手にも武藏相模の若殿原、面も振らず命も惜まず、こゝを最期と攻め戦ふ。能登殿は度々の軍に、一度も不覺し給はぬ人の、今度は加何思はれけん、薄墨といふ馬に打ち乗りて、西を指してぞ落ち給ふ。播磨の高砂より御舟に召して、讃岐の八島へ渡りたまひぬ。

盛俊最期の事

新中納言知盛の卿は、生田の杜の大將軍にておはしけるが、東に向ひて戦ひ

給ふ處に、山の傍そばより寄せける兒玉黨の中より使者を立て、君は一年武藏の國司にて渡らせ給へば、其のよしみを以て、兒玉の者共が中より申し候、未だ御後をば御覽せられ候はぬやらんと申しければ、新中納言以下の人々、後を顧み給へば、黒烟推しかゝりたり、あはや西の手は破れにけるは。といふ程こそありけれ、取る物もとりあへず、我先にとぞ落ち行きける。越中の前司盛俊は、山の手の侍大將にてましくけるが、今は落つとも叶はじと思ひけん、扣へて敵を待つ所に、猪股の小平六則綱、好き敵と目をかけ、鞭鎧を合せて馳せ來り、押し並べてむづと組みてどうと落つ。猪股は八箇國に聞えたるしたしか者なり、鹿の角の一二の草かりをば、容易く引割さきけるとぞ聞えし。越中の前司も、人目には二三十人が力顯すといへども、内々は六七十人して上げ下す船を、只一人して押し上げ押し下す程の大力なり。されば猪股を取りて抑へ、働かさず。猪股下に伏しながら刀を抜かうとすれども、指の股はだかりて、刀の柄つかを

握るにも及ばず。物をいはんとすれども、餘に強う抑へて聲も出でず。されども猪股は大剛の者にてありければ、暫し息を休めて、敵の首を取るといふは、我も名乗りて聞かせ、敵にも名乗らせて、首取りたればこそ大切なれ。名も知らぬ首取りて、向にかはし給ふべきといひければ、越中の前司實にもと思ひけん、元は平家の一門たりしが、身不肖ふせうなるによりて、侍にはなされたる、越中の前司盛俊といふ者なり。和君わきみは何者ぞ、名乗れ、聞かうといひければ、武藏の國の住人、猪股の小平六則綱といふ者なり。只今我命助けさせおはしませ、沙汰にも候はゞ、御邊の一門何十人もおはせよ。今度の勳功の賞に申し替へて、御命ばかりをば助け奉らんといひければ、越中の前司大に怒りて、盛俊身不肖なれども、さすが平家の一門なり、盛俊源氏を頼まうとも思ひもよらず、源氏又盛俊に頼まれうとも、よも思ひたまはじ、にくい君が申様かなとて、既に首を掻かんとしければ、まさなう候降人の首掻くやうやあるといひければ、さら

ば助けんとして宥しけり。前は堅田の畠のやうなるが、後は水田のこみ深かりける畠の上に、二人ながら腰打ちかけて息續ぎ居たり。やゝありて、緋威の鎧着て、月毛なる馬に金覆輪の鞍置きて、乗りたりける武者一騎、鞭鎧を合せて馳せ来る。越中の前司怪しげに見ければ、あれは猪股に親しう候人見四郎にて候ふが、則綱あるを見て、まうて来ると覚え候、苦しうも候はぬといひながら、あれが近づく程ならば、しや組まんずるものを、落ち合はぬ事はよもあらじ、と思ひて待つ處に、間一段ばかりに馳せ来る。越中の前司、始は二人の敵を一目づゝ見けるが、次第に近づく敵をはたと守りて、則綱を見ぬ隙に、猪股力足を踏みて立ち上り、拳を強く握り、越中の前司が鎧の胸板をはたと突きて、後へのけに突き倒す。起き上らんとする處を、猪股上に乗るかゝり、越中の前司が腰の刀を抜き、鎧の草摺引き上げて、柄も拳も通れと／＼と、二刀刺して首をとる。さる程に、人見の四郎も出て来り、かやうの時は論ずる事もありとて、

首をば太刀の先に貫き、高く指し上げ、大音聲を揚げて、此の日頃平家の御方に鬼神と聞えつる、越中の前司盛俊をば、武藏の國の住人、猪股の小平六則綱が討ちたるぞやと名乗りて、其日の高名の一の筆にぞつきにける。

忠度の最期の事

薩摩守忠度は、西の手の大將軍にておはしけるが、其日の装束には、紺地の錦の直垂に黒絲威の鎧着て、黒き馬の太う選しきに、沃懸地の鞍置きて乗り給ひたりけるが、其の勢百騎ばかりが中に打圍まれて、いと騒がず控へ／＼落ち給ふ所に、爰に武藏國の國の住人、岡部の六彌太忠澄、よき敵と目をかけ、鞭鎧を合せて追ひかけ奉り、あれはいかに、よき大將軍とこそ見参らせて候へ、正なうも敵に後を見せ給ふものかな、返させ給へと、詞をかけしれば、是は味方ぞとて、振り仰き給ふ内兜を見入れたれば、鐵漿黒なり。あつばれ味方に鐵察つけたる者はなきものを、いかやうにも、是は平家の公達にてこそおはすら

めとて、押し並べてむずと組む。是を見て百騎ばかりの兵ども、皆圓々のかり武者なりければ、一騎も落ち合はず、我先にとぞ落ち行きける。薩摩守は聞ゆる熊野そだちのズウ、屈くつきやう竟はやわさの早業にておはしければ、六彌太をつか眺みて、憎い奴が味方ぞといはせよかしとて、六彌太を取りて引き寄せ、馬の上にて二刀、おちつく所にて一刀、三刀までこそ突かれけれ。二刀は鎧の上なれば通らず。一刀は内兜へ突入れられたりけれども、薄手なれば死なざりけるを、取りて押へて首を掻かんとし給ふ所に、六彌太が童、後ればせに馳せ来て、急ぎ馬より飛びて下り、討ち刀をぬいて、薩摩守の右の腕かひなを、臂ひぢの本よりふつと打ち落す。薩摩守今は斯うとや思はれけん、暫し退け、最後の十念唱へんとて、六彌太をゆんだけ眺みて、弓丈ばかりぞ投げ退けらる。その後、西に向ひ、元明遍照十方世界、念佛衆しゆじやう生攝取不捨との給ひも果てれば、六彌太うしろより、薩摩守の首をとる。よい首討ち奉りたりと思へども、名をば誰れとも知らざりけ

るが、籠かごに結ひ附けられたる文を、取りて見ければ、旅宿花りよしゆの花といふ題にて、歌をぞ一首よまれたる。

行きくれて本の下かけを宿とせば花や今宵のあるじならまし 忠度

と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ。やがて首をば太刀の先に貫き、高く指しあげ、大音聲をあげて、此の日頃、日本國に、鬼神と聞えさせ給ひたる薩摩守殿をば、武藏の國の佳人、岡部の六彌太忠澄が討ち奉りたるぞや、と名乗りたりければ、敵も味方も是を聞きて、あないとほし、武藝にも歌道にも勝れて、よき大將軍にておはしつる人をとて、皆鎧の袖をぞぬらしける。

重衡いけどりの事

本三位中将重衡の卿は、生田の森の副將軍にておはしけるが、其日の装束には、褐かちに白う黄なる糸を以て、岩いわに群千鳥むらちどり繡りゅうひたる直垂に、紫裾濃むらさきの鎧着て、紙形打たる兜の緒をしめ、金かねづくりの太刀佩き、廿四さしたる裁生の矢

負ひ、滋藤の弓持ちて、童子鹿毛といふ聞ゆる名馬に、金覆輪の鞍置きて乗り給へり。乳母子の後藤兵衛盛長は滋目結の直垂に緋威の鎧着て、三位の中將のさしも秘藏せられたる、夜目なし月毛にぞ乗らせられたる。主従二騎、助船に乘らんとて、渚の方へ落ち給ふ所に、庄の四郎高家、梶原源太景季、よき敵と目をかけ、鞭鐙を合せて追ひかけ牽り、渚には助船共多かりけれども、後より敵は追ひかけたり。乗るべき隙もなかりければ、湊河、苅藻河をも打ち渡り、蓮の池を馬手に見て、駒の林を弓手になし、板宿、須磨をも打過ぎて、西をさしてぞ落ち給ふ。三位中將は、童子鹿毛といふ聞ゆる名馬に乗り給へり。もり伏せたる馬、たやすう追ひつくべしとも見えざりければ、梶原若しやと、遠矢によつびきて兵と放つ。三位中將の馬の三頭を篋深に射させて弱る所に、乳母子後藤兵衛盛長、吾が馬召されなんとや思ひけん、鞭を打ちてぞ逃げたりける。三位中將いかに盛長、我を捨て、何處へゆくぞ、日來はさは契らざりしもの

をとの宣へども、そら聽かずして、鎧に附きたる赤印どもかなぐり捨て、只逃にこそ逃げたりけれ。三位中將馬は弱る、海へさつと打ち入れ給ふ。身を投げんとし給へども、其處も遠淺にして、沈むべきやうもなかりければ、腹を切らんとし給ふ所に、庄の四郎高家、鞭鐙を合せて馳せ來り、急ぎ馬より飛びて下り、まさなう候、何處までも御供仕り候はんずるものをとて、我乗りたりけるに掻き載せ奉り、鞍の前輪にしめつき奉りて、我身は乗替に乗りて、御方の陣へぞ入りにける。乳母子の、盛長は、其處をば難無く逃げのびて、後には熊野法師に、尾中法橋を頼みて居たりけるが、法橋死にての後、後家の尼公の訴訟のために都へ上るに、供して上りたりければ、三位中將の乳母子にて、上下多くは見知られたり。あなにくや、後藤兵衛盛長が、三位中將のさしも不便にし給ひつるに、一所にて如何にもならずして、思ひもよらず、後藤尼公の供して上りたるよとて、爪弾をぞしける。盛長もさすが耻しくや思ひけん、

を顔にかざしけるとぞ聞えし。

敦盛最後の事

さる程に一の谷の軍敗れしかば、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實、平家の公達の、助船に乗らんとて、汀の方へ落ち行き給ふらん、あつばれ好き大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝりて、汀の方へ歩まする所に、爰に練緯ねりぬきに鶴縫ひたる直垂に、萌木匂の鎧着て、鉞形打ちたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さしたる截生きりふの矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍置きて、乗りたりける者一騎、沖なる船を目につけ、海へ颯と打ち入り、五六反ばかりぞ泳がせける。熊谷あればいかに、好き大將軍とこそ見参らせて候へ、まさなうも敵に後を見せ給ふものかな、返させ給へくと、扇を揚げて招きければ、招がれて取りてかへし、汀に打ち上らんとし給ふ所に、熊谷波打際にて押し並べ、むずと組みて、どうと落ち、取りて抑へて首をかゝんとて、

兜をおし仰けて見たりければ、薄化粧うすけしやうして鐵漿かねぢりなり。我子の小次郎の齡程して、十六七ばかりなるが、容顔まことに美麗なり。抑々如何なる人にて渡らせ給ひ候ふやらん、名乗らせたまへ、助け参らせんと申しければ、先づ斯ういふ和殿わどのは誰ぞ。物その數にては候はれども、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實と名のり申す。さては汝が爲めには好い敵かたきぞ、名のらずとも首を取りて人に問へ、見知らうずるぞと宣ひける。熊谷あつばれ大將軍や、此人一人討ち奉りたりとも負くべき軍に勝つべきやうなし。又助け奉つたりとも、勝つ軍に負くる事もよもあ。今朝、一の谷にて、我子の小次郎が、薄手負ひたるをだにも、直實は心苦しう思ふに、此の殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲み給はんずらめ。助け参らせんとて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりにて出て来る。熊谷涙をばらくと流して、あれ御覽候へ、いかにもして助け参らせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞の如くにみちくとて、よも通

し參らせ候はじ。あはれ同じうは、直實が手にかけ奉りて、後の御孝養をも仕り候はんと申しければ、只何様にも疾うく首を取れとぞ宣ひける。熊谷餘にいとほしくて、何處に刀を立つべしとも覺えず。目もくれ、心も消え果て、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事なれば、泣くく首を掻きける。あはれ弓矢取る身ほど、口惜しかりけることばなし、武藝の家に生れずば、何しに唯今かゝる憂き目を見るべき、情なうも討ち奉りたるものかなと、袖を顔に押しあて、さめくとぞ泣き居たる。首を包まんとて、鎧直垂を解きて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ、腰にさゝれたる。あないとほし、この曉、城の内にて、管絃し給ひつるは、此人にておはしけり。當時味方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあらし。上臈は猶もやさしかりけるものをとて、是を取りて、大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば修理太夫經盛の乙子、大夫敦盛とて、

生年十七にぞなられける。それよりしてこそ、熊谷が發心の心は出て來にけれ。件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽の院より下し給られたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるに依りて、持たれたりけるとかや、名をば小枝とぞ申しける。狂言綺語のことわりといひながら、遂に贊佛生の因となるこそ哀れなれ。

濱軍の事

門脇殿の末子、藏人の大夫業盛は、常陸の國の住人、土屋の五郎重行と組み、討たれ給ひぬ。皇太后宮亮經正は、武藏の國の住人、河越小太郎重房が手に取り籠め奉りて、遂に討ち奉る。尾張守清定、淡路守清房、若狹守經俊、三騎つれ敵の中へ割りて入り、散々に戦ひ、分捕あまたして、一所にて討死してけり。新中納言知盛卿は、生田の森の大將軍にておはしけるが、其の勢皆落ち失せ討たれにしかば、御子武藏守知章、侍に監物太郎頼賢、主従三騎汀の方へ落ち給

ふ所に、爰に見玉黨と思しくて、團扇の旗指したるものどもが、十騎ばかり、鞭籠を合せて押し懸け奉る。監物太郎は、風竟の弓の上手なりければ、取りつかへし、眞先に進みたる旗差が首の骨を、ひやうはつと射て、馬より逆に射落す。其の中の大将と思しき者、新中納言に組み奉らんとて、馳せ並ぶる所に、御子武藏守知章、父を討たせじと中に隔たり、押し並べて、むずと組み、とうと落ち、取りて抑へて首を掻き、立ち上らんとし給ふ處に、敵の童落ち合せて、武藏守の首をとる。監物太郎落ち重り、武藏守討ち奉りたりける敵の童をも討ちてけり。其後矢種のある程射盡し、打物抜きて戦ひけるが、弓手の膝口をしたまかに射させ、立ちも上らで、居ながら討死してけり。このまぎれに新中納言知盛の卿は、そこをつと逃げ延びて、屈竟の息長き名馬には乗り給ひぬ。海の面二十四餘町泳がせて、大臣殿の御船へぞ参られける。船には人多く取り乗りて、馬立つべき様もなかりければ、馬をば渚へ追ひかへさる。阿波民部

重能、御馬、敵のものになり候ひなんぞ、射殺し候はんとして、片手矢はげて出でければ、新中納言、假令何の物にもならばなれ、只今我命助けたらんずるものを、あるべうもなしと宣へば、力及ばで射ざりけり。此の馬、主の別を惜みつゝ、暫しは船を離れもやらず、沖の方へ泳ぎけるが、次第に遠くなりければ、空しき渚へ泳ぎかへり、足立つ程にもなりしかば、猶船の方を顧みて、二三度までこそ嘶きけれ。其の後、陸に上りて休み居たりけるを、河越の小太郎重房取りて、院へ参らせたり。もとも此の馬、院の御秘藏にて、一の御馬屋に立てられたりしを、一年宗盛公内大臣になりて、喜申のありし時、下し賜はられたりしを、弟中納言に預けられたりしかば、餘に秘藏して、此馬の祈の爲にとて、毎月朔日ごとに、泰山府君をぞ祭られける。其の故にや、馬の息も長う、主の命も助けしるこそめてたけれ。此の馬、元は信濃の國、井上産にてありければ、井上黒とぞ召されける。今度は川越が取りて、院へ参らせたりけ

れは、河越黒とぞ召されける。其の後新中納言知盛の卿、大臣殿の御前におはして、涙を流して申されけるは、武藏守にもおくれ候ひぬ。監物太郎をも討たせ候ひぬ。今は心細うこそまかりなりて候へ。されば子はありて父を討たせじと、敵に組むを見ながら、いかなる親なれば、子の討たるしを助けずして、是まで遁れ参りて候ふやらん。あはれ人の上ならば、いかばかりもどかしう候ふべきに、我身の上になり候へば、う命は惜しきものにて候ひけりと、今こそ思ひ知られて候へ。人々の思し召さん御心の中どもこそ、恥しう候へとて、鑑の袖を顔に推し當て、さめくと泣かれければ、大臣殿誠に、武藏守の父の命に代られけるこそありがたけれ。手も利も心も剛にして、よき大將軍にておはしつる人を、あの清宗と同年にて、今年は十六なとて、御子右衛門督のおはしける方を見給ひて、涙ぐみ給へば、其座に幾らも並み居給へる人々、心あるも心なきも、皆鑑の袖をぞ濡されける。

落足おとしの事

小松殿の末子、備中守師盛は、主従七人小船に乗り、落ち給ふ所に、爰に新中納言知盛の卿の侍に、清衛門公長といふもの、鞭鎧を合せて馳せ來り、あれはいかに、備中の守殿の御船とこそ見参らせて候へ、参り候はんと申しければ、船を渚へ差し寄せたり。大の男の鎧着ながら、馬より船へがばと飛び乗るに、なじかはよかるべき、船は小さし、くるりと踏み返してけり。備中守、浮きぬ沈みぬし給ふ所に、畠山が郎等、本田次郎近常、主従十四五騎、鞭鎧を合せて馳せきたり、急ぎ馬より飛び下り、備中守を熊手に掛けて引き上げ奉り、遂に御首をぞ掻きてける、生年十四歳とぞ聞えし、越前の三位通盛は、山の手の大將軍にておはしけるが、其の勢皆落ち失せ討たれ、大勢に押し隔てられて、弟の能登守には後れ給ひぬ。心靜に自害せんとして、東に向ひて落ち行き給ふ所に、近江國の住人、佐々木の木村の三郎業綱、武藏の國の住人、玉の井の四郎助景、

彼は七騎が中に取り籠め参らせて、遂に討ち奉りてけり。其の時までは、侍一人附き奉りたりけれども、是も最後の時は落ち合はず、凡東西の木戸口、時移る程にもなりしかば、源平敷をつくして討たれにけり。櫓の前、逆木の下には、人馬の肉山の如し。一の谷、小笹原、緑の色と引き替へて、薄紅にぞなりにける。一の谷、生田の森、山のそば、海の汀に射られ切られて、死ぬるは知らず。源氏の方に切りかけらるゝ首ども、二千餘人なり。今度一の谷にて討たれさせ給ひたる、宗徒の人々には、先づ越前の三位通盛、弟藏人大夫業盛、薩摩守忠度、武藏守知章、備中守師盛、尾張守清貞、淡路守清房、經盛の嫡子、皇后宮亮經正、弟若狭守經俊、其弟大夫敦盛、以上十人とぞ聞えし。軍敗れにければ、主上を始め参らせて、人々皆御船に召して、出でさせ給ふ、こそ悲しけれ。汐に引かれ風に隨ひて、紀伊の地に赴く船もあり。蘆屋の沖に漕ぎ出て、波に揺らるゝ船もあり。或は須磨より明石の浦づたひ、泊さだめぬ楫枕、片敷く袖もし

ほれつゝ、朧に霞む春の月、心を挫かぬ人ぞなき。或は淡路の迫門を押し渡り、繪島が磯に漂へば、浪路遙になぎわたり、友迷はせる小夜千鳥、是も我身のたぐひかな。行末いまだ何處とも、思ひ定めぬかと思しくて、一の谷の沖に休らふ船もあり。かやうに浦々島々に漂へば、互の生死も知りがたして、國を従へることも十四箇國、勢の附くことも十萬餘騎、都へ近づくことも僅に一日の道なれば、今度はさりとも、頼もしうこそ思はれつるに、一の谷をも攻め落され、いと心細うぞなられる。

小宰相の事

越前の三位通盛卿の侍に、見田瀧口時員といふものあり。急ぎ北の方の御船に参りて申しけるは、君は今朝湊河の下にて、敵七騎が中に取り籠め参らせて、終に討たれさせ給へ候ひぬ。中にも殊に手を下して討ち奉りたりしは、近江の國の住人、佐々木の木村の三郎成綱、武藏國の住人、玉の井の四郎資景とぞ名

乗り参らせて候ひつれ。時員も一所にて討死仕り、最期の御供仕るべし候ひつれども、かれてより仰せ候ひしは、通盛加何になるとも、汝は命を棄つべからず。如何にもしてながらへて、御行方ゆくへをも尋ね進らせよ、と仰せ候ひしほどに、甲斐なき命ばかり生きて、つれなうこそ是まで参りて候へ、と申しければ、北の方兎角の返事にも及び給はず、引き被ぎてぞ臥し給ふ、一定討たれ給ひぬと聞き給へども、若し僻事ひがことにてもやあらん、生きて歸らるゝこともやと、二三日は白地あからさまに出でたる人を、待つ心地しておはしけるが、四五日も過ぎしかば、もしやの頼みも弱り果て、いと心細くぞなられける。たゞ一人附き奉りたりける乳母の女房も、同じ枕にふし沈みけり。かくと聞き給ひし七日の日の暮程より、十三日の夜までは起き上り給はず。明くれば十四日、八島へ推しわたる。菅打ち過ぐるまでは、臥し給ひけるが、更け行くまゝに、船の中静まりければ、乳母の女房に宣ひけるは、今朝までは三位討たれにしと聞きしかども、

誠とも思はてありつるが、此の暮程より、實にさもあらんと思ひ定めてあるぞとよ。その故は、皆人毎に湊川とやらんにて、三位討たれにしとはいひしかども、其の後生きて遇ひたりといふ者、一人もなし。明日打ち出でんとての夜、白地あからさまなる所にて行きあひたりしかば、何時よりも心細げに打ち歎きて、明日の軍には必ず討たれんと覺ゆるはとよ、我如何にもなりなん後、人は如何はし給ふべきなといひしかども、軍はいつもの事なれば、一定いちぢやうさるべしとも思はてありつる事こそ悲しけれ。それを限とだに思はましかば、など後の世と契らざりけん、思ふさへこそ悲しけれ。只ならずなりたることも、日比は隠していはざりしかども、餘に心深う思はれしとて、いひ出したりしかば、斜ならず嬉しげにて、通盛三十になるまで、子といふものもなかりつるに、あはれ同じうは男子にてもあれかし、浮世の忘わすれがた記念にもと、思ひおくばかりなり。さて幾日になるらん、心地は如何あらん、いつとなき波の上、船の中の住居なれば、

静に身々みとならん時、如何はし給ふべきなどいひしは、はかなかりけるかれこ
 とかな。誠やらん、女はさやうの時、十に九は必ず死ぬるなれば、恥ぢがまし
 ううたてき目を見て、空しうならんも心うし。静に身々となりて後、稚きもの
 を育て、亡人の記念なまひと かつみにも見ばやと思へども、それを見ん度母に、昔の人の
 み戀しくて、思の数はまさるとも、慰む事はよもあらず、終には通れまじき道
 なり。若し不思議に此の世を忍び過ぐすとも、心に任せぬ世のならひは、思は
 ぬ外の不思議もあるぞとよ。それも思へば心うし。まどろめば夢に見え、覺む
 れば面影に立つぞとよ。生きて居て、兎に角に人を戀しと思はんより、水の底
 へも入らばや、と思ひ定めてあるぞとよ。そこに一人留りて、歎かんずる事こ
 そ心苦しけれども、妾わらはが装束のあるをば取りて、如何ならん僧にも奉り、亡人
 の御菩提ごぼだいをも弔ひ参らせ、妾が後生ごしやうをも助け給へ、書き置きたる文をば都へ傳
 てたべなど、細々と宣へば、乳母の女房涙を抑へて、幼き子をも振り捨て、老

いたる親をも留めおき、遙々と是まで附き参らせて候ふ志をば、いかばかりと
 か思し召され候ふらん。今度一の谷にて討れさせ給ふ、御一家の公達の北の方の
 御歎、何れか疎おろそかに思し召され侍ふべき。必ず一つ蓮へと思し召され侍ふと
 も、生れ變らせ給ひなん後、六道にて何れの道へ赴かせ給はんずらん。行き合
 せ給はんことも不定なれば、御身を投げてもしなき御事なり。静に身々とな
 らせ給ひて、いかならん岩木の間はさまにても、稚き人を育てまゐらせ、御さまを
 かへ、佛の御名を唱へて、亡人の御菩提を弔ひまゐらせ給へかし。其の上、都
 の御事をば、誰見つきまゐらせよとて、かやうには仰せられ侍ふやらん、恨め
 しうも承り侍ふものかなとて、さめんとかき口説きければ、北の方、此の事
 悪しうも知らせなんとや思はれけん、是は心にかはりても推し測り給ふべし。
 大方の世の恨めしさ、人の別わかれの悲しさにも、身を投げんなどいふは常のな
 らひなり。されどもさやうの事は、ありがたき例ためしぞかし。誠に思立つ事ある

は、足下そこに知らせずしてあるまじきぞ。今は夜も更けぬ、いざや寝んと宣へば、乳母の女房、此四五日は湯水をだに、はかどくしう御覽じ入れさせ給はぬ人の、かやうに細々と仰せらるゝは、誠に思し召し立つ事もやと悲しうて、凡は都の御事もさる御事にて候へども、實におぼし立つ事ならば、妾わらはをも千尋ちひろの底までも、引こそ具せさせ給はめ、後れ参らせなん後、更に片時ながらふべしとも覺えぬものかな、と申して、御側に在りながら、些と打ちまどろみたりける隙に、北の方やはら船ばたへ起き出で給ひて、漫々たる海上なれば、何地を西とは知られども、月の入いるの山の端はを、そなたの空とやおぼしけん、靜に念佛し給へば、沖の白洲しら洲に鳴く千鳥、天の戸わたる楫の音、折から哀れやまさりけん、忍音しのびねに念佛百遍ばかり唱へさせ給ひつゝ、南無西方極樂世界の教主彌陀如來、本願あやま過あやまたず、飽かて別れし妹背いもせの中らひ、必ず一つ蓮にと、泣くく遙に掻き口説き、南無と唱ふる聲と共に、海にぞ沈み給ひける。一の谷より八島へ押し渡らんと

て、夜半ばかりの事なりければ、船の中しづまりて、人は是を知らざりけり。其の中に楫取の一人寝ざりけるが、此の由を見奉りて、あれはいかに、あの御船より女房の海へ入らせ給ひぬるはと、呼はりたりければ、乳母の女房うち驚き、側を探れども、おはせざりければ、唯あれよ、あれとぞ呆あきれる。人数多下りて取り上げ奉らんとしけれども、さらぬだに春の夜は、習ひに霞むものなれば、四方の村雲うかれ来て、潜かづげどもく、月おほろ朧おぼろにて見え給はず。遙に程經て後、取り上げ奉りたりけれども、はや此世になき人となり給ひぬ。白き袴ねりぬきに練貫ねりぬきの二つ衣きぬを着給へり。髪も袴もしほたれて、取り上げられどもかひぞなき。乳母の女房、手に手を取り組み、顔に顔を押し當て、などや是程に思し召したつことならば、我等をも千尋の底までも、引きこそ具せさせ給ふべけれ。恨めしうも、只一人止めさせ給ふものかな。さるにても今一度物仰せられて、妾わらはに聞かせさせ給へとて、悶もだえ焦こがれけれども、はや此の世に亡き人となり給ひぬる上

は、一言の返事にも及び給はず、纒に通ひつる息も、はや絶え果てぬ。さる程に、春の夜の月も雲井に傾き、霞める空も明けゆけば、名残は盡せず思へども、さてしもあるべき事ならねば、浮きもや上り給ふと、故三位殿の着背長おせながの一領残りたるを、引き纏ひ奉り、終に海にぞ沈めける。乳母の女房、今度は後れ奉らじと、續きて海に入らんとしけるを、人々取り止めければ、力及ばず、攻めての心のあられずや、手づから髪を銕はさみおろし、故三位殿の御弟、中納言の律師忠快に剃らせ奉り、泣くく戒をたもちて、主の後世をぞ弔ひける。昔より夫をつとに後るし數多しといへども、様を替ふるは常の習、身を投ぐるまではありがたき例ためしなり。されば忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫に見えずとも、かやうの事をや申すべき。此の女房と申すは、頭の刑部卿範賢の女、禁中一の美人、名をば小宰相殿とぞ申しける。上西門院の女房なり。此の女房十六と申し、安元の春の頃、女院法勝寺へ花見の御幸のありしに、通盛の卿、其の頃は未

だ申宮亮にて供奉せられたりけるが、見初めたりし女房なり。初は歌を詠み文をつくされけれども、玉梓たまづさの數のみ積りて、取り入れ給ふ事もなし。既に三年になりしかば、通盛の卿、今を限りの文を書きて、小宰相殿の許へ遣す。剃、取り傳へける女房にだに逢はずして、使空しう歸りける道にて、折ふし小宰相殿は、里より御所へぞ參られける。使空しう歸り參らんことの本意なきに、側をつと走り通るやうにて、小宰相殿の乗り給へる車の簾の中へ、通盛卿の文をぞ投げ入れたる。供の者共に問ひ給へば、知らずと申す。さてかの文をあけて見給へば、通盛の卿の文なりけり。車に置くべきやうもなし。大路に捨てんもさすがにて、袴の腰に挟みつゝ、御所へぞ參り給ひける。さて宮仕へ給ひし程に所しもこそ多けれ、御前に文を落されたり。女院これを取らせおはしまし、急ぎ御衣の袂に引き隠させ給ひて、珍しき物をこそ求めたれ。此主は誰なるらんと仰せければ、御所中の女房達、萬の神佛にかけて、知らずとのみぞ申しける。

其中に小宰相殿ばかり顔打ち赤めて、つやく物も申されず。女院も内々通盛の卿の申すとは、知し召されたりければ、さて此の文をあけて御覽すれば、綺羅の烟の匂珠に深きに、筆の立處も世の常ならず。餘に人の心強きも、今は中々嬉しくてなど、細々と書きて、奥に一首の歌ぞありける、

我が戀は細川谷の丸木橋ふみかへされて濡るし袖かな

女院、是は逢はぬを恨みたる文なり。餘に人の心強きも、中々今はあだとなんなるものを、中頃小野小町とて、みめかたち美しう、情の道ありがたかりしかば、見る人聞く者、肝魂を痛ましめずといふことなし。されども心強き名をや取りたりけん、終には人のおもひの積りて、風を防ぐたよりもなく、雨を洩さぬわざもなし。宿に曇らぬ月星は、涙に浮び、野邊の若菜、澤の根芹をつみてこそ、露の命をば過しけれ。女院、是はいかにも返事あるべきことぞとて、御硯を召しよせて、忝くも自ら御返事遊ばされけり。

たゞ頼め細谷川のまる木橋ふみかへしては落ちざらめやは

胸の中の思ひは富士の烟にあらはれ、袖の上の涙は清見が關の波なれや、みめは幸ひの花なれば、三位此の女房を賜りて、互の志淺からず。されば西海の波の上、船の中までも引き具して、遂に同じ道へぞ赴かれける。門脇の中納言は嫡子越前三位の末子業盛にも後れ給ひぬ。今頼みたまへる人としては、能登守の教經、僧には中納言の律師忠快ばかりなり。故三位殿のかたみとも、この女房をこそ見給ふべきに、それさへ斯様になり給へば、いと心細うぞなられける。

平家物語卷九〔中編〕終

平家物語〔下編〕

卷十

首わたしの事

壽永三年二月七日の日、津の國一の谷にて討たれ給ひし、平氏の首ども十二日に都へ入り、平家にむすほれたりし人々は、今度我が方さまに如何なる憂き事をか聞き、如何なる憂き目をか見んずらんと歎きあひ、悲みあはれけり。中にも、大覺寺に隠れ居給へる、小松の三位の中將維盛の卿の北の方は、いと覺束なく思はれけるに、今度一の谷にて、一門の人々残り少なに討ちなされ、今は三位の中將といふ公卿一人、生捕にせられて上るなりと聞き給ひて、此の人離れ給はじものなとて、悶え焦れ給ひけり。或女房の大覺寺に参りて申しけるは、三位の中將殿とは、これの御事にては候はず、本三位の中將殿の御事な

りと申しければ、さては首どもの中にこそあるらめとて、猶心安くも思ひ給はず、同じき十三日、大夫の判官仲頼以下の檢非違使共、六條河原に出て向ひて、平氏の首ども受けとり、東の洞院を北へわたして、獄門ごくもんにかけらるべき由、範頼義經奏聞す。法皇此の事如何あらんずらんと、思し召し煩はせ給ひて、太政大臣、左右の大臣、内大臣、堀河の大納言忠親卿に仰せ合せらる。五人の公卿申されけるは、昔より卿相の位にいたる人の首、大路を渡さるゝこと先例なし。中にも此の輩は、先帝の御時より戚里せきりの臣として久しく朝家に仕うまつる。範頼義經が申條、あながちに御許容あるべからずと申されければ、渡さるまじきに定められたりしかども、範頼義經、重ねて奏聞しけるは、保元の昔を思へば、祖父爲義が仇、平治の古を按ずるに、父義朝が讐なり。されば君の御憤いさどほりを休め奉り、父の恥を清めんがために、命を捨て、朝敵を亡す。今度平氏の首、大路を渡されざらんに於ては、自今以後何の勇ありてか、兇徒を退げんやと、頻に

訴へ申されければ、法皇力及ばせ給はず、遂に渡されけり。見ら八歳やちゑのふ敷を知らず。帝闕ていけつに袖を連れし古は、怖おそぢ恐るゝ輩多かりき。巷ちまたに頭を渡さるゝ今は又、憐み悲まずといふことなし。中にも大覺寺に匿かくれ居給へる、小松の三位の中將維盛の卿の若君、六代御前につき奉りたりける、齋藤五、齋藤六、あまりの覺東なさに、様さまをやつして見ければ、御首どもは皆見知り奉りたれども、三位の中將殿の御首は見え給はず。されどもあまりの悲しさに、包むに堪へぬ涙のみ繁かりければ、よその人目も恐しくて、急ぎ大覺寺へぞ歸り参りける。北の方、借いかにく、と問ひ給へば、人々の御首どもは皆見知り奉りたれども、三位の中將殿の御首は見えさせ給ひ候はず。御兄弟の御中には、備中の守殿の御首ばかりこそ見えさせ給ひつれ。その外は、そんぢやうその頸、その御頸と申しければ、北の方それも人の上とは覺えずとて、引きかづきてぞ臥し給ふ。やゝありて、齋藤五涙をおさへて申しけるは、この一兩年は置れ居候ひ

て、人にもいたく見知られ候はれば、今暫く見参らせたく存じ候ひつれども、よに案内委しく知りたる者の申し候ひしは、今度の合戦に、小松殿の公達たちはあはせ給はず。その故は、播磨と丹波との境なる、三草の手を固めさせ給ひ候ひけるが、九郎義經に敗られて、新三位の中將殿、同じき少將殿、丹後の侍從殿は、播磨の高砂より御舟にめして、讃岐の屋島へ渡らせ給ひ候ひぬ。何としてかは、離れさせ給ひて候ひけるやらん。その中に、備中の守の殿ばかりこそ、今度一の谷にて討たれさせ給ひて候へ、と語り申し候ひし程に、さて三位の中將殿の御事は、如何にと問ひ候ひつれば、それは軍いくさ以前より大事の御いたはりとして、讃岐の屋島へ渡らせ給ひて、今度は向はせ給はず、と申すものにこそ遇ひて候ひつれと、細々と語り申したりければ、北の方、それも我等が事を心苦しく思ひ給ひて、朝夕歎かせ給ふが病となりたるにこそ、風の吹く日は、今日もや舟に乗り給ふらんと、肝きもを消し、軍といふ時は、只今もや討たれ給ひ

ぬらんと、心をつくす。ましてさやうの御いたはりなどをば、誰か心安くあつかひ奉るべき。それを委しく聞かばやと宣へば、若君姫君も、など何の御いたはりとは問はざりけるぞ、と宣ひけるこそ哀れなれ。三位の中將も、通ふ心なれば、さても都には如何に心もとなく思ふらん。假令たとひ首どもの中にこそなくとも、矢に當りても死に、水に溺れて失せぬらん。今まで此の世にある者とは、よも思ひ給はじ。露の命の消えやらで、未だ憂き世にながらへたるを知らせ奉らんとて、使を一人したてゝ上らせられるが、三つの文をぞ書かれける。先づ北の方への御文には、都には敵充みちくゝて、御身一つの置き所だにあらじに、をさなき者共引き具して、如何に悲しくおはすらん。これへ迎へ参らせて、一つ所にて如何にもならばやと思へども、我が身こそあらめ、御爲いたはしくて、なんと、こまなくと書きて、奥には一首の歌ぞありける。

いづくとも知らぬあふせの藻蘆草かきおく跡をかたみとも見え

さて稚き人々の御許へは、徒然つれづれをば何としてかは慰むらん。やがてこれへ迎へ取らんずるぞと、言葉もかはらず書きて上せらる。使、都へ上り、北の方に御文取り出して奉る。是をあけて見給ひて、いとと思ひやまさられけん、引きかづきてぞ臥し給ふ。かくて四五日も過ぎしかば、使、御返事たまはりて歸り参り候はん、と申しければ、北の方泣くく御返事書き給ふ。若君姫君も面々に筆を染めて、さて父御前への御返事をば、何と書き申すべきやらんと問ひ給へば北の方只兎もかくも、わごせ達が思はんずる様を申すべしとぞ宣ひける。なとや今までは迎へさせ給ひ候はぬぞ、餘に御戀しく思ひ参らせ候ふに疾く迎へさせ給へと、同じ詞にぞ書かれたる。使、御文たまはりて、屋島へ歸り参りて、三位の中將殿に御返事取り出して奉る。先づ稚き人々の御返事を見給ひて、いとせん方なげにぞ見えられける。抑ふ是より穢土あんどを厭ふに勇みなし、閻浮愛えんぶあい執しよの綱強ければ、淨土じやうどを願はんも物憂し。只是より山傳やまのつたへひに都へ上り、戀しき

者どもをも、今一度見もし見えて後、自書をせんにはしかじとぞ、泣くく語り給ひける。

内裏女房の事

同じき十四日、生捕本三位の中將重衡の卿、都へ入りて、大路をわたさる。小八葉こやちの車の前後の簾のりをあけ、左右の物見ものみを開く。土肥とひの次郎實平は、木蘭地もくらんぢの直垂ちかえに、小具足こぐそくばかりして、隨兵ずるへい三十餘騎引き具して、車の前後を打ち圍みて守護し奉る。京中の上下、是を見て、あないとほし、幾らもまします公達の中に、この人一人かやうになり給ふことよ、入道殿にも、二位殿にも、覺えの御子にたまはせませば、一門の人々も重き事にして、院中へ参らせ給ひしにも、老いたるも若きも、所をおきてもてなし奉らせ給ひしぞかし。今又かやうになり給ふことは、いかさまにも奈良を焼き給へる伽藍がらんの罰といひあへり。六條を東へ河原まで渡して、それより歸りて、故中の御門みかどの頭中納言雅成の卿の御堂、

八條堀川なる所にすみ奉りて、厳しく守護し奉る。院の御所より御使あり。藏人の左衛門の權の佐定長、八條堀川へぞ向ひける。赤衣に劍笏けんしやくをぞ帶したりける。三位の中將は、紺村濃こんむらこの直垂に、折烏帽子引き立て、おはします。日比は何とも思はれざりし定長を、今は冥土にて罪人共が、冥官にあへる心地ぞせられける。仰せ下されけるは、屋島へかへりたくば、一門の方へいひ送りて、三種の神器を都に返し入れ奉れ。然らば屋島へ返さるべしとの御氣色なり。三位の中將申されけるは、さしもに我が朝の重寶三種の神器を、重衡一人にかへ参らせんとは、内府以下一門の者どもがよも申し候はじ。女性にて候へば、若し母體の二品などやさも申し候はんずらん。さりながらも、居ながら院宣を返し奉らんことは、その恐れも候へば、速に申し送りてこそ候はめ、とぞ申されける。院宣の御使は、御壺おつばの召次めしつぎ花方はなかた、三位の中將の使は、平左衛門重國といふものなり。大臣殿平大納言へば、院宣の趣を申さる。二位殿へば、御文細ごまぐ

と書きて参らせらる。私の文をば許ゆるされなければ、人々の許もとへは言葉にて言ことつてらる。北の方大納言のすけ殿へも、言葉にて申されけり。旅の空にても、人は我に慰み、我は人に慰みしものを、引き分れて後、如何に悲しくおはすらん。契は朽ちせぬものと申せば、後の世には必ず生れあひ奉るべしと、泣くく言こと傳つへ給へば、重國も誠に哀に覺えて、涙をおさへて立ちにけり。爰に三位の中將の年頃の侍に、木工右馬允知時むくのうまのすけといふ者あり。八條の女院に見参の者にて候ひけるが、土肥の次郎實平が許もとに行きて、是は年來三位の中將殿に召し使はれ候ひし何某と申す者にて候ふが、今日大路にて見参らせ候へば、目もあてられず、餘に御いたはしく思ひ参らせ候ふ。何か苦しく候ふべき。知時ばかり御許されを蒙りて、今一度近づき参りて、はかなき昔語をも申して、慰め奉らばやと存じ候ふ。弓矢を取る身にても候はれば、軍合戦いくさかっせんの御供仕りたる事も候はず。朝夕只御前に伺候せしばかりにて候ひき。それも覺束なく思し召され候は

と、腰の刀を召し置かれて、托けて御許されを被り候はゞや、と申しければ、土肥の次郎なさい情なさけあるものにて、誠に御一身は何か苦しく候ふべき。さりながらもとて、腰の刀を請ひ取りてぞ入れてける。右馬允斜ならず喜び、急ぎ参りて、御有様を見奉るに、誠に深く思ひ入り給へると思しくて、御姿もいたくしをれ返りておはしけるを、見参らするに、知時涙も更に抑へがたし。中將夢に夢見る心地して、兎角の事をも宣はず。やゝありて、昔今の物語どもし給ひて後、さても汝して物言ひし人は、いまだ内裏にとや聞く。さこそ承り候へ。中將、我西國へ下りし時、文をも遣らず、言ひ送ることも無かりしかば、世々の契ちぎりは皆詐いつはりになりけるよ、と思ふらんこそ恥しけれ。文を遣らばやと思ふはいかに、尋ねて行きてんやと宣へば、知時、易き程の御事に候ふと申す。中將斜ならず悦び、やがて書いてぞたうてける。知時は賜りて、罷り出でんとしければ、守護の武士ども、如何なる御文にてか候ふらん、見参みまらせ候はんと申し

ければ、中將見せよと宣へば、見せてけり。苦しかるまじとて、取らせけり。知時は取りて、急ぎ内裏へまゐり、晝は人目の繁ければ、其邊近き小家に立ち寄り、日を待ち暮し、黄昏たそがれどき時にまぎれ入りて、件の女房の局の下口邊たぐにイみて聞きければ、此女房の聲と思しくて、あないとほし、幾らもまします公達の中に、此人一人かやうになり給ふよ、人は皆奈良を焼きたる伽藍の罰といひあへり。中將もさぞいひし。我心におこりては焼かねども、悪黨多かりしかば、手にく火を放ちて、多くの塔堂を焼き滅す。末の露しづく、本の例ためしあれば、我身一つの罪業さいごふにこそならんずらめといひしが、實けにさと覺ゆるぞやとて、泣かれければ、知時はにもかく歎き給ふことといはしさとと思ひ、物申さんといへば、何事と答ふ。是に本三位の中將殿よりの御文の候ふ、と申したりければ、日頃ば耻ぢて見え給はぬ人の、いづらや、いづらとて、走り出で、手づからこの文を取りて見給ふに、西國にて生捕にせられたりし有様、今日明日をも

待たぬ身の行方など、こまこまと書きて、奥には一首の歌ぞありける。
 涙川うき名を流す身なりとも今一たびの逢ふ瀬ともがな
 女房この文を顔におし當て、とかくの事をも宣はず、引きかつぎてぞ臥し給ふ。かくて時刻遙におし移りければ、知時御返事賜りて、歸り参り候はんと申しければ、女房泣くく御返事書き給へり。心苦しくいふせくて、此の二年を送りたりし有様、こまこまと書きて、

君ゆゑに我もうき名を流すとも底の水屑とともになりなん

知時はを賜りて、歸り参りたりければ、守護の武士ども、如何なる御文にてか候ふらん、見参らせんと申しければ、見せてけり。苦しく候ふまじとて奉る。中將是を見給ひて、いと御物思やまさられけん、やありて、土肥の次郎實平を召して宣ひけるは、さても此程各の情深く芳心せられつるこそ、ありがたく嬉しけれ、今一度芳恩蒙りたき事あり。我は一人の子なれば、うき世に

思ひ置くことなし。年來契りたりし女房に、今一度對面して、後生の事をもいひおかばやと思ふはいかにと宣へば、土肥の次郎情あるものにて、誠に女房などの御事は何か苦しく候ふべき、疾うくとて許し奉る。中將斜ならず喜ぶ、人に車借りて遣されたりければ、女房取りあへず、急ぎ乗りてぞおはしけり。縁に車やり寄せ、此の由かくと申したりければ、中將車寄まで出で向ひ、武士どもの見参らせ候ふに、下りさせ給ふべからずとて、車の簾を打ちかづき、手に手を取り組み、顔に顔をおし當て、暫しは兎角の事をも宣はず、只泣くより外のことぞなき。やありて、中將涙をおさへて宣ひけるは、西國へ下りし時も、今一度御見参に入れたかりしかども、大方の世の物騒がしき、申し送るべき便もなくして罷り下り候ひき。其の後御文をも奉り、御返事をも見参らせたく候ひつれども、旅の空の物憂さ、朝夕の軍立に隙なく、空しく罷り過ぎ候ひき。今度一の谷にて、如何にもなるべかりし野の、生きながら捕はれて、

再び都へ罷り上り候ふも、御見参に入るべきことにて候ふぞやとて、又涙
 を抑へて臥し給ふ。互の心のうち、推し量られてあはれなり。かくて小夜もや
 う／＼更け行けば、守護の武士ども、此の程は大路の狼籍もぞ候ふに、疾う／＼
 と申しければ、中將力及びたまはず。やがて返したまふ。車やり出せば、中將、
 女房の袖をひかへて、

逢ふことも露の命も諸共に今宵ばかりや限りなるらん
 女房取りあへず、

限りとて立ち別るれば露の身の君より先に消えぬべきかは

さて女房は内裏へ参り給ひぬ。その後は、守護の武士ども許されば、時々只御文
 ばかりぞ通ひける。この女房と申すは、民部卿入道親範の女なり。みめかた
 ち世に勝れ、情ふかき人なれば、中將南都へ渡されて、斬られ給ひぬと聞えし
 かは、やがて様を變へ、濃き墨染に變はれて、かの後世菩提を弔ひ給ふぞあは

れなる。

屋島院宣の事

日數経れば、院宣の御使御壺の召次花方、同じき廿八日、讃岐の國屋島の磯
 に下り着きて、院宣を取り出して奉る。大臣殿以下の卿相雲客寄り合ひ給ひて、
 この院宣を開かれけり。一人聖體、北關の九禁を出て諸州に幸し、三種の神
 器、南海四國にうづもれて、數年を経、尤朝家の歎、亡國の基なり。抑ゝかの
 重衡の卿は、東大寺焼失の逆臣なり。須く頼朝の朝臣申し受くる旨に任せて、
 死罪に行はるべしといへども、獨、親族に別れて、既に生捕となる籠鳥の雲を
 戀ふる思ひ、遙に千里の南海に浮び、歸雁友を失ふ心、定めて九重の中途に通
 せんか。然れば則ち三種の神器、都へ返し奉られんに於ては、彼の卿を寛宥
 せらるべきなりていれば、院宣かくの如く、依りて執達件の如し。壽永三年
 二月十四日、大膳の大夫成忠が承り謹上、前の平大納言へとぞ書かれたる。

請文の事

大臣殿、平大納言の許へ院宣の趣を申されけり。二位殿中將の文あけて見給ふに、重衡こんじやうを今こ生にやうにて、今一度御覽ぞんと思し召され候はゞ、三種の神器の御事をよきやうに申させ給ひて、都へ返し入れさせ給へ、さらば御目にかゝるべしとも存じ候はず、とぞ書かれたる。二位殿この文を顔に押し當てり、人々のおはしける後の障子を引きあけて、大臣殿の御前に仆れ伏し、しばしは物をも宣はず。やゝありて起き上り、涙を抑へて宣ひけるは、これ見給へ、宗盛、京より中將が言ひおこしつる事のむざんさよ、實げにも心の中に、如何ばかりの事をか思ふらん。只我に思ひゆるして、三種の神器の御事を、よきやうに申して都へ返し入れ奉らせ給へと宣へば、大臣殿申させ給ひけるは、宗盛もさこそは存し候へども、さしもに我が朝の重寶ちやうほう三種の神器を、重衡一人に代へ参らせん事、且は世のため然しかるべからず。且は頼朝が返り聞かんずる所も、いひが

ひなく候ふ。その上、帝王の御世を保たせ給ふ御事も、偏ひとへに此の内侍所の渡らせ給ふ御故なり。さて餘あまの子共親しき人々をば、中將一人に思し召しかへさせ給ふべきか、子の悲みといふとも、事にこそより候へ、ゆめく叶ひ候ふまじとの給へば、二位殿、世にも本意ほんいなげにて、重ねて宣ひけるは、我故入道相國あきに後おれて後は一日片時も、命生きて世にあるべしとは思はざりしかども、主上の何時となく、西海の波の上に漂はせ給ふ御心苦しさに、二度、代よにあらせ奉らんがためにこそ、憂きながら今日までもながらへたり。中將一の谷にて生捕にせられぬと聞きし後は、いと胸せきて、湯水も喉のどへ入れられず。中將この世になきものと聞かば、我も同じ道に赴かんと思ふなり。再び物を思はせぬ先に、只我を失へやとて、なめき叫び給へば、誠にさこそはといたはしくて、皆ふしゆ伏目にぞなられける。新中納言知盛の痢の異見に申されけるは、さしもに我が朝の重寶、三種の神器を都へ返し入れ奉りたりとも、重衡返し給はらんことあ

りがたし。只そのやうを、恐なく御請文うけぶみに申させ給ふべうもや候ふらんと、申されければ、此の儀尤も然るべしとて、大臣殿、御請文を申さる。二位殿は涙にくれて、筆の立所たちとも覚え給はれども、志をしるべに、泣くく御返事書き給へり。北の方大納言の佐殿すけは、兎角の事をもの給はず、引きかづきて臥し給ふ。其の後平大納言時忠の卿、院宣の御使御壺の召次花方を召して、汝法皇の御使として、多くの波路を忍びて、遙々と是まで下りたるしに、汝が一期ひとの間の思出一つ興ふべしとて、花方が面に、波かたといふ焼印やきじるしをぞせられける。都へ歸り上りたりければ、法皇御覽ありて、汝花かたか。さん候ふ。よし、さらば波かたとも召せかして、笑はせおはします。その後うけ文をぞ開かれける。

今月十四日の院宣、同じき二十八日、讃岐の國屋島の磯に到來、謹みて以て承る所くだんの如し。但し是につきて彼を案ずるに、通盛の卿以下、當家數輩、

攝州一の谷にて、既に誅せられ畢りぬ。何ぞ重衡一人が寛宥くわんいうを悦ぶべきや。それ我君は、故高倉の院の御讓を受けさせ給ひて、御在位既に四箇年、政、堯けろ舜しゆんの古風をとぶらふ所に、東夷北狄黨を結び、群をなして入洛の間、且は幼帝えうてい母后の御歎尤も深く、且は外戚近臣の憤いみじかり淺からざるによりて、暫く九國に幸みゆきす。還幸なからんに於ては、三種の神器、いかでか玉體を放ち奉るべきや。夫れ臣は君を以て心とす。君は臣を以て體とす。君安ければ則ち臣安く、臣安ければ則ち國安し。君、上に憂ふれば、臣、下に樂まず。心、中に憂あれば、體、外に喜なし。乃祖平將軍貞盛、相馬の小次郎將門まごかどを追討せしより以來、東八箇國を鎮めて、子々孫々に傳へて、朝敵の暴臣を誅罰して、代々世々に至るまで、朝家の聖運を守り奉る。然れば則ち、故亡父太政大臣、保元平治兩度の激亂の時、勅命を重じて私の命を輕ず。是偏ひとへに君の爲にして、全く身の爲にせず。就中、彼の頼朝は、去ぬる平治元年十二月、左馬の頭義朝が謀

反によりて、既に誅罰せらるべきよし、頻に仰せ下さるといへども、故入道大相國慈悲のあまり、申し宥められし所なり。然るに、昔の鴻恩を忘れて、芳意を存ぜず、忽に狼羸の身を以て、妄に蜂起の亂をなす、至愚の甚しき事申して餘りあり。早く神明の天罰を招ぎ、竊に敗績の損滅を期するものか。それ日月は一物のために其明らかなる事を暗くせず。明王は、一人がために其の法を枉げず。一惡を以て其の善を捨てず、少瑕を以て其の功を蔽ふことなかれ。且は當家數代の奉公、且は亡父數度の忠節、思し召し忘れずば、君忝くも四國の御幸あるべきか。時に臣等院宣を承りて、二度舊都にかへりて、會稽の耻をきよめん。若ししからずば、鬼界、高麗、天竺、震旦に至るべし。悲しきかな。人皇八十一代の御宇に當りて、我朝神代の靈寶、遂に空しく異國の寶となさんか。宜しく是等の趣を以て、然るべき様にもらし奏聞せしめ給へ。宗盛頓首、謹みて申す。壽永三年二月二十八日、從一位前の内大臣平朝臣宗盛が請文、と

こそ書かれけれ。

戒門の事

三位の中將、此の由を聞き給ひて、さこそはあらんずれ、如何に一門の人々のわるく思はれけんと、後悔せられけれども、かひぞなき。實にも重衡一人を惜みて、さしにも我朝の重寶三種の神器を、返し給はんとも覺えれば、此の請文の趣は、かれてより思ひ設けられたりしかども、未だ左右を申されざりつる程は、何となく心もとなく思はれけるに、請文既に到來して、關東へ下るべきに定りしかば、三位の中將、都の名残も今更惜しくや思はれけん、土肥の次郎實平を召して、出家せばやと思ふはいかにと宣へば、此の由を九郎御曹子へ申す。院の御所へ奏聞せられたりければ、法皇、賴朝に見せて後こそ、ともかくも計らはめ。只今はいかて許すべきと仰せければ、此の由を中將殿に申す。さらば年頃契りたる聖に、今一度對面して、後生の事をも申し談せばやと思ふは

いかに、との給へば、土肥の次郎、聖をば誰と申し候ふやらん。黒谷の法然坊といふ人なり。さては苦しく候ふまじ、疾うくとて許し奉る。三位の中將斜ならず悦び、やがて聖を請じ奉りて、泣く／＼申されけるは、今度西國にて如何にもなるべかりし身の、生きながら捕はれて罷り上り候ふは、再び上人の御見参に入るべきにて候ひけり。さても重衡が後生は如何候ふべき、身の身にて候ひし程は、出仕に紛れ、世務にほだされ、驕慢の心のみ深くして、到來の昇沈顧みず。况や運盡き世亂れて、都を出てし後、こゝに戦ひかしこに争ひ、人を亡し身を助からんと思ふ悪心のみ遮りて、善心は嘗て起らず、就中、南都炎上の事は、王命と申し、武命といひ、君に仕へ、世に従ふ法、遁れ難くして、衆徒の悪行を鎮めんがために、罷り向ひて候へば、不慮に伽藍の滅亡に及びぬることは、力及ばざる次第なり。されども時の大將軍にて候ひし間、實一人に歸すとかや申し候ふなれば、一衛一人が罪業にこそなり候ひぬらめ、

とおぼえ候ふ。今又彼是耻を暴すも、しかしながら、其の報とのみこそ思ひ知られて候へ。今は髪を剃り、乞食頭陀の行をもして、偏に佛道修行したく候へども、かゝる身に罷りなりて候へば、心に任せ候はず。如何なる經を誦じても、一向助かるべしとも覺えぬことこそ口惜しく候へ。つらく一生の化行を按ずるに、罪業は須彌よりも高く、善言は微塵ばかりも貯なし。かくて命空しく終り候ひなば、火穴湯の苦果敢て疑なし。願くは上人慈悲を起し、憐れを垂れ給ひて、かゝる悪人の助かりぬべき方法候はゞ、示し給へと申されければ、上人涙に咽びうつぶして、暫しはとかくの事もの給はず。やゝありて上人宣ひけるは、受け難き人身を受けながら、空しく三途に返りまします事、悲みても猶あまりあり。然るに今穢土を厭ひ、淨土を願はんと思し召さば、悪心を捨て、善心を起しましたさんに於ては、三世の諸佛も定めて隨喜し給ふべし。夫れ出離の道區々なりとは申せども、末法濁亂の機には、唱名を以て勝れ

たりとす。志を九品ほんに分ち、行を六字つじに約めて、如何なる愚智ぐちあんどん闇鈍の者も唱ふるに便たよりあり。罪深ければとて、卑下ひげし給ふべからず。十惡五逆あしん廻心すれば、往生かうを遂ぐ。功德くどく少ければとて、望を絶つべからず。一念十念の心を致せば來迎かうす。專唱せんしやうみやうがうしさいはう名號なごう至西方さいほうと釋して、専ら名號を唱ずれば、西方にいたり、念々唱名常懺悔と宣ひて、念々に彌陀を唱ふれば、懺悔するなりとぞ教へける。利劍即世對りけん號を頼めば覺厭まけん近づかず。一聲唱念罪皆除と念ずれば、罪皆除のぞけりのぞと見えたり。淨土宗の至極は、各略を存じて、大略これを肝心とす。但し往生とくひの得否は、信心の有無によるべし。只この教を深く信じて、行往ぎやうじやう座臥、時所諸縁を嫌はず、三業四域に於て、心念口唱を忘れ給はずば、畢命ひつみやうを期として、此苦域の界を出で、彼の極樂淨土の不退の土に往生し給はん事、何の疑うたがひかあらんや、と教化けうけし給へば、三位の中將斜ならず悦び、願くは此ついでの次に戒を保たばや、とは存じ候へども、出家仕らては叶ひ候ふまじや、と申されたり

25 平家物語 十卷

ければ、上人、出家せぬ人も、戒を保つことは常の習ひなりとて、額かみそりに剃刀を當て、判る眞似まねをして、十戒を授けらる。中將、隨喜の涙を流して、是を受け保ち給ふ。上人も萬物よろづあはれに覺えて、かきくらす心地して、泣く／＼戒をぞ説かれける。御布施ふせと思しきて、日頃おはして遊ばれける、侍もとの許に預け置かれける御硯を、知時をして召し寄せて、上人に奉り、是をば誰にも給ひ候はで、常に御目のかゝらん所に置かれ候ひて、某がものぞかしと御覽みせられん度毎に、御念佛候ふべし。又御暇には、經をも一卷御回向おむかう候はゞ、然るべく候ふと申されければ、上人とかくの返事にも及び給はず、是を取りて懐に入れ、墨染の袖を顔に押し當て、泣くなく黒谷へぞ歸られける。件の硯は、親父入道相國、宋朝の御門みかどへ沙金を多く參らせ給ひたりしかば、返報とおぼしめて、日本和田の平大相國の許へとて、送られたりけるとかや。名をば松隆とぞ申しける。

海道くだりの事

さる程に、本三位の中將重衡の卿をば、鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝、顔に申されければ、さらば下さるべしとて、土肥の次郎實平が手より、九郎御曹子の宿所へ渡し奉る。同じき三月十日の日、梶原平三景時に具せられて、關東にこそ下られけれ。西國にて如何にもなるべかりし人の、生きながら捕はれて、都へ上り給ふだに口惜しきに、今更關の東へ赴かれけん心の中、推し量られてあはれなり。四の宮河原になりぬれば、爰は、昔、延喜第四の皇子蟬丸の、關の嵐に心をすまし、琵琶を弾き給ひしに、博雅の三位といひし人、風の吹く日も吹かぬ日も、雨の降る夜も降らぬ夜も、三年が間歩を運び、立ち聞きて、彼の三曲を傳へけん、藁屋の床のいにしへも、思ひやられて哀れなり。相坂山をうち越えて、勢多の唐橋、駒もとゞると踏み鳴らし、雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞にくもる鏡山、比良の高峯を北にして、伊吹の岳も近づきぬ。心を留むとしなけれども、荒れてなかくやさしきは、不破の關屋の板廂、

いかに鳴海の汐干湯、涙に袖はしをれつゝ、かの在原の何某の、唐衣きつゝ馴れにしと詠めけん、三河の國の八橋にもなりぬれば、蜘蛛手にものをとあはれなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江にさわぐ波の音、さらても旅は物憂きに、心をつくす夕まぐれ、池田の宿にも着き給ひぬ。彼の宿の長者熊野が女侍従が許に、その夜は三位宿せられけり。侍従、三位の中將殿を見奉りて、日比はつてにだに思し召し寄り給はぬ人の、今日かゝる所へ入らせ給ふことの不思議さよとて、一首の歌を奉る。

旅の空埴生の小屋のいぶせさに故郷いかに戀しかるらん
中將の返事に、

故郷も戀しくもな、旅の空都もつひのすみかなられば
やゝありて、中將梶原を召して、さても只今の歌の主はいかなるものぞ。やさしくも仕りたるものかなと宣へば、景時畏りて申しけるは、君は未だ知し召さ

れ候はずや。あれこそ屋島の大正殿の、未だ當國の守にて渡らせ給ひし時、召され参らせて、御最愛候ひしに、老母をこれに止め置き、常は暇を申しかども、賜はざりければ、頃は三月の始にてもや候ひけん、

いかにせん都の春は惜しけれど馴れしあづまの花や散るらん

といふ名歌仕り、暇賜はりて罷り下り候ひし、海道一の名人にて候ふとぞ申しける。都を出でて日數経れば、三月も半過ぎ、春も既に暮れなんとす。遠山の花は残の雪かと見えて、浦々島々霞みわたり、來し方行く末の事ども、思へ給ふにも、こはされば如何なる宿業のうたてさぞと宣ひて、只盡きせぬものは涙なり。御子の一人もおはせぬことを、母の二位殿も歎き、北の方大納言の佐殿も本意なきことにし給ひて、萬の神佛にかけて祈り申されけれども、そのしるしなし。かしこくぞなかりける、子だにもあらましかば、如何ばかり思ふ事あらん、との給ひけるこそ切めてのことなれ。小夜の中山にかゝり給ふに

も、又越ゆべしとも覺えれば、いと哀の數そひて、袂ぞいたく濡れまさる。うつしの山邊の薦の道、心細くも打ち越えて、手越を過ぎて行けば、北に遠ざかりて、雪白き山あり。問へば、甲斐の白峰といふ。その時三位の中將、落つる涙をおさへつゝ、

惜しからぬ命なれども今日までにつれなきかひの白ねをも見つ

清見が關打ち越えて、富士の裾野になりぬれば、北には青山峩々として、松吹く風颯々たり。南には蒼海漫々として、岸打つ浪も茫々たり。戀せば瘦せぬべし、戀せずもありけりと、明神の謠ひ始め給ひけん、足柄の山打ち越えて、こゆるぎの森、鞠子川、小磯、大磯の浦々、やつまと、とがみが原、見こしが崎をも打ち過ぎて、急がぬ旅とはおもへども、日數やうく重れば、鎌倉へこそ入りたまへ。

千手の事

さる程に、兵衛の佐殿、三位の中將殿に對面して申されけるは、抑々頼朝、君の御憤いさばはりを休め奉り、父の耻を清めんと思ひたちし上げ、平家を亡さんことは、案の内に存ぜしかども、正しくかやうに御目にかゝるべしとは、かけて存じ候はず。この状にては、屋島の大將殿の見參にも入りぬべしと覺え候ふ。さても南都炎上のことは、故入道相國の御成敗にて候ひけるが、又時に取りての御計ひか、以の外の罪業にてこそ候ふめれ、と申されければ、三位の中將宣ひけるは、先づ南都炎上のことは、故入道相國の成敗にもあらず、又重衡が私の發議はつきにても候はず、衆徒の悪行を鎮めんがために、罷り向ひて候ひし程に、不慮りよに伽藍がらんの滅亡に及び候ひぬることは、力及ばざる次第なり。事新らしき申事にて候へども、昔は源平左右に争ひて、朝家の御かため固かためたりしかども、近き比ころは、源氏の運うきたりし事、人皆存知の旨なり。就中、當家は保元平治より以來、度々朝敵を平げ、勸賞身に餘り、悉くも一天の君の御外戚として、帝祖太政大

臣にいたり、一族の昇進六十餘人、廿餘年がこのかたは、官加階天下に肩を雙ぶるものも候はず。それにつき候ては、帝王の御かたき討ちたるものは、七代まで朝恩盡つきずと申すことは、極めたる僻事ひがことにてぞ候ひける。その故は、まのあたり故入道相國は、君の御爲に命を失はんとする事、度々に及ぶ。されども其の身一代の幸にて、子孫かやうになるべきやは。運つき、世亂れて後は、戸かばねを山野に暴さらし、憂うき名を西海の波に流さばやとこそ存ぜしに、生きながら捕はれて、是まで下るべしとはゆめ／＼存じ候はず。只前世の宿業くちをこそ口惜しく候へ、但殷湯いんとうは夏臺かだいに捕はれ、文王は羌里いぢりに捕はるといふ文あり。上古猶此の如し。況や末代に於てをや。弓矢取る身の敵の手に渡りて、命を失はんこと、全く耻にて耻ならず。只芳恩には、疾はう／＼頭はを刎はれらるべしとて、其の後は物をも宣はず。梶原是を承りて、あつばれ大將軍やとて、涙を流す。侍ども、皆袖をぞ濡しける。兵衛の佐殿も、誠にあはれに思はれければ、抑々平家を頼朝

が私の誓とは、ゆめ／＼思ひ奉らず。只帝王の仰こそ思ひ候へ。さりながらも、南都を亡されたる伽藍の敵なれば、大衆定めて申す旨もやあらんずらんとて、伊豆の國の住人、狩野の介宗茂にぞ預けられける。その體冥土にて、娑婆世界の罪人を、七日々々の十王の手に渡さるらんも、かくやと覺えて哀れなり。されども狩野の介は情ある者にて、いたゞ厳しくも當り奉らず。やう／＼にいたはり参らせ、剩、湯殿のしつらひなどして、御湯引かせ奉る。中將道すがらの汗いぶせかりければ、身を清めて失はれんにこそと思ひて、待ち給ふ所に、やゝありて年の齡二十ばかりなる女房の、色白く清げにて、髪のかゝり誠に美しきが、目結の帷子に染附の湯巻さして、湯殿の戸押しあけて参りたり。其跡に十四五ばかりなる女の童の、髪は粗だけなりけるが、小村濃の帷子着て、牛挿盥に櫛入れて持ちて参りたり。此女房介錯にて、やゝ久しく御湯ひかせ奉り、髪洗などして、暇申し出てけるが、男などはことなくもぞ思しめす。

女はなか／＼苦しかるまじとて、鎌倉殿より参らせられて侍ふ。何事も思し召すことあらば、承りて申せとこそ、兵衛の佐殿は仰せ候ひつれ。中將今はかゝる身となりて、何事か思ふべき。只思ふ事とて、出家ぞしたきと宣へば、彼の女房歸り参りて、兵衛の佐殿に此の由を申す。兵衛の佐殿、それ思ひよらず、私の誓ならばこそ、朝敵として預り奉りたれば、叶ふまじとぞ宣ひける。かの女参りて、三位の中將殿に此の由を申す。暇申し出てければ、中將守護の武士に宣ひけるは、さても只今の女房は、優なりつるものかな、名をば何といふやらんと問ひ給へば、狩野の介申しけるは、あれは手越の長者の女にて候ふが、みめかたち心さま、優にわりなきものとて、此の二三年は、佐殿に召し置かれ候ふ、名をば千手の前と申し候ふとぞ申しける。其の夕雨すこし降りて、萬物淋しげなる折節、件の女房琵琶琴持たせて参りたり。狩野の介も、家の子郎黨十餘人引き具して、中將殿の御前近く候ひけるが、酒を勧め奉る。千手の前

酌をとる。中將少しうけて、いと興なげにておはしければ、狩野の介申しけるは、且聞し召されてもや候ふらん。宗茂は本より伊豆の國の者にて候へば、鎌倉にては旅にて候へども、心の及ばん程は、奉公仕り候ふべし。何事も思し召すことあらば、承りて申せと、兵衛の佐殿仰せ候ふ。それ何事にて申して、酒をすしめ奉り給へといひければ、千手の前、酌をさしおき、羅綺の重衣たるは、情なき事を機婦に妬む、といふ朗詠を、一兩返したりければ、三位の中將、此朗詠をせん人をば、北野が天神、毎日三度かけりて守らんと誓はせ給ふとなり。されども重衡は、今生にてははや捨てられ奉りたる身なれば、助音しても何かせん。但罪障輕みぬべきことならば、從ふべしとの給へば、千手の前、やがて十悪といふとも猶引接す、といふ朗詠をして、極樂願はん人は、皆彌陀の名號を唱ふべしといふ今様を、四五返誦ひすましたりければ、其の時中將杯を傾けらる。千手の前たまはりて、狩野の介にさす。宗茂が飲む時に、琴

をぞ引きすましたる。三位中將、普通には此樂をば五常樂といへども、今重衡がためには、後生樂とこそ觀ずべけれ。やがて往生の急を彈かんと戯れ、琵琶を取り、轉手をねぢて、皇聲の急をぞ彈かれける。かくて夜もやうやう更け、萬心のすむまゝに、あな思はずや、吾妻にもかゝる優なる人のありけるよ。それ何事にて、今一聲との給へば、千手の前、重ねて一樹の蔭に宿りあり、同じ流を掬ふも、皆是先世の契といふ白拍子を、誠に面白くかぞへたりければ、三位の中將、燈暗くして數行虞氏が涙、といふ朗詠をぞせられける。譬へばこの朗詠の心は、昔唐士に、漢の高祖と楚の項羽と位を争ひ、合戦すること七十二度、戦毎に項羽勝ちぬ。されども遂には、項羽戦負けて亡びし時、驩といふ馬の、一日に千里をとぶに乗りて、虞氏といふ后と共に逃げ去らんとし給へば、馬いかと思ひけん、足を整へて働かず。項羽涙を流して、我威勢既にすたれたり、敵の襲ふは事の數ならず、只この后に分れんことをのみ、敵

き悲み給ひけり。燈暗くなりしかば、虞氏心細きに涙を流す。更け行くまゝには、軍兵四面に閉をつくる。此の心を橋きつしやうこう公の詩に作るを、三位の中將今思ひ出で、口ずさみ給ふにや、いと優しくぞ聞えし。さる程に、夜も明ければ、狩野の介は暇申して罷り出づ。千手の前も歸りけり。其の朝、兵衛の佐殿は、持佛堂に法華經讀みておはしける所へ、千手の前歸り参りたり。兵衛の佐殿打ち笑み給ひて、さても夕、中人をば面白くしつるものかなと宣へば、齋院さいいんの次官親能、御前に物書きて候ひけるが、何事にて候ふやらんと申しければ、佐殿すけどの宣ひけるは、平家の人々は、この二三箇年は、軍合戦のいとなみの外は、又また事あるまじきところ思ひしに、さても三位の中將の琵琶びわの撥音はちおとらうえい、朗詠らうえいの口ずさみ、夜もすがら立ち聞きつるに、優いゆうにやさしき人にておはしけりと宣へば、親能申しけるは、誰もゆゑ夕承りたく候ひしかども、折節いたはあひいたは勞る事の候ひて、承らず候ふ。此の後は常に立ち聞き候ふべし。平家は、代々歌人うたに才人達にて渡

らせ給ひ候ふ。先年あの人々を、花に譬へて候ひしには、此の三位の山崎殿をば、牡丹の花に譬へて候ひしかとぞ申しける。三位の中將の琵琶びわの撥音はちおとらうえい、朗詠らうえいの口ずさみ、兵衛の佐殿、後までもありがたき事にぞ宣ひける。其の後中將南都へ渡されて、斬られ給ひぬと聞えしかば、千手の前は、中々思ひの種とやなりにけん、聽きて様さまを變へ、濃き墨染にやつれはてし、信濃國善光寺に行ひすまして、彼の後世菩提ぼだいとぶらひけるぞ哀れなる。

横よこ笛ふえの事

さる程に、小松の三位の中將維盛の卿は、身がらは屋島にありながら、心は都へ通はれけり。郷里に止め置き給ひし、北の方、稚き人々の面影のみ、身にひしと立ちそひて、忘るゝ隙もなかりければ、あるに甲斐なき我身かなとて、壽永三年三月十五日の曉、忍びつゝ屋島の館をば紛れ出で、與三兵衛重景、石堂丸といふ童、船に心得たればとて、武里たけさとといふ舍人、是の三人を召し具して、

阿波の國結城の浦より船に乗り、鳴門の沖を過ぎ過ぎて、紀の路へ赴き給ひけり。和歌、吹上、衣通姫の神と現れ給へる、玉津島の明神、日前、國懸の御前を過ぎて、紀伊の湊にこそ着き給へ。それより山傳ひに都へ上り、戀しきものどもをも、今一度見もし見えばや、とは思はれけれども、伯父本三位の中將殿の主捕にせられて、京鎌倉に耻を暴させ給ふだにも口惜しきに、此の身さへ捕はれて、父の尸に血をあやさんことも心憂しとて、千度心は進めども、心に心を争ひて、高野の御山へ参り給ふ。高野に年比知り給へる、聖あり。三條の齋藤左衛門茂頼が子に、齋藤瀧口時頼とて、本は小松殿の侍たりしが、十三の年、本所へ参りたり。建禮門院の雜司横笛といふ女あり。瀧口是に最愛す。父この由を傳へ聞きて、世にあらん者の聲子にもなし、出仕などを、心易くせさせんと思ひ居たれば、よしなきものを思ひ初めてなど、あながちに諫めければ、瀧口申しけるは、西王母といひし人も、昔はありて今はなし、東方朔と

聞きしものも、名をのみ聞きて目には見ず。老少不定の界は、只石の火の光に異ならず。假令人長命といへども、七十八十をば過ぎず。その中に身の盛なる事は、僅に二十餘年なり。夢幻の世の中に見にくきものを、片時も見て何かせん。思はしき者を見んとすれば、父の命を背くに似たり。是善知識なり。しかじ憂き世を厭ひ、誠の道に入りなんとて、十九の年誓切りて、嵯峨の往生院に行ひすましてぞ居たりける。横笛此の由を傳へ聞きて、我をこそ捨てめ、様をさへ變へけんことの怨めしさよ、假令世をば背くとも、などかは斯くと知らせざらん。人こそ心強くとも、尋れて恨みんと思ひつゝ、黄昏がたに都を出て、嵯峨の方へぞあくがれける。比は二月十日餘のことなれば、梅津の里の春風に、よその匂もなづかしく、大井川の月影も、霞にこめて朧なり。一宵ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけめ。往生院とは聞きつれども、さだかに何れの坊とも知らざれば、此處にやすらひ、彼處にすみ、尋ねかぬるぞむさんな

る。住み荒したる僧坊に、念誦の聲しけるを、瀧口入道が聲と聞きすまして、御様の變りておはすらんをも、見もし見え参らせんがために、妾こそ是まで参りて候へと、具したる女にいはせければ、瀧口入道胸打ち騒ぎ、あさよしさに、障子の障より覗きて見れば、紺は露、袖は涙にうちしほれつゝ、少し面瘦せたる顔ばせ、誠に尋れかれたる有様、如何なる大道心者も心弱くなりぬべし。瀧口入道人を出して、全くこゝにはさる人なし、若し門違にてもや候ふらん、といはせたりければ、横笛なきけなく怒めしけれども、力及ばず、涙をおさへて歸りけり。その後、瀧口入道同宿の僧に語りけるは、是も世に靜にて、念佛の障^{しやうげ}碍は候はれども、飽かて別れし女に、此住居を見えて候へば、御令一度は心強くとも、又も慕ふことあらば、心も動き候ひなんぞ、暇申すとて、嵯峨をば出て高野へ上り。清淨^{しやうじやう}心院^{しんいん}に行ひすましてぞ居たりける。横笛も機をかへぬる由聞えしかば、瀧口入道、一首の歌をぞ送りける。

剃るまでは恨みしかども神弓まことの道に入るぞうれしき

横笛が返事に、

剃るとても何か恨みん神弓引きとむむべき心ならねば

その後横笛は、奈良の法華寺にありけるが、その思のつもりにや、幾程なくして遂にはかなくなりけり。瀧口入道此の由を傳へ聞きて、愈深く行ひすまして居たりければ、父も不興を許しけり。親しき者ども、皆用ひて、高野の壘とぞ申しける。三位の中將、此の壘に尋ね通ひて見給ふに、都に在りし時は、布衣に立烏帽子、衣紋つくろひ、髪をなで、花やかなりし男なり。出家の後は、今日始めて見給に、未だ三十にもならざるが、老僧^{らうそう}姿^{すがた}に瘦せ衰へ、濃き墨染に同じ袈裟、香の烟^{かうけぶり}に染みかをり、さかしげに、思ひ入りたる道心者、羨しくや思はれけん、彼の晋の七賢、漢の四皓^{しごう}が住みけん、南山、竹林のありさまも、これには過ぎじとぞ見えし。

高野の巻の事

瀧口入道、三位の中將を見奉り、こは現とも覚え候はぬものかな。さても屋島をは、何としてかは遁れさせ給ひて候ふやらん、と申しければ、三位の中將、さればとよ、都をば人なみくに出で、西國へ落き下りたりしかども、故郷に止め置きたりし稚き者共が、面影のみ身にひしと立ちそひて、忘るゝ縁もなかりしかば、その物思ふ心や、言はぬにしるくや見えけん。大臣殿も二位殿も、此の人は池の大納言のやうに、頼朝に心を通はして二心ありなと思ひ隔て給ふ間、いと心も止らて、是まであくがれ出でたるなり。是にて出家して、火の中、水の底へも入りなばやとは思へども、但、熊野へ参りたき宿願ありと宣へば、瀧口入道申しけるは、夢幻の世の中、とてもかくても候ひなんず、只長き世の闇こそ心憂かるべく候へ、とぞ申しける。やがて此の瀧口入道を先達にて、堂塔順禮して、奥の院へぞ参られける。高野山は、帝城を去りて二百里、

郷里を離れて無人聲、清嵐梢を鳴らしては、夕日の影靜なり。八葉の峯、入つの谷、誠に心もすみぬべし。花の色は林霧の底に綻び、鈴の音は尾上の雲にひびけり。河原に松生ひ、垣に苔むして、星霜久しく覺えたり。聲、延喜の御門の御時、御夢想の御告ありて、檜皮色の御衣を参らせ給ふに、勅使中納言資澄の卿、般若寺の僧正觀賢を相具して、この御山に上り、御廟の扉を押し開き、御衣を着せ奉らんとしけるに、霧隔て、大師拜まれさせ給はず。暗に觀賢深く愁涙して、我悲母の胎内を出て、師匠の室に入りしよりこのかた、未だ禁戒を犯せず、さればなどか拜み奉らざるべきとて、五體を地に投げ、發露涕泣したまへば、やうく霧はれて、月の出づるが如くに、大師拜まれさせ給ひけり。その時觀賢隨喜の涙を流して、御衣を着せ奉り、御髪の長く生ひ延びさせ給ひたるをも、剃り断るぞありがたき。勅使と僧正とは拜み給へども、僧正の御弟子石山の内供淨祐、其の時は未だ、にて供奉せられたりしが、大

師拜み奉りて、深く歎き沈みておはしけるを、僧正手とりて、大師の御
 蔭に押し當てらたけければ、其の手一期が、間芳しかりけるとかや。その移
 香は、石山の聖教に残りて、今にありとぞ承る。大師、御門の御返事に申さ
 せ給ひけるは、我菩薩陀に遇ひて、まのあたり盡く印明を傳ふ。無比の請願
 を起して、濃里の異域に侍り、晝夜に萬民を憐みて、普賢の悲願に任し、肉
 身に三昧を澄じて、慈氏の下生を待つとぞ申させ給ひける。彼の摩訶迦葉の
 鷲足の洞に籠りて、氏風の春の風を期し給ふらんも、かくやとぞ覺えける。
 御入定は、承和二年三月廿一日寅の一點のことなれば、過ぎにし方は三百餘
 歳、行末も猶五十六億七千萬歳の後、慈尊の出世、三會の曉を待たせ給ふらん
 こそ久しけれ。

維盛の出家の事

維盛が身のいつとなく、雲山の鳥の鳴くらんやうに、今日よ明日よと思ふ事

をとて、涙ぐみ給ふぞ哀れなる。潮風にくろみ、盡きせぬ物思ひに渡せ衰へて、
 其の人とは見え給はれども、猶世の人には勝れ給へり。其の夜は瀧口入道が庵
 室にかへりて、昔今の物語どもし給ひけり。更け行くまゝに、聖が行儀を見給
 へば、至極信心の床の上には、眞理の玉を研くらんと見えて、後夜晨朝の鐘の
 聲には、生死の眠を覺すらんとも覺たり。遅れぬべくは、かくてもあらまほし
 くや思はれけん、明けしれば、東禪院の知覺上人と申す聖を請じ奉りて、出
 家せんとし給ひけるが、與三兵衛重景、石童丸を召して宣ひけるは、維盛こそ
 人知れの思を身に添ひながら、道狭く遁れ難き身なれば、如何にもなるといふ
 とも、汝等は命を捨つべからず。此の比は世にある人こそ多けれ。我如何にも
 なりなん後、急ぎ都へ上りて、各が身をも助け、且は妻子をもはぐみ、且は
 維盛が終世をも弔へかすと宣へば、二人の者ども涙に咽びうつぶして、しばし
 は兎角の御返事にも及ばず。やゝありて重景、涙をおさへて申しけるは、重景

那父、與三左衛門景安は、平治の逆亂の時、故殿の御供に候ひて、二條堀川の邊にて、鎌田兵衛と組みて、惡源太に討たれ候ひぬ。重景も何かは劣り候ふべきなれども、其の時は未だ二歳になり候へば、少しも覺え候はず。母には七歳にて後れ候ひぬ。情をかくべき親しき者、一人も候はざりしに、故大臣殿、御憐み候ひて、あれは我命に代りたりし者の子なればとて、朝夕御前にて育てられ參らせて、生年九つと申しし時、君の御元服候ひし夜、忝くも頭取り上げられ參らせて、盛の字は家の字なれば、五代につぐ重の字をば松王にと仰せられて、重景とは召され參らせけるなり。其の上童名をば松王と申しけることも、生れていみ五十日と申すに、父が抱きて參りたりしかば、此の家を小松といへば、祝ひてつくるなりと仰せられて、松王とはつけられ參らせて候ひけるなり。父かやうにて死にけるも、我身の冥加と覺え候ふ。随分同謀どもにも、芳心せられてこそ罷り過ぎ候ひしか。されば御臨終の御時も、此の世の中の事をば思

し召し捨て、一事も仰せざりしに、重景を御前へ召して、あなむざん、汝は重盛を父がかたみと思ひ、重盛は汝を景安が記念と思ひてこそ過しつれ。今度の除目に鞆負の尉になして、父景安を呼びしやうに、召さばやとこそ思しめしつるに、空しくなるこそ悲しけれ。相構へて、少將殿の御心にばし違ひ參らすな、とこそ仰せ候ひしか。日比は自然の事も候はゞ、先づ眞先に命を奉らんとこそ存じ候ひしに、見捨て參らせて、落つべきものと思し召され候ふ、御心中こそ耻しく候へ。此の比は世にある人こそ多けれど、仰を蒙り候ふは、當時の如くんば、皆源氏の郎黨共こそ候ふらめ。君の神にも佛にもならせ給ひなれば、樂み榮え候ふとも、千年の齡を経るべきか。假令萬年を保ち候ふとも、遂には終なかるべきかは。是に過ぎたる善智識何事か候ふべきとて、手づから髻切りて、瀧口入道にぞ剃らせける。石童丸も是を見て元結際より髪を切る。是も入つよりつき參らせて、重景にも劣らず、不慙にし給ひしかば、同じく瀧

口入道にぞ刺らせける。是等が先立ちて、かやうになるを見給ふにつきても、いと心細くなられける。あはれ如何にもして變らぬ姿を、今一度戀しき者どもに見えて、後かくなれば、思ふ事あらじと宣ひけるこそ、責めてのことなれ。さてしもあるべき事なれば、流轉三界中、思愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者と三返唱へ給ひて、終に刺おろさせ給ひてけり。三位の中將と與三兵衛は同年にて、今年は二十七歳なり。石童丸は十八にぞなりにける。やゝありて、舍人武里を召して、あなかしこ、汝は是より都へは上るべからず。その故は、遂には隱あるまじけれども、正に此の有様を聞きては、やがて様をも變へんずらんと覺ゆるぞ。只是より屋島へ参りて、人々に申さんずることばよな、且つ御覽じ候ひしやうに、大方の世間も物憂くあぢきなさまも、萬數添ひて覺えし程に、人々にかくとも知らせ参らせずして、かやうに罷り候ひぬることば、西國にて左の中將失せ候ひぬ。一の谷にて、備中の守討たれ候ひぬ。繼

盛さへかやうになり候へば、如何に各の便なく思し召され候はんずらんと、それのみこそ心苦しく候へ。抑唐皮といふ鎧、小鳥といふ太刀は、平將軍貞盛より以來、當家に傳へて、維盛までは嫡々九代に相當る。此の後若し運命開けて、都へ歸り上らせ給ふことも候はば、六代に賜ふべしと申すべしとぞの給ひける。武里、涙に咽びうつぶして、しばしは兎角の御返事にも及ばず、やゝありて涙を抑へて申しけるは、いづくまでも御供申し、最後の御有様をも見参らせて後こそ、屋島へも参らめと申しければ、さらばとて召し具せらる。善智議のためにとて、瀧口入道をも具せられけり。高野をば山伏修行者の様に出で立ちて、同じき國の内、山東へこそ出でられけれ。藤白の王子を始め奉りて王子々々を伏し拜み参り給ふほどに、千里の濱の北、岩代の王子の御前にて、狩裝束なる者七八騎が程行き遇ひ奉る。既に搦め捕らんずるにこそ、腹を切らんと、各腰の刀に手をかけ給ふ所に、さはなくして、馬より下り近づき奉りたりければ、

少しも過つべき氣色もなく、深く畏りて通りぬ。この邊にも見知り参らせたる者のあるにこそ、誰なるらんと耻しくて、いと足早にぞさし給ふ。是は當國の住人、湯淺の權守宗重が子、湯淺の七郎兵衛宗光といふ者なり。郎黨どもあれは如何にと問ひければ、あれこそ小松の大臣殿の御嫡子三位の中將殿よ、抑も屋島をば何としてかは、遁れさせ給ひたりけるやらん、はや御様かへさせ給ひたり。與三兵衛石童丸も、同じく出家して御供にぞ参りける。近づき参りて、御見参にも入りたかりつれども、御憚もぞ思し召すとて通りぬ。あな哀れなりける御事かなとて、袖を顔におし當て、さめくと泣きければ、郎黨ども、皆狩衣の袖をぞぬらしける。

熊野参詣の事

やうくさし給ふ程に、岩田川にも着き給ひぬ。この川の流を、一度も渡るものは、悪業、煩惱、無始の罪障消ゆなるものと、頼もしくぞ思しめす。本

宮證誠殿の御前にて、靜に法施參らせて、夜もすがら御山の體をながめ給ふに、心も詞も及ばれず。大悲擁護の霞は、野山に柵引き、靈驗無双の神明は、音無川に跡を垂る。一乗修行の岸には、感應の月隈もなく、六根懺悔の庭には、妄想の露も結ばず。何れもく頼もしからずといふことなし。夜更け人しづまりて後、敬白し給ひけるは、父の大臣殿の、此の御前にて命を召して、後世を助けさせ給へと、祈り申させ給ひし御ことなどまでも、思し召し出で、哀れなり。中にも當山權現は、本地阿彌陀如來にておはします。攝取不捨の本願過たず、淨土へ導き給へと祈り申されけり。中にも故郷に止め置き給ひし妻子安穩に、と祈られけるこそ悲しけれ。憂き世を厭ひ、誠の道に入り給へども、妄執は猶盡きずと覺えて哀れなりし事どもなり。明くれば本宮より船に乗り、新宮へぞ参られける。神の座を拜み給ふに、岩礁高く聳えて、嵐妄想の夢を破り、流水清く流れて、浪、塵埃の垢をすくぐらんとも覺えたり。飛鳥の

社伏し拜み、佐野の松原さし過ぎて、那智の御山に参り給ふ。三重に渡り落つる瀧の水、數千丈まで攀ぢのぼり、觀音の靈像は岩の上に現れて、ふたらくさむ補陀落山ともいひつべし。霞の底には、法花讀誦の聲聞ゆ、りやうじゆ靈鷲山とも申しつべし。抑々權現當山に、跡を垂れましくてより以來、我朝の貴賤上下歩を運び、頭を傾け、たかごころ掌を合せて、りしやう利生に預らずといふことなし。僧侶いらか齋を並べて、道俗袖をつらねたり。寛和の夏の比、花山の法皇、十善の帝位をすべらせ給ひて、九品ほんじやうせつの御剃を行はせ給ひけん、御庵室の舊跡には、昔を忍ぶと思しくて、老木の櫻ぞ咲きにける。幾らも並み居たりける那智なちこもり籠の僧どもの中に、此の三位の中將殿を、都にて能く見知り参らせたと思しくて、同行の僧に語りけるは、これなる修行者をば、誰やらんと思ひたればあな事もおろかや、小松の大臣殿の御嫡子、三位の中將殿にてましますなり。あの殿の未だ四位よの少將なりしは、安元の春の比、こら院の御所法住寺殿にて、五十の御賀のありしに、父小松殿は、内

大臣の左大將にておはします。叔父宗盛の卿は、大納言の右大將にて、階下に着せられき。其の外三位の中將知盛、頭とうの中將重衡以下、一門の公卿殿上人、今日をばれと時めき、かいじろ垣代に立ち給ふ中より、此の三位の中將殿、櫻の花をかざして、せいがいば青海波を舞ひて出でられたりしかば露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地を照し、天も輝くばかりなり。女院より關白殿を御使にて、御衣をかかけられしかば、父の大臣座を立ち、これを賜りて、右の肩にかけ、院を拜し奉り給ふ。面目たぐひ類少く見えし。かたへの殿上人も、如何ばかり羨しく思はれけん。内裏の女房達の中には、深山木の中の楊梅やうばいとこそおぼゆれ、などいはれ給ひし人ぞかし。只今大臣の大將を、待ちかけ給へる人とこそ見奉りしに、今日ば斯くやつれば給へる御有様、かかれては思ひよらざりしをや。移ればうつ變る世の習ひとはいひながら、哀れなりける御事かなとて、袖を顔に押し當て、さめくと泣きければ、那智籠の僧どもも、皆うち衣の袖をぞ絞りける。

維盛入水の事

三つの御山の参詣、事故なく送給ひしかば、濱の宮と申し奉る、王子の御前より、一葉くまの舟に竿さして、万里の滄海に浮び給ふ。遙の沖に山なりの島といふ所ありき。中將それに舟漕ぎ寄せさせ、岸にあがり、大なる松の木を削りて、泣く／＼名籍をぞ書きつけられける。祖父太政大臣平の朝臣清盛公法名淨海、親父小松の内大臣の左大將重盛公法名淨蓮、三位の中將維盛法名淨圓、年二十七歳、壽永三年三月廿八日那智の沖にて入水すと、書きつけて、舟に乗り、沖へぞ漕ぎ出で給ひける。思ひ切りぬる道なれども、今はの時にもなりぬれば、さすが心細く悲しからずといふことなし。比は三月廿八日のことなれば、海路遙に霞みわたり、哀を催すたぐひかな。只大方の春だにも、暮れ行く空は物憂きに、況や是は今日を最期、只今限のことなれば、さこそは心細かりけめ。沖の釣舟の波に消え入るやう覺ゆるが、さすが沈みも果てぬを見給ふにつけても、

御身の上とや思はれけん、己が一つら引きつれて、今はと歸るかりがれの、越路をさして鳴き行くも、故郷へ言傳せまほしく、蘇武が胡國の恨まで、思ひ殘せる限もなし。こはされば何事ぞや、猶妄執の盡きぬとこそと思ひかへし、四に向ひ手を合せ、念佛したまふ心の中にも、さても都には、今を限とはいかてか知るべきなれば、風の使の音づれをも、今や／＼とこそ待たんずらめと思はれければ、合掌をみだり念佛を止め、聖に向ひて宣ひけるは、あはれ人の身に妻子といふ者をば、持つまじかりけるものかな。今生にて物を思はするのみならず、後世菩提の妨となりぬる事こそ口惜しけれ。只今も思ひ出でたるぞや。かやうの事を心中に残せば、餘に罪深ふかむる間、懺悔ざんげするなりとぞ宣ひける。聖も哀に思ひけれども、我さへ心弱くしては叶はじとや思ひけん、涙押し拭ひ、さらぬ體ていにもてなし、あはれ高きも賤しきも、恩愛の道は思ひ切られぬことにて候へば、誠にさこそ思し召され候ふらめ。中にも夫妻は一夜の枕を並ぶるも、

五百生の宿縁と承れば、先世の契淺からず候ふ。生者必滅、會者定離は、うき世の習にて候ふなり。末の露、本の雲の例あれば、假令遲速の不同ありといふとも、後れ先立つ御わかた、終になくても候ふべき。彼の關山宮の秋の夕の契も、遂には心を碎く端となり、甘泉殿の生前の恩も終なきにしもあらず。松子梅生生涯の恨あり。等覺十地猶生死の掟に従ふ。假令君、長生の樂に誇り給ふとも、此の恨は終になくても候ふべき。假令又百年の齡をたもたせ給ふとも、此の御別はいつも只同じ事と思し召さるべし。第六天の覺王といふ外道は、慾界の六天を皆我物と領して、中にも此の界の衆生の生死に離るゝことを惜み、或は妻となり、或は夫となりて、是を妨げんとするに、三世の諸佛は、一切衆生を一子の如く思し召して、彼の極樂淨土の浮揚の土に漣め入れんとし給ふに、妻子は無始曠劫よりこの方、生死に臨會す。羈なるが故に、佛は重く戒め給ふなり。さればとて、御心弱く思し召すべからず。

源氏の先祖伊豫の入道賴義は勅命によりて、奥州の夷安倍貞任を攻め給ひし時、十二年が間に人の首を切る事一萬六千餘人なり。其の外山野の獸、江河の鱗のその命を絶つ事、幾千萬といふ數を知らず。されども終焉の時、一念の菩提心を起しゝによりて、往生の素懷を遂げたりとこそ承れ。就中、御出家の功德莫大なれば、先世の罪障は皆滅び給ひぬらん。若し人ありて、七寶の塔を立てんこと、高さ三十三天に至るといふとも、一日の出家の功德には及ぶべからず、又人ありて、百千歳が間、百羅漢を供養したらんずるよりも、一日の出家の功德には及ばず、とこそ説かれたれ。罪深かりし賴義も猛きが故に、往生を遂げ申し候はんや。君はさせる御罪業もましまさざらんに、なごか淨土へ参らせ給はて候ふべき。其の上當山權現は、本地阿彌陀如來にて候はします。始無三惡趣の願、終り得三寶忍の願に至るまで、一々の請願衆、化度の願ならずといふ事なし。中にも、第十八の願に、設我得佛十方衆生至心信樂、

欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺と説かれたれば、一念十念のたのみあり。只、の教を深く信じて、ゆめ／＼疑をなすべからず。無二の懇念を致して、もしは一返も、若しは十返も唱へ給ふものならば、彌陀如來六十萬億、那由多恒河沙の御身を縮め、丈六八尺の御形にて、觀音勢至無數の聖衆、化佛菩薩百重千重に圍繞し、妓樂歌詠して、只今極樂の東門を出て、來迎し給はんずれば、御身こそ滄海の底に沈むと思し召さるとも、紫雲の上に上り給ふべし。成佛得脱して悟を開き給ひなば、娑婆の故郷に立ちかへりて、妻子を導き給はん事、還來穢國土人天、少しも過ち給ふべからずとて、頻に鐘打ちならし、念佛を勧め奉れば、中將然るべき善智識と思し召し、忽に妄念を断し、西方に向ひ、手を合せ、高聲に念佛百返ばかり唱へ給ひて、南無と唱ふる聲共に、海にぞ飛び入り給ひける。與三兵衛、石童丸も。同じく御名を唱へつゝ、續きて海にぞ沈みける。

三日平氏の事

舍人武里も、續きて海に入らんとしけるを、聖とり止め、泣く／＼教訓しけるは、如何にうたてても、君の御遺言をば違へ参らせんとはするぞ、下臈こそ猶うたてけれ。今は如何にもしてながらへて、御菩提を弔ひ参らせよといひければ、後れ奉りたる悲しさに、後の御供養の事も覺えずとて、舟底に仆れ伏し、をめき叫びし有様は、昔、悉達太子の檀特山へ入らせ給ひし時、車匿舍人健兒駒を賜りて、王宮にかへりし悲も、是には過ぎじとぞ見えし。浮きもや上り給ふと、暫しは舟を押し廻して見けれども、三人共に深く沈みて見え給はず。いつしか経讀み念佛して、回向しけるこそ哀れなれ。さる程に夕陽西に傾きて、海上も暗くなりければ、名残はつきせず思へども、さても有べき事なられば、空しき舟を漕ぎかへる、疾渡る舟の櫂の雫、聖が袖より傳ふ涙、わきて何れも見えざりけり。聖は高野へ歸りのぼり、武里は泣く／＼屋島へ参りけり。

り。御弟新三位の中將殿に、御文取り出して奉る。是をあけて見給ひて、あは
 心憂や、我思ひ奉るほど、人は思ひ給はざりけることよ、さらば引き具して、
 一所にも沈み果て給はで、所々にふさん、ことこそ悲しけれ。大臣殿も二位殿も、
 頼朝の心を遣はして、都へこそおはしたるらめとて、我等にも心を置き給ひし
 には、さては那智の沖にて、御身を投げたましくける、ござんなれ。さて御詞
 にて仰せられし事はなきかと宣へば、御詞にて申せと仰せ候ひしは、且御覽せ
 候ひしやうに、大方の世間も物憂く、あぢきなさも萬よろづ敷添ひて、覺えさせま
 しく候ふ程に、人々にも知らせませずして、かやうにならせ給ふ御事は、
 西國にて左の中將殿うせ給ひ候ひぬ。二の谷にて備中の守の殿の討たれさせま
 しく候ひぬ。御身さへかやうにならせましく候へば、如何に各の便なく思し
 召され候ふらんと、只是のみこそ、御心苦しく仰せられ候ひつれ。唐皮、小鳥
 の事までも、細々と語り申したりければ、新三位の中將殿、今は我身とても

都らふべしとも覺えぬものなとて、袖を顔に押し當てし、さめんとぞ泣かれ
 ける。故三位殿にいたく似参らせ給ひたりしかば、是を見る侍どもも、さし集
 めて袖をぞ濡しける。大臣殿も二位殿も、此の人は池の大納言のやうに頼朝
 は心を遣はして、都へこそおはしたるらめ、と思ひ居たれば、さはおはせざり
 しかとて、今更又悶え焦れ給ひけり、四月一日の日改元ありて、元暦と號す、
 其月除目行はれて、鎌倉の前右兵衛の佐頼朝を正下の四位し給ふ。本は従下の
 五位にておはせしが、忽に五階を越え給ふこそめてたけれ。同じき三日の日、
 崇徳院を神と崇め奉るべしとて、昔御合戦ありし大炊御門が末に、社を立て宮
 うつしあり。是は院の御沙汰にて、内裏には知し召されずとぞ聞えし。五月四
 日の日、池の大納言頼盛の卿關東へ下向、兵衛の佐殿常は情をかけ奉りて、御
 方かたをば全く疎おろかに思ひ奉らず、偏に故尼御前の渡らせ給ふところ存じ候へ、入
 齋大菩薩も御賞罰候へなど、度々せうじやう醫狀を以て申されたり。凡は兵衛の佐はか

リこそ、かくは思はれけれども、自餘の源氏等は如何あらんずらんと、覺束なく思はれけるに、鎌倉より使者を奉りて、急ぎ下り給へ、故尼御前を見奉ると存じて、疾く見参に入れ候はんと申されければ、大納言下り給ひけり。爰に彌平兵衛宗清といふ侍あり、相傳さうでんせん專一の者なりしが、相具しても下らず、如何にやと宣へば、君こそかくて渡らせ給ひ候へども、御一家の公達の、四海の波に漂はせ給ふ御事が、心苦しく候ひて、未だ安堵しても覺え候はれば、心少し落し据ゑて、追様おつさまにこそ参り候はめ、とぞ申しける。大納言、耻しく片腹痛く思し召して、誠に一門に引き別れて落ち止りしことをば、我身ながらいみじとは思はれども、さすが命も惜しく、身も捨て難ければ、なまじひに止りにき。此上は下らざるべきにもあらず、遙の旅に赴くに、いかてか見送らざるべき。うけず思はゞ落ち止りし時、などさは言はざりしぞ、大小事一向汝ひたすにこそいひ合せしかと宣へば、宗清居直り畏りて申しけるは、あはれ高きも賤しきも、人

の身に命程惜しきものやは候ふ。されば世をば捨つれども、身をば捨てずとこそ申し傳へて候ふなれ。御とまりを悪しとには存じ候はず、兵衛の佐も、甲斐なき命を助けられ参らせて候へばこそ、今日にかゝる幸にもあひ候へ。流罪せられ候ひし時、故尼御前の仰にて、近江の國篠原の宿まで打ち送りたりし事など、今に忘れずと候ふなれば、御供に罷り下りて候はゞ、定めて引出物ひきだすもの要應きやうおうなどし候はんずらん。それにつきても、四海の波の上に漂はせ給ふ御一家の公達たち、又同諫どうれいどもの歸り聞かんずる所も、いひがひなく覺え候ふ。遙の旅に赴かせ給ふ御事は、誠に覺束なく思ひ参らせ候へども、敵をも攻めに御下り候はゞ、先づ一陣にこそ候べけれども是れは参らずとも更らに御事かけ候ふまじ、兵衛佐の殿尋ね申され候はゞ、折節相いたは勞る事ありと仰せられ候ふべしとて、涙を抑へて止りぬ。是を聞く侍ども、皆袖をぞ濡しける。大納言にがくしく、片腹痛く思はれけれども、此の上は下らざるべきにあらずとて、やがて立ち給ひ

ぬ。同じき十六日、池の大納言頼盛の卿、關東へ下着、兵衛の佐殿急ぎ對面をし給ひて、先づ宗清は如何にと問はれければ、折節相勞る事ありてと宣へば、如何に何を勞り候ふやらん、猶意趣を存じ候ふにこそ。先年かの宗清が許に預け置かれ候ひし時、事に觸れて情深く候ひしかば、あはれ御供に罷り下り候へかし、疾く見參に入らんと、戀しく存じて候へば、恨めしくも下り候はぬものかなとて、知行すべき莊園ども數多なし設け、様々の引出物を賜ばんと、用意せられたりければ、東國の大名小名、我もくと引出物を用意して、待つ所に下らざりければ、上下本意なき事どもにてぞありける。六月九日の日、池の大納言頼盛の卿、都へ歸り上り給ふ。兵衛の佐殿、今暫くはかくてもおはせよかしと宣へども、大納言、都に覺束なく思ふらんとて、やがて立ち給ひぬ。知行し給ふべき莊園私領、一所も相違あるべからず、並に大納言になし返さるべき由、法皇へ申さる。鞍馬三十疋、粟馬三十疋、長持三十枝に、金、巻類、染

物、風情のものを入れて奉らる。兵衛の佐殿かやうにし給ふとは、東國の大名小名、我もくと引出物を奉らる。馬だにも、三百疋までありけり。池の大納言頼盛の卿は、命生き給ふのみならず、かたがた疾く着きて、都へ歸り上られけり。同じき十八日、肥後の守貞能が叔父、平田の入道貞次を先として、伊賀、伊勢兩國の官兵等、近江の國へ討ち出てたりければ、源氏の末葉等發向して、合戦をいたす。同じき二十日の日、伊賀伊勢兩國の官兵等、しばしもたまらず攻落さる。平家相傳の家人にて、昔の好を忘れぬことはあはれなれども、思ひ立つこそおほけなけれ、三日平氏とはこれなり。

藤戸の事

さる程に、小松の三位の中將維盛の卿の北の方は、風の便の音づれも絶えて久しくなりければ、月に一度などは、必ず音づるものなと、待たれけれども、春過ぎ夏にもなりぬ。三位の中將、今は屋島にもおはせぬものをなど、申

す者ありと聞き給ひて、北の方あまりの覺束なさに、とかくして使を立たてし、屋島へ遣されたりけれども、使やがて立ちもかへらず。夏たけ秋にもなりぬ。七月の末に、彼の使歸り参りたり。北の方、さて如何にやと問ひ給へば、過ぎ候ひし三月十五日の曉、奥三兵衛重景、石童丸ばかり御供にて、讃岐の屋島の館をば御出ありて、高野の御山へ参らせ給ひて、御出家せさせおはし、其の後熊野へ参らせ給ひて、御身を投げてまし／＼候ふところ、御供申したりし舍人武里は申し候ひつれ、と申しければ、北の御方、さればこそ怪しと思ひたればとて、引きかづきてぞ伏し給ふ。若君姫君も、聲々にをめき叫び給ひけり。若君の乳母の女房、涙を抑へて申しけるは、是は今更歎かせ給ふべからず、本三位の中將殿のやうに、生きながら捕はれて、京鎌倉に耻を辱させ給ひなば、如何ばかり心憂く候ふべきに、是は高野の御山へ参らせ給ひて、御出家せさせおはし、其の後熊野へ参らせ給ひて、後世の御事能く／＼申

させ給ひて、那智の沖とかやにて、御身を投げまし／＼侍ふところ、歎の中なかつの御悦にては候へ。今は如何にもして、御様を變へ、佛の御名を唱へさせ給ひて、亡き人の御菩提を弔ひ参らせ給へかし、と申しければ、北の方、やがて様を變へ、後世菩提を弔ひ給ふぞ哀れなる。鎌倉殿この由を傳へ聞き給ひて、おはれ隔なく打ち向ひてもおはしたらば、さりととも命ばかりをば助け奉りてまし。その故は故池の禪尼の使として、頼朝流罪に宥められけることは、偏に彼の内府の芳恩なり。その名残にておはすれば、子息達をも全くおろそかに思ひ奉らず。ましてさやうに出家などせられなん上は、子細にや及ふべきとぞ宣ひける。さる程に、平家讃岐の屋島へ渡り給ひて後は、東國より新あらた手の軍兵數萬騎、都に着きて攻め下るとも聞ゆ。又鎮西より、白杵うすき、戸次へつぎ、松浦黨、同心して押し渡るとも聞えけり。彼を聞き此を聞くにも、只耳を驚かし、肝魂を消すより外のことぞなき。女院、北の政所、二位殿以下の女房達、寄り合ひ給ひて、今度

我が方さまに、如何なる憂きことをか聞、如何なる憂き目をか見んずらんと、
 歎きあひ悲みあはれけり。今度一の谷にて、一門の公卿殿上人略討たれ、宗
 徒とさむらひの侍なれば過ぎて亡びにしかば、今は力盡き果て、阿波の民部成能しげよしが兄
 弟、四國の者ども語らひて、きりとも申しけるをぞ、高き山、深き海とも頼
 み給ひける。左る程に、七月二十五日にもなりぬ。女房達はさし集つどひて、去年
 の今日は、都を出てしぞかし、程なくめぐり來にけりとして、俄にあわたしく
 あさましかりし事ども宣ひ出で、泣きぬ笑ひぬぞし給ひける。同じき二十八
 日、都には新帝の御即位ありけり。神璽、寶劍、内侍所なくして、御即位の例、
 人王八十二代、是始とぞ承る。同じき八月六日の日、除目行はれて、大將軍蒲
 の冠者範頼三河の守になる。九郎冠者義經、左衛門の尉になる。即ち使の宣旨
 を蒙りて、九郎判官とぞ申しける。さる程に、萩の土風もやうく身にしみ、
 萩の下露もいよく繁く、怨むる蟲の聲々、稻葉うち戦そよぎ、木の葉かつ散るけ

しき、物思はざらんだに、更け行く秋の旅の空は悲しかるべし。まして平家の
 人々の心のうち、推し量られてあはれなり。昔は九重の雲の上にて、岩の花を
 弄もてあそび、今は屋島の浦にして秋の月に暮む。凡さやけき月を詠じても、都の今
 宵如何ならんと思ひやり、涙を流し、心をすましてぞ明し暮させ給ひける。左
 馬の頭行盛、

君住めば、こゝも雲井の月なれどなほ戀しきは都なりけり

さる程に、同じき九月十二日、大將軍三河の守範頼、平家追討のためにとて、
 西國へ發向す。相伴ふ人々、足利の藏人義兼、北條の小四郎義時、齋院の次官すけ
 親義、侍大將には、土肥の次郎實平、子息彌太郎遠平、三浦の介義澄、子息の
 平六義村、龜山の庄司次郎重忠、同じく長野の三郎重清、相良さかの十郎義連、和
 田の小太郎義盛、佐々木の三郎盛綱、土屋の三郎宗遠、天野の藤内遠景、比企ひき
 の藤内朝宗、同じき藤四郎能員よしかず、八田の四郎武者朝家、安西の三郎秋益、醍醐

の三郎實秀、中條の藤次家長、一品坊しやうげん章玄、土佐坊正俊、是等を先として都合その勢三萬餘騎、都を立ちて播磨の室にぞつきにける。平家の大將軍には、小松の新三位の中將資盛、同じき少將有盛、丹後の侍從忠房、侍大將には越中の次郎兵衛盛綱、上總の五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清を先として、五百餘艘の兵船に乗り連れて漕ぎ來り、備前の兒島に著くと聞えしかば、源氏やがて室を立ちて、是も備前の國西川尻、藤戸に陣をぞ取りたりける。さる程に、源平兩方陣を合はす。陣のあはひ、海の表、僅二十五町ばかりをぞ隔てたる。源氏心は猛く思へども、舟なかりければ力及ばず、徒に日數をぞ送りける。同じき二十五日辰の刻ばかり、平家の方のはやり男おとこの兵共、小舟に乗りて漕ぎ出し、扇をあけて、源氏こゝを渡せやとぞ招きける。源氏の方の兵ども、如何せんといふ所に、近江の國の住人、佐々木の三郎盛綱、二十五日の夜に入りて、浦の男を一人かたらしひ、直垂、小袖、大口おほぐち、白鞘卷などをとらせ、賺し仰せて、此の

海に馬にて渡しぬべき所やある、と問ひければ、男申しけるは、浦の者ども幾らも候へども、案内知りたるは稀まれに候ふ。知らぬ者こそ多く候へ。此の男は案内よく存じて候ふ。たとへば、川の瀬のやうなる所の候ふが、月頭つきがしらには、東に候ふ、月の末には西に候ふ、件くだんの瀬のあはひ、海の面、十町ばかりも候ふらん、是は御馬などにては、容易く渡らせ給ふべし、と申しければ、佐々木いざさらば渡して見んとて、彼の男と二人紛れ出で、裸はだかになり、件の川の瀬のやうなる所を渡りて見るに、實けにもいたく深くはなかりけり。膝、腰、肩に立つ所もあり、鬢の濡るゝ所もあり、深き所を泳およぎて、浅き所に泳ぎつく、男申しけるは、是より南は、是より遙に浅く候ふ、堅き矢先を揃へて待ち參らせ候へ所に、裸はだかにては如何にも叶はせ給ひ候ふまじ。只是より歸らせ給へといひければ、佐々木實けにもとて歸りけるが、下郎は何處どこともなきものにて、又人にも語らばれて、案内もや教へんずらん、我ばかりこそ知らめとて、彼の男を刺殺

し、首掻き切りてぞ捨てしける。明くる二十六日の辰の刻ばかり、又平家の方のはやり男の子の兵共、小舟に乗りて漕ぎ出し、扇をあげてこゝを渡せとぞ招きたる。こゝに江の國の住人、佐々木の三郎盛綱、かれて案内は知りたり、しげめゆひ磁目結の直垂に緋威の鎧着て、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍を置きて乗りたりけり。家の子郎等、共に七騎打ち入りてわたす。大將軍三河の守範頼是を見給ひて、あれ制せよ止めよと宣へば、土肥の次郎實平、鞭鎧を合せて追ひ付き、いかに佐々木殿は、物の憑きて狂ひ給ふか、大將軍よりの御許されもなきに、止り給へと言ひけれども、佐々木耳にも聞き入れず、渡しければ、土肥の次郎も制しかれて、共に漕ぎてぞ渡しける。馬の草わき、むながひ鞆つくし、太腹に立つ所もあり、鞍壺越す所もあり、深き所を泳がせて、浅き所に打ちあがる。大將軍是を見給ひて、佐々木にたばかりぬるは、浅かりけるぞ、渡せや渡せと下知し給へば、三萬餘騎の兵ども、皆打ち入りて渡す。平家の方には是を見て、

舟どもを押し浮べし、矢先を揃へて、さしつめ引きつめ、散々に射けれども、源氏の方の兵ども、是を事ともせず、かぶと甲の鍔を傾け、熊手、なにかま薙鎌を以て、敵の舟を引き寄せし、をめき叫びて戦ふ。一日戦ひくらし、夜に入りければ、平家の舟は沖に浮び、源氏は兒島の地に打ち上りて、人馬の息をぞ休めける。明ければ、平家は讃岐の屋島へ漕ぎ退く。源氏心は猛く思へども、舟なかりければ、やがて漕ぎても攻めず。昔より馬にて河を渡す兵多しといへども、馬にて海をわたすこと、天竺震旦は知らず、我朝には希代のためしなりとて、備前の兒島を佐々木に賜ふ。鎌倉殿の御教書にも載せられたり。

大嘗會の沙汰の事

同じき二十八日、都には又除日行はれて、九郎判官義經五位の尉になされて、九郎大夫の判官とぞ申しける。さるほどに、十月にもなりぬ。屋島には浦吹く風も烈しく、浪打つ波も高かりければ、兵攻め來らず。商客の行き通ひも稀に

して、都の傳も聞かまほしく、空播き曇り、霰うち散り、いとど消え入る心地ぞせられける。都には大嘗會あるべしとて、十月三日の日、新帝の御禊の行幸ありけり。内辨をば、徳大寺殿勤めらる。一昨年先帝の御禊の行幸には、平家の内大臣宗盛公勤めらる。節下の櫛舎について、前に龍の旗立て、居給ひたりしけしき、冠際、袖のかゝり、うへの袴の裾までも、殊に勝れて見え給へり。其の外三位の中將知盛、頭の中將重衡以下、近衛司御綱に候はれしには、又立ち並ぶ方もなかりしぞかし。今日は力郎大夫の判官義經先陣に供奉す。是は木曾などには似ず、以の外に京慣れたりしかども、平家の中の選り層よりも猶劣れり。同じき十八日、大嘗會式の如く行はる。去ぬる治承養和の比よりして、諸國七道の人民百姓等、或は平家のために惱まれ、或は源氏のために亡さる。家産を捨て、山林に交り、春は東作の思ひを忘れ、秋は西收の營にも及ばず。如何にして、かやうの大禮など行はるべきなれども、さてしもあるべき事なら

ねは、式の如くぞ送げられける。大將軍三河の守範頼、やがて續きて攻め給はし、平家は容易く亡ぶべかりしに、室、高砂にやすらひ、遊君遊女ども召し集め遊び戯れてのみ、月日を送り給ひけり。東國の大名小名多しといへども、大將軍の下知に従ふことなれば、力及ばず、只國の費、民の煩のみありて、今年も既に暮れにけり。

平家物語卷十終

平家物語卷十一

逆櫓の事

元暦二年正月十日の日、九郎大夫の判官義経院参して、大藏卿泰経の朝臣を以て奏聞せられけるは、平家は神明にも放たれ奉り、君にも捨てられ参らせて、帝都を出で、波の上に漂ふ落人おちうととなれり。然るをかの三箇年が間攻め落さずして、多くの國々を、塞げられぬることこそ口惜しう候へ、今度義経に於ては、鬼界、高麗、契丹、雲のはて、海のはてまでも平家を亡さざらん限りは、王城へ歸るべからざる由、奏聞せられたりければ、法皇大に御感ありて、相構へて夜を日につぎて、勝負を決すべきよし仰せ下さる。判官宿處にかへりて、東國の侍共に向ひて宣ひけるは、今度義経こそ院宣を承り、鎌倉殿の御代官として、

平家追討のために西國へ發向すなれ。陸は駒の蹄の通はんを限り、海は櫓櫓のたゞん慮まで攻め行くべし。それに少しも子細を存ぜん人々は、これより疾くく鎌倉へ下るべし、とぞ宣ひける。さるほどに屋島には、隙行く駒の足早くして、正月もたち、二月にもなりぬ。春の草暮れて、秋の風に驚き、秋の風やみて、又春の草にもなれり。送り迎へて、既に三年になりけり。平家讃岐の屋島へ渡り給ひて後も、東國新事の軍兵數萬騎、都に着きて攻め下るとも聞ゆ。又鎮西より臼杵、戸次、松浦黨同心して、押し渡るとも聞えけり。彼を聞き是を聞くにも、唯耳を驚かし、肝魂を消すより外のことぞなき。女院北の政所、二位殿以下の女房達、さしつどひ給ひて、今度我が方さまに、如何なる憂き事をか聞き、如何なる憂き目をか見んずらんと、嘆き合ひ悲み合はれけり。中にも新中納言知盛の卿の宣ひけるは、東國北國の兇徒等も、随分重恩を蒙りたりしかども、忽に恩を忘れ契を變じて、頼朝義仲等に随ひき。まして西國

とても、さこそはあらんずらめと思ひしかば、唯都の内にて、いかにもならせ給へと、さしも申しつるものを、我身一つの事なれば、心弱くあこがれ出て、今日にかゝる憂き目を見る口惜しさよ、とぞ宣ひける。誠に理と覺えて哀れなり。さるほどに二月三日の日、九郎大夫の判官義經都を立ちて、攝津の國渡邊福島兩所にて船揃し、屋島へ既に寄せんとす。兄の三河守範頼も、同日に都を立ちて、是も津の國神崎にて兵船揃へて、山陽道へ赴かんとす。同じき十日の日、伊勢石清水へ官幣使を立てらる。主上、並に三種の神器、事故なく都へ返し入れ奉るべき由、神祇官の官人、諸の社司、本宮本社にて祈請申すべき旨仰せ下さる。同じき十六日、渡邊福島兩所にて揃へたりける船どもの、纜既に解かんとす。折節北風木を折りて、烈しく吹きたりければ、船ども皆打ち損ぜられて、出すに及ばず。修理のために、その日は止りぬ。さる程に、渡邊には東國の大名小名寄り合ひて、抑々我等船軍のさまは未だ訓練せず、

如何せんと評定す。梶原進み出て、今度の船には、逆櫓を立て候はゞやと申す。判官逆櫓とは何ぞ。梶原、馬は駈けんと思へば駈け、引かんと思へば引き、弓手へも馬手へも廻し易く候ふが、船はさやうの時、屹度押し廻すが大事にて候へば、櫓邊に櫓を立てちがへ、脇楫を入れて、どなたへも廻し易き様にし候はゞや、と申しければ、判官先づ門出の悪しきよ、軍には一引も引かじと思ふだに、あはひ悪しければ、引くは常の習ひなり。まして左様に逃げ設けなんに、なじかはよかるべき。殿原の船には、逆櫓をも、かへさま櫓をも、百丁千丁も立てたまへ。義経は只元の櫓にて候はんと宣へば、梶原重ねて、よき大將軍と申すは、駈くべき所をも駈け、引くべき所をも引き、身を全くして敵を亡すを以て、よき大將とはしたり候。左様に片趣なるをば、猪武者とて、よきにはせずとこそ申せ。判官、猪のし、鹿のしは知らず、軍は只ひらせめに攻めて、勝ちたるぞ心地はよきと宣へば、東國の大名小名、梶原に畏れて、高くは

笑はれども、目ひき鼻ひきさゝめきあへり。其の日判官と梶原と、既に同士軍せんとす。されども軍はなかりけり。判官船どもの修理して、新しくなりたるに、各一種一瓶して、祝ひたまへ殿原とて、いとなむ體にてもなし、船に兵糧米積み、物具入れ、馬ども立てさせ、船とく仕れと宣へば、水主楫取ども、是は順風にて候へども、普通には少し過ぎ候。沖はさぞ吹きて候ふらんと申しければ、判官大に怒りて、海上に出て浮びたる時、風強ければとて止るべきか。野山の末にて死に、海川に溺れて失するも、皆是前世の宿業なり。向風に渡らんといはゞこそ、義経が非事ならめ。順風なるが、普通に少し過ぎたればとて、是程の御大事に、船仕らじとはいかてか申すぞ。船頭仕れ、仕らずば、彼奴原一々に射殺せ、者ども、とぞ下知し給ひける。承りて候ふとて、伊勢の三郎義盛、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信、同じき四郎兵衛忠信、江田の源三、熊井太郎、武藏坊辨慶などいふ、一人當千の兵ども、御説にてあるぞ船頭仕れ。仕らずば

己ばら一々に射殺さんとして、片手矢はげて駈せ廻る間、水主楫取ども、こゝにて射殺されんも同じ事、風強^{こは}くは、沖にてはせ死^{じに}にも死ねや者共とて、二百餘艘が中よりも、只五艘出てゝぞ走りける。五艘の船と申すは、先づ判官の船、次に田代^{たしろ}の冠者の船、後藤兵衛父子、金子兄弟、淀の郷内忠利とて、船奉行の乗りたる船なりけり。残りの船は梶原に恐るゝか、風に怖^{おそ}づるかして、出でざりけり、判官、人の出でればとて止るべきにあらず。常の時は、敵も恐れて用心すらん。かゝる大風大波には、思ひもよらぬ所へ寄せてこそ、思ふ敵をば討たんずれとぞ宣ひける。判官各の船に^{かざり}箒^{かざり}なともしそ、火數多く見えば、敵も恐れて用心してんずぞ。義經が船を本舟として、臚邊の箒を守れとて、終夜わたる程に、三日にわたる所を、只三時ばかりにぞ走りける。二月十六日丑の刻に、津の國渡邊福島を出て、明くる卯の刻には、阿波の地へこそ吹きつけしれ。

勝浦合戦の事

明けければ渚には赤旗少々ひらめきたり。判官、すは我等が設をばしたりけるぞ、渚近くなりて、馬ども追ひ下さんとせば、敵^まの的^{まと}になりて射られなんず。渚近くならぬ先に、船ども乗り傾けし、馬ども追ひ下し、船に引きつけ引きつけ^{おこ}遊^{あそ}がせよ。馬の足立鞍^{くらつめかわ}爪乾きたる程にもならば、ひたくと打ち乗りて、駈けよ者どもとぞ下知し給ひける。五艘の船には兵糧米積み、物の具入れければ、馬數九十餘疋立ちたりける。案の如く渚近くなりしかば、船ども乗り傾けし、馬ども追ひ下し、船に引きつけし、遊がす。馬の足立鞍づめ乾きたる程にもなりしかば、ひたくと打ち乗りて、判官五十餘騎、をめきて先をかけ給へば、渚に控へたりける百騎ばかりの兵共、暫しもたまらず二町ばかり、さと引きて控へたり。判官渚に上り、人馬の息を休めておはしけるが、伊勢の三郎義盛を召して、あの勢の中にさりぬべき者あらば、一人具して参れ尋ねべき事ありと宣へば、義盛畏り承りて、百騎ばかりの勢の中へ、只一騎か

け入りて、何とかいひたりけん、年の齡四十ばかりなる男の、黒革威の鎧着たるを、甲を脱がせ、弓の弦はづさせ、降人に具して参りたり。判官あれは何者ぞと宣へば、當國の住人坂西の近藤六親家と名のり申す。判官假令何家にてもあらばあれ、しやつに目離すな、物具な脱がせそ。やがて屋島への案内者に具せんずるぞ。逃げて行かば射殺せ、者ども、とぞ下知し給ひける。判官、親家を召して、爰をば何といふぞと問ひ給へば、勝浦と申し候ふ。判官笑ひて、色代なと宣へば、一定勝浦候ふ。下藤の申しやすきまゝに、かつらとは申せども、文字には勝浦と書きて候ふと申しければ、判官斜ならず悦び給ひて、あれ聞きたまへ殿原、軍しに向ふ義経が、勝浦につくめてたさよ。若し此邊に平家の後矢射つべき仁は、誰かあると宣へば、阿波の民部重能が弟、櫻間の介能遠とて候ふと申す。いざさらば、蹴散らして通らんとて、近藤六が勢の百騎ばかりが中より、馬や人をすぐりて、三十騎ばかり、我勢にこそ具せられけれ。能遠が

城に押し寄せて見給へば、三方は沼、一方は堀なり。堀の方より押し寄せて、関をどつとぞ作りける。城の内の兵ども、只射取れや射取れとて、さしつめ引きつめ、散々に射けれども、源氏の兵ども、是を事ともせず、堀を越え、甲の鏝を傾けて、をめき叫びて攻めければ、能遠叶はじと思ひけん。家子郎等共に防矢射させ、我身は究、竟の馬を持ちたりければ、それに打ち乗り、希有にして落ちにけり。残り止りて防矢射ける兵ども、二十餘人が首切り懸けさせ、軍神にまつり、よろこびの関をつくり門出よしとぞ悦ばれける。

大坂越の事

判官また坂西の近藤六親家を召して、屋島には平家の勢如何程あるぞと問ひ給へば、千騎にはよも候はじと申す。判官、など少きぞ。かやうに四國の浦々島々に五十騎、騎づいさし置かれて候。其上阿波の民部重能が嫡子、田内左衛門教能は、伊豫の國河野の四郎が召せども参らぬを攻めんとて三千餘騎にて伊

豫へ越えて候ふと申す。判官さてはよき隙ござんなれ、是より屋島へは如何程あるぞと宣へば、二日路にて候ふと申す。いざさらば、敵の聞かぬ先に寄せんとて、馳せつ控へつ、駈けつ歩ませつ、阿波と讃岐の境なる大坂越といふ山を、夜もすがらこそ越えさせけれ。其夜の夜半ばかりに、立文持ちたる男一人、判官に行きつれたり。夜のことにてはあり、敵とは夢にも知らず。味方の兵どもの屋島へ参るとや思ひけん、打ち解けて物語をぞしける。判官我も屋島へ参るが、案内を知らぬぞ、尋所せよと宣へば、此男は度々参りて案内よく存じて候ふと申す。判官さて其の文は何處より何方へ参らせらるゝぞと宣へば、是は京より女房の屋島の大内殿へ参らせられ候ふ。さて何事にやと問ひ給へば、別の子細にてはよも候はじ、源氏既に淀川尻に出て浮びて候へば、定めてそれをこそ告げ申され候ふらめ、と申しければ、判官實にさぞあるらん、其の文奪へとて、持ちたる文を奪取らせ、しつづつ搦めよ、罪つくりの頸な斬りそとて、山中の木

に縛りつけさせてこそ通られけれ。判官さかの文をあけて見給へば、誠に女房の文と思しくて、九郎は鋭敏き男なれば、如何なる大風、大波をも嫌ひ侍はで、寄せ侍ふらんと覺え侍ふ。相構へて、御勢共散らせ給はで、能く用ひ心せさせ給へとぞ書かれたる。判官是は義經に天の興へ給ふ文や、鎌倉殿に見せ申さんとて、深く納めてぞ置かれける。明くる十八日の寅の刻に、讃岐の國引田といふ所に落ちつきて、人馬の息をぞ休めける。それより、白鳥、丹生屋、うち過ぎく、屋島の城へぞ寄せ給ふ。判官親家を召して、是より屋島への館は如何様なるぞ、と問ひ給へば、知し召されれば、無下に浅間に候ふ。潮の干候ふ時は、陸と島との間は、馬の太腹もつかり候はずと申す。敵の聞かぬ先に、さらば疾く寄せやとて、高松の在家に火をかけて、屋島の城へぞ寄せられける。さる程に屋島には、阿波の民部重能が嫡子田内左衛門教能は、伊豫の河野の四郎が、召せども参らぬを攻めんとて、三千餘騎にて伊豫へ越えたりしが、

河野をば打ち洩しぬ。家子郎等百五十人が首切りて、屋島の内裏へ参らせたるを、内裏にて賊首の實檢じつけん然るべからずとて、大臣殿の御宿所にて、首どもの實檢しておはしつる所に、者ども高松の在家より火出て來たりとて、ひしめきけり。晝にて候へば、手過てあやまちにてはよも候はじ。いかさまにも、敵の寄せて火をかけたると覺え候ふ。定めて大勢にて候ふらん、取り籠められては叶ひ候ふまじ。疾く／＼船に召よさるべく候ふとて、總門の前の汀に幾らもつけ並べたる船どもに、我も／＼とあわて乗りたまふ。御所の御船には女院北の政所二位殿、以下の女房達召されけり。大臣殿父子は一つ船にぞ乗り給ふ。其の外の人々は思ひ／＼に取り乗りて、或は一町ばかり、或は七八段五六段など、漕ぎ出したる所に、源氏の兵どもひたかぶと七八十騎、總門の前の渚に、いとぞ打ち出でたる。潮干しほひがたの、なりふし潮干ひたる盛さかなりければ、馬の烏頭からすがしらむながひ、鞅あがひつくし、太腹しんろに立つ所もあり。それより淺き所もあり。蹴上ぐる潮の霞と共に時雨

うたる中より、白旗さつと差しあげたれば、平家は運盡きて、大勢とこそ見てけれ。判官敵に小勢と見えじとて、五六騎、七八騎、十騎ばかり、打ち群れ／＼出て來たり。判官その日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫襦濃むらさきの鎧よろいきて、鍬形くわがた打ちたる甲の緒をしめ、金作こがねりの太刀を佩き、二十四さしたる切きりの矢負やぶひ、滋藤の弓の真中取り、沖の方を睨まへ、大音聲をあげて、一院の御使、檢非違使從五位の尉源義經と名のる。次に名のるは伊豆の國の住人田代の冠者信綱、續きて名のるは、武藏國の住人、金子の十郎家忠、同じき興一親範、伊勢の三郎義盛とぞ名のりたる。つゞきて名乗るは、後藤兵衛實基、子息新兵衛の尉基清、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信、同じき四郎兵衛忠信、江田の源三、熊井太郎、武藏坊辨慶などいふ、一人當千の兵ども、聲々に名乗りて馳せ來る。平家の方にはこれを見て、あれ射取れや射取れとて、或は遠矢に射る船もあり。或はさし矢に射る船もあり。源氏の方の兵ども、是を事ともせず、弓手ゆんでになして

は射て通り、馬手めてになしては射て通る。上げ置きたる船どものかけを、馬休所として、をめき叫びて攻め戦ふ。

嗣信最期の事

中にも後藤兵衛實基は、古兵ふるつはものにてありければ、礮の軍をばせず、先づ内裏へ亂れ入り、手に手に火を放ちて、片時の煙と焼き拂ふ。大臣殿、侍どもに、源氏が勢せいは如何程あるぞ、と問給へば、七八十騎にはよも過ぎ候はじ、あな心憂や、髪かみの筋を一筋づゝ分けて取るとも、此勢せいには足るまじかりつるものを、中にも取りこめて討たずして、あわて船に乗りて、内裏を焼かせぬることこそ口惜しけれ。能登殿はおはせぬか、陸に上りて一軍いくさし給へかしと宣へば、承り候ふとて、越中の次郎兵衛盛嗣を先として、都合五百餘人、小船に乗り、焼き拂ひたる總門の前の汀に押し寄せて、陣をとる。判官も八十餘騎、矢比に寄せて扣へたり。平家の方より、越中の次郎兵衛、舟の屋形に進み出て、大音聲を

あげて、抑々以前名乗り給ひつるとは聞きつれども、海上遙に隔りて、その家名實名分明ならず、今日の源氏の大將軍は誰人にてましますぞ、名乗り給へといひければ、伊勢三郎進み出て、あな事もわるかや、清和天皇十代の後胤、鎌倉殿の御弟、大夫の判官殿ぞかし。盛嗣聞きて、さることあり、去んぬる平治の合戦に、父討たれて孤みなしこにてありしが、鞍馬の兒ちごして、後には金商人かねあきうどの所従となり、糧料背負ひて、奥の方へ落ち下りし、其小冠こくわんじや者めが事かとぞいひける。義盛歩ませ寄りて、舌の柔なるまゝに、君の御事な申しそ。さいふ汝人わびとどもこそ、此の國砥並山となみの軍に打ち負け、辛き命生きつゝ、北陸道にさまよひ、乞食して上りたりし、その人かとぞいひける。盛嗣重ねて、君の御恩に飽き充ちて、何の不足ありてか乞食をばすべき。さいふわ人どもこそ、伊勢の國鈴鹿山やまだちにて山立し、妻子をもはぐみ、我身の所従も過ぎけるとは聞きしか。といひければ、金子の十郎進み出て、詮なき殿原せよこんが雑言かな。我も人もそら言ひ

ひつけ、雑言せんに誰かは劣るべき。去年の春、攝津の國一の谷にて、武藏相模の若殿原の手なみの程をば見てしものを、といふ所に、弟の與一、側にありけるが、云はせも果てず、十二束三ぶせ取りてつがひ、能く引きてひやうと放つ。次郎兵衛が鎧の胸板に、裏かく程にぞ立ちたりける。さてこそ互の詞戦は止みにけれ。能登殿、船軍は益あるものぞとて、鎧直垂をば着給はず、唐卷染の小袖に、唐綾威の鎧きて、嚴物作りの太刀を佩き、二十四さしたる鷹護田鳥斑の矢負ひ、滋藤の弓を持ち給へり。王城一の強弓精兵なりければ、能登殿の矢先にまはる者、一人も射落されずといふことなし。中にも源氏の大將軍九郎義經を只一矢に射落さんと覗はれけれども、源氏の方にも心得て、伊勢三郎義盛、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信、同じく四郎兵衛忠信、江田の源三、熊井太郎、武藏坊辨慶などいふ、一人當千の兵ども、馬の頭を一面に立て並べて、大將軍の矢表に馳せ塞りければ、能登殿も力及び給はず。能登殿、そこ退き候へ、

矢面の雜人原とて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。中にも眞先に進みたる、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信は、弓手の肩より馬手の脇へつと射抜かれて、暫しもたまらず、馬より倒にどつと落つ。能登殿の童に、菊王丸といふ大力の剛の者、萌黄威の腹巻に、三枚甲の緒をしめ、打物の鞆をばづして嗣信が首を取らんと飛びてかゝるを、忠信側にありけるが、兄が首を取らせじと、能く引きて、ひやうと放つ。菊王丸が草摺のはづれをあなたへつと射ぬかれて、犬居に倒れぬ。能登殿是を見給ひて、左の手には弓を持ちながら、右の手にて菊王丸を攫みて、船へからりと投げ入れ給ふ。敵に首は取られれども、痛手なれば死にけり。この童と申すは、元は越前の三位通盛の卿の童なり。然るを三位討たれ給ひて後、能登殿にぞ使はれける。生年十八歳とぞ聞えし。能登殿此の童を討たせて、餘に哀はれければ、其の後軍をもし給はず。判官は嗣信を陣の後へ昇き入れさせ、急ぎ馬より飛びて

下り、手を取りて、如何覺ゆる三郎兵衛と宣へば、今はかくこそ候へ。此の世に思ひ置くことは無きかと宣へば、別に何事をか思ひ置き候ふべき。さは候へども、君の御世に渡らせ給ふを見參らせずして、死に候ふこそ心にかゝり候へ。さ候はでは、弓矢取は敵の矢に當りて死ぬること、もとより期する所にてこそ候へ。就中源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひけん者、讃岐の國屋島の磯にて、主の御命にかはりて討たれたりなど、末代までの物語に申されんこそ、今生の面目、冥土の思出にて候へとて、只弱りにぞ弱りける。判官は猛き武士なれども、餘に哀れに思ひ給ひて、鎧の袖を顔に押しあて、さめんとぞ泣かれける。若し此邊に尊き僧やあるとて、尋ね出させ、手負の只今死に候ふに、一日經書きて、弔ひ給へとて、黒き馬の太く逞しきに、よい鞍置きて、彼の僧にぞ賜びにける。此の馬は、判官五位の尉せうになられし時、是をも五位になして、大夫たいふ黒と呼ばれし馬なり、一の谷の後、鶴越をも、此の馬に

てぞ落されける。弟忠信を始として、是を見る侍ども、皆涙を流して、此の君の御爲に命を失はんことは、全く露塵程も惜しからずとぞ申しける。

那須の與一の事

さる程に、阿波讃岐に平家を背きて、源氏を待ちける兵ども、あそこの峰、この洞ほらより、十四五騎二十騎、打ち連れ、馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引き退く所に、沖より尋常に飾りたる小船一艘、汀なづまへ向ひて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横さまになす。あれは如何にと見る所に、船の中より、年の齡十八九ばかりなる女房の、柳いづしぎぬの五衣くれなるに紅の袴きたるが、皆紅の扇の日出したるを、船の脊せがひに挟はさみて、陸へ向ひてぞ招きける。判官後藤兵衛實基を召して、あれは如何にと宣へば、射よとこそ候ふらめ。但し大將軍の矢面に進みて、傾城けいせいを御覽みせられん所を、手垂てたれにねらひて射落せとの謀に

こそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべくもや候ふらん、と申しければ、判官味方に射つべき仁は誰かある、と問ひ給へば、手垂ども多く候ふ中に、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ小兵にては候へども、手ばかり候ふと申す。判官證據があるか。さん候ふ、かけ鳥などを争ひて、三つに二つは心ず射落し候ふ、と申しければ、判官、さらば與一呼べとて召されけり。與一その比は未だ二十ばかりの男なり。褌に赤地の錦を以て、大領、端袖、いろひたる直垂に、萌黄威の鎧きて、足白の太刀を佩き、二十四さしたる截生の矢負ひ、薄截生に鷹の羽割り合せてはいだりける、劔めの鎧をぞさし添へたる。滋藤の弓脇に挟み、甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏り、判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかしと宣へば、與一仕るも存じ候はず、是を射損ずるものならば、長き味方の御弓矢の疵にて候ふべし、一定仕らんずる仁に仰せつけらるべくもや候ふらん、と申しければ、判官大に

怒りて、今度鎌倉を立ちて西國へ向はんずる者共は、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも子細を存ぜん人々は、是より疾く鎌倉へ歸らるべしとぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん、左候はゞ、外れんをば存じ候はず、御説にて候へば、仕りてこそ見候はめとて、御前を罷り立ち、黒き駒の太く逞しきに、まるほや摺りたる金覆輪の鞍置きて乗りたりけるが、弓取りなほし、手綱かきくりて、汀へ向ひてぞ歩ませける。味方の兵ども、與一が後を遙に見送りて、此若者一定仕らんずると覺え候ふ、と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入りたりけれども、猶扇のあはひは、七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。比は二月十八日、酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しく吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。船はゆり上げ、ゆり下る、漂へば、扇も串に定らずひらめきたり。沖には平家、船を一面に並べて見物す。陸には源氏、轡を並

べて是を見る。何れもく晴れならずといふ事なし。與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別しては我國の神明、日光の權現、宇都の宮那須の湯泉大明神、願くば、あの扇の眞中射させて給はせたまへ。是を射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、此矢はづさせ給ふなど、心の中に祈念して、目を開きたれば、風も少し吹き弱りて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與一鎗を取りて番ひ、能く引きてひやうと放つ。小兵といふ條、十二そく三ぶせ、弓は強し、鎗は浦響くほどに、長鳴して、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置きて、ひいふつとぞ射切りたる。鎗は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて海へ颯とぞ散りたりける。皆紅の扇の夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きの沈みぬゆられけるを、泙には平家、鼓を敲きて感じたり。陸には源氏、籠をたよきてどよめきけり。

弓ながしの事

あまりの面白さに、感に堪へずや思はれけん、船の中より、年の齡五十ばかりなる男の、黒革威の鎧きたるが、白柄の長刀杖につき、扇立てたる所に立ちで舞ひすましたり。伊勢の三郎義盛、與一が後に歩ませ寄りて、御説にてあるぞ、是をも又仕れといひければ、與一今度は中ざし取りて番ひ、能く引きてひやうと放つ。舞ひすましたる男の、眞只中をひやうはつと射て、舟底へ眞倒に射仆す。あゝ射たりといふ人もあり、いや／＼情なしといふ者も多かりけり。平家の方には、諍り返りて音もせず。源氏は又籠を敲きてどよめきけり。平家は本意なしと思ひけん、弓持ちて一人、楯つきて一人、長刀持ちて一人、武者三人渚にাগり、源氏こゝを寄せよとぞ招きける。判官安からぬことなり、馬強ならん若黨ども、馳せ寄りて蹴散らせと宣へば、武藏の國の住人美尾の屋の十郎、同じき四郎、同じき藤七、上野の國の住人丹生の四郎、信濃の國

の住人本曾の中次、五騎連れてをめきてかく。先づ楯の陰より、塗篋に、黒州呂はいだる大の矢を持たて、眞先に進みたり。美尾の屋の十郎が、馬の左の鞆つくしを、筈の隠るゝ程にぞ射越したる。屏風を返すやうに、馬ばどうと倒るれば、主は弓手の足を越え、馬手の方へ下り立ちて、やがて太刀をぞ抜きたりける。又楯の陰より大長刀打ち振りてかゝりければ、美尾の屋の十郎、小太刀、大長刀に叶はじとや思ひけん、貝吹きて逃げれば、やがて續きて追ひかけた。長刀にて薙がんずるかと思ひけん、さは無くして、長刀をば弓手の脇にかき挟み、馬手の手をさし延べて、美尾の屋の十郎が、甲の鏝を掴まんとなす。つかまれじと逃ぐ。三度掴みはづして、四度の度むずと掴む。しばしぞたまりて見えし。鉢附の板より、ふつと引き切りてぞ逃げたりける。殘四騎は馬を惜みて、懸けず見物してぞ居たりける。美尾の屋の十郎は、味方の馬の陰に逃げ入りて、息つき居たり。敵は追ひても來ず。其の後甲の鏝をば長刀の先に貫き

高くさし上げ、大音聲をあげて、遠からんものは音にも聞け、近くは目にも見給へ、是こそ京童の呼ぶなる上總の悪七兵衛景清よ、と名乗り捨て、味方の楯の陰へぞ退きにける。平家は少し心地を直して、悪七兵衛討たすな者共、景清討たすな、續けやとて、二百餘人渚にあり、楯を雌鳥羽に突き並べ、源氏こゝを寄せよやとぞ招きたる。判官やすからぬ事なりとて、田代の冠者を先に立て、後藤兵衛父子、金子兄弟を弓手馬手になし、伊勢の三郎を後として、判官八十餘騎、をめきて先を駆けたまへば、平家の方には馬に乗りたる勢は少し、大略徒武者なりければ、馬に當てられじとや思ひけん、しばしもたまらず退き、皆船にぞ乗りにける。楯は算を散らしたるやうに、散々に蹴散らさる。源氏勝に乗りて、馬の太腹疲るゝ程に、打ち入りく攻め戦ふ。舟の中より熊手薙鎌をもちて、判官の甲の鏝にかりりと、打ちかけく二三度しけれども、味方の兵ども、太刀長刀の先にて、打ち拂ひく攻め戦ふ。されども如何はし給ひ

たりけん、判官弓を取り落されぬ。うつぶし、鞭をもちて搦き寄せ、取らん／＼とし給へば、味方の兵共、只捨てさせ給へ／＼と申しけれども、遂に取りて、笑ひてぞ返られける。老どもは皆爪弾きをして、縦令千疋萬疋にかへさせ給ふべき、御たらしなりと申すとも、いかでか御命には替へさせ給ふべきか、と申しければ、判官、弓の惜しきにもとらばこそ、義経が弓といはゞ、二人しても張り、もしは三人しても張り、叔父爲朝などが弓のやうならば、わざとも落して取らすべし。厄弱たる弓を敵の取り持ちて、是こそ源氏の大將軍九郎義経が弓よなど、嘲哂せられんが口惜しさに、命に替へて取りたるぞかしと宣へば、皆又是れぞ感じける。一日戦ひ暮し、夜に入りければ、平家の船は沖に浮び、源氏は陸に打ち上りて、むれ高松の中なる野山に、陣をぞ取りたりける。源氏の兵どもは、此の三日が間は寝ざりけり。一昨日攝津の國渡邊福島を出づるとて、大風大波にゆられてまどろまず。昨日阿波の國勝浦につきて軍し、夜もす

がら中山越え、今日又一日戦ひ暮したりければ、人も馬も皆疲ればて、或は枕にし、或は鎧の袖籠などを枕として、前後も知らずぞ臥しにける。されども其の中に、判官と伊勢の三郎とは寝ざりけり。判官は高き所に打ち上りて、敵や寄すると遠見し給ふ。伊勢の三郎は窪き所に隠れ居て、敵寄せば、先づ馬の太腹射んとて待ちかけたなり。平家の方には、能登殿を大將軍として、その夜、夜討にせんと、仕度せられたりけれども、越中の次郎兵衛と、江見の次郎が先陣を争ふ程に、その夜も空しく明けにけり。寄せたりせば、源氏なじかはたまるべき。寄せざりけるこそ、切めての運のきはめなれ

志度合戦の事

明ければ、平家は當國志度の浦へ漕ぎ退く。判官八十餘騎、志度へ追ひてぞかけられける。平家は是を見て、源氏は小勢なりけるぞ、中に取りこめて討てやとて、千餘人渚にあり、源氏を中に取りこめて、我打ち取らんとぞ進みけ

ある程に、屋島に残り止りたる二百餘騎の勢共、後れ馳せに馳せ來たる。平家これを見て、あはや源氏の大勢の續きたるは、何十萬騎かあるらん、取り籠められては叶ふべからずとて、引き退き、皆船にぞ乗りにける。潮に引かれ、風に任せて、何地をさすともなく、ゆられ行くこそ悲しけれ。四國をば、九郎大夫の判官攻め落されぬ。九國へは入れられず。只中ちゆうちゆう有の衆生しゆじやうとぞ見えし。判官は志度の浦におりぬて、首どもの實檢しておはしけるが、伊勢の三郎義盛を召して、阿波の民部重能が嫡子、田内左衛門教能、伊豫の河野四郎が召せども參らぬを攻めんとて、其の勢三千餘騎にて、伊豫へ越えたりけるが、河野をば討ち漏らしぬ。家いへのこ子郎等百五十人が首切りて、屋島の内裏へ參らせたるが、今日はへ着くと聞く。汝行き向ひて、こしらへて見よと宣へば、義盛畏り承りて、白旗一流賜りて指すまゝに、手勢十六騎、皆白装束しろしやうぞくに出で立ちて馳せ向ふ。さる程に、伊勢の三郎、田内左衛門行き遇ひたり。あはひ一町ばかりを隔

て、互に赤旗白旗打ち立てたり。義盛、教能が許へ使者を立て、且つ聞し召されてもや候ふらん。鎌倉殿の御弟九郎大夫判官殿こそ、平家追討の院宣を承りて、西國へ向はせ給ひて候ふ。其御内に、伊勢の三郎義盛と申す者にて候ふが、軍合戦の料れうにて候はれば、物具をも仕り候はず、弓箭をも帶し候はず、大將に申すべき事ありて、是まで罷り向ひて候ふぞ、明けて入れさせ給へと、いひ送りたりければ、三千餘騎の兵ども、皆中をあけてぞ通しける。伊勢の三郎、田内左衛門に打ち並べていひけるは、且つ聞き給ひても候ふらん。鎌倉殿の御弟九郎大夫の判官殿こそ、平家追討のために、是まで向はせ給ひて候ふが、一昨日阿波の國勝浦に着きて、御邊の伯父櫻間の介殿討ち取り、昨日屋島に着きて軍し、御所ごしょ、内裏だいり皆焼き拂ひ、主上は海へ入らせ給ひぬ。大臣殿父子をば生捕にし參らせて候ふ。能登殿も御自害、其外の人々は、或は御自害、或は海へ入らせ給ふ。餘黨の少々残りたるをば、今朝志度の浦にて皆討ち取り候ひぬ。

御邊の父阿波の民部殿は、降人に參らせ給ひて候ふを、義盛が預り奉りて候ふが、あなむさん、田内左衛門教能が、是をば夢にも知らずして、明日は軍して討たれんずる事のむさんさよと、夜もすがら嘆き給ふが、いたはしさに、告げ知らせ參らせんがために、是まで罷り向ひて候ふぞ、今は軍して討たれ給はんとも、又甲を脱ぎ弓の弦をはづし、降人に參りて、父を今一度見給はんとも、兎も角も御邊の御計らひぞといひければ、田内左衛門、且つ聞くことに少しも違はずとて、甲を脱ぎ弓の弦をはづして、降人にまゐる。大將かやうになる上は、三千餘騎の兵共も、皆かくのごとし。義盛が纒十六騎に具せられて、おめおめと降人にこそなりにけれ。義盛、田内左衛門を相具して、判官の御前に畏りて、此由かくと申しければ、義盛が謀、今に始めぬことなれども、神妙にも仕りたるものかなとて、やがて田内左衛門をば、物具召されて、伊勢の三郎に預けらる。さてあの兵どもは如何にと宣へば、遠國の者どもは、誰を誰とか見

參らせ候ふべき。只世の亂を鎮めて、國を知るしめされんを、主にし參らせんと申しければ、判官此儀尤然るべしとて、三千餘騎の兵どもを、皆我勢にぞ具せられける。さるほどに、渡邊福島兩所に残り止りたりける二百餘艘の船ども、梶原を先として、同じく二十二日の辰の一點に、屋島の磯にぞ着きにける。四國をば、九郎判官攻め落されぬ。今は何の用にか逢ふべき。六日の菖蒲、會にあはぬ花、いさかひ果てゝの乳隈木かな、とぞ笑はれける。判官屋島へ渡り給ひて後、住吉の神主津守の長盛、都へ上り院參して、去ぬる十六日の丑の刻ばかり、當社第三の神殿より鏑矢の聲出で、西をさして罷り候ひぬ。と奏聞せられたりければ、法皇大に御感ありて、御劍以下種々の神寶を、長盛して住吉大明神へ參らせらる。昔神功皇后、新羅を攻めさせ給ひし時、伊勢大神宮より、二神荒御前をさし添へさせ給ひけり。二神御船の體べに立ちて、新羅を易く攻め陣へさせ給ひけり。吳國の軍を誅めさせ給ひて、歸朝の後、一神は攝津の國住